

京都府埋蔵文化財情報

第 32 号

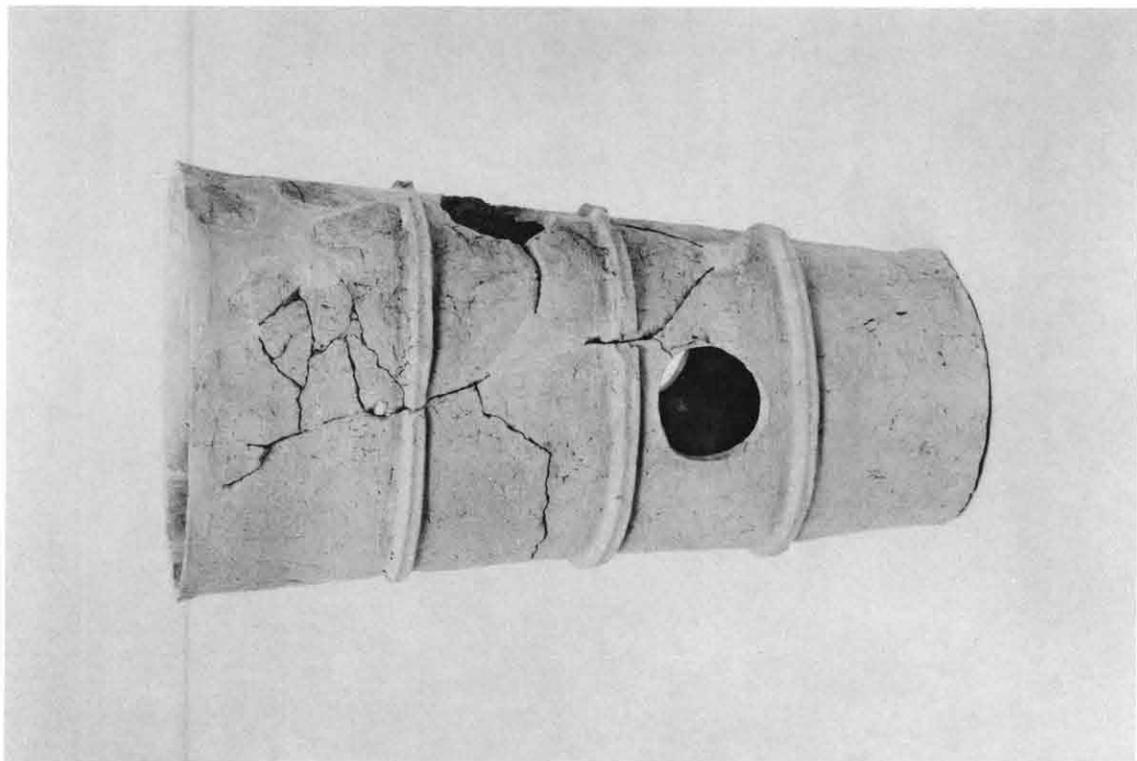
平成元年度発掘調査予定の遺跡	奥村清一郎	1
昭和63年度京都府内埋蔵文化財の調査	水谷 寿克	7
京都府木津町上人ヶ平遺跡の埴輪窯	石井 清司	17
上人ヶ平古墳群の蓋形埴輪	伊賀 高弘	40
—14号墳出土の蓋形埴輪を中心に—		
—昭和63年度発掘調査略報—		
13. 温 江 遺 跡	17. 千代川遺跡第14次	
14. 観 音 寺 遺 跡	18. 内 里 八 丁 遺 跡	
15. 興 遺 跡	19. 木津川河床遺跡	
16. 馬々池東方遺跡	20. 小田垣内遺跡	
資料紹介 私市円山古墳出土の甲冑	鍋田 勇	61
遺跡紹介 43. 銭司遺跡		70
長岡京跡調査だより		73
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧		77
センターの動向		78
受贈図書一覧		80

1989年6月

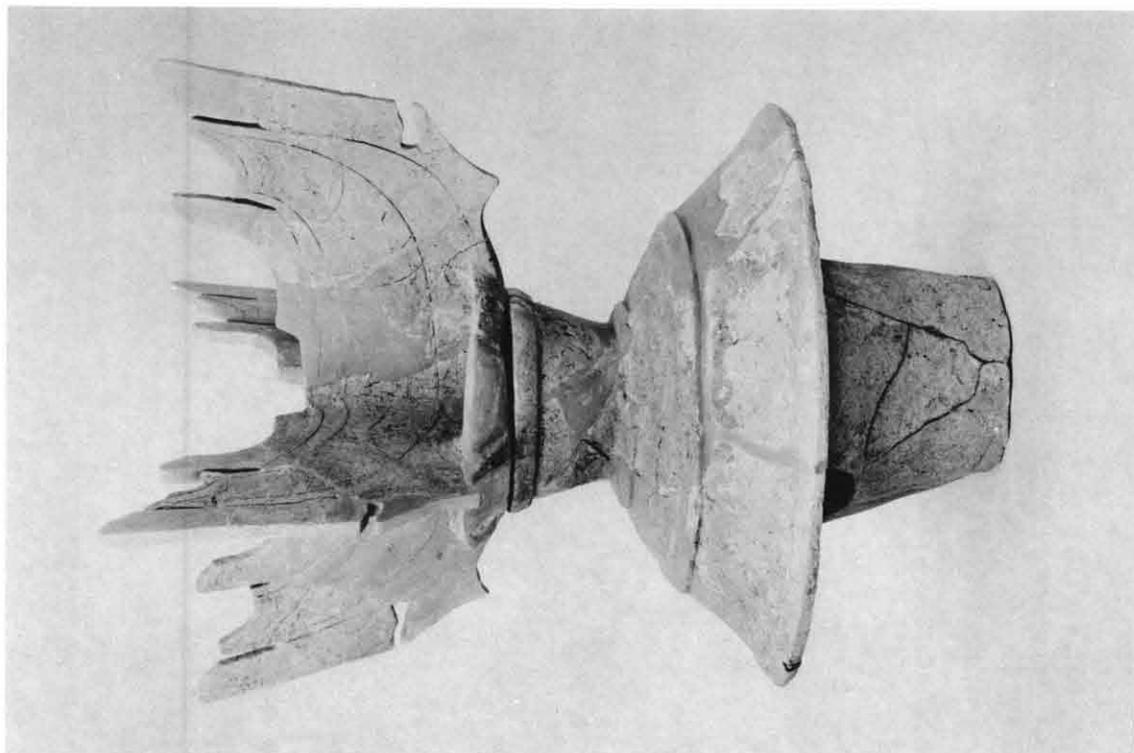
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



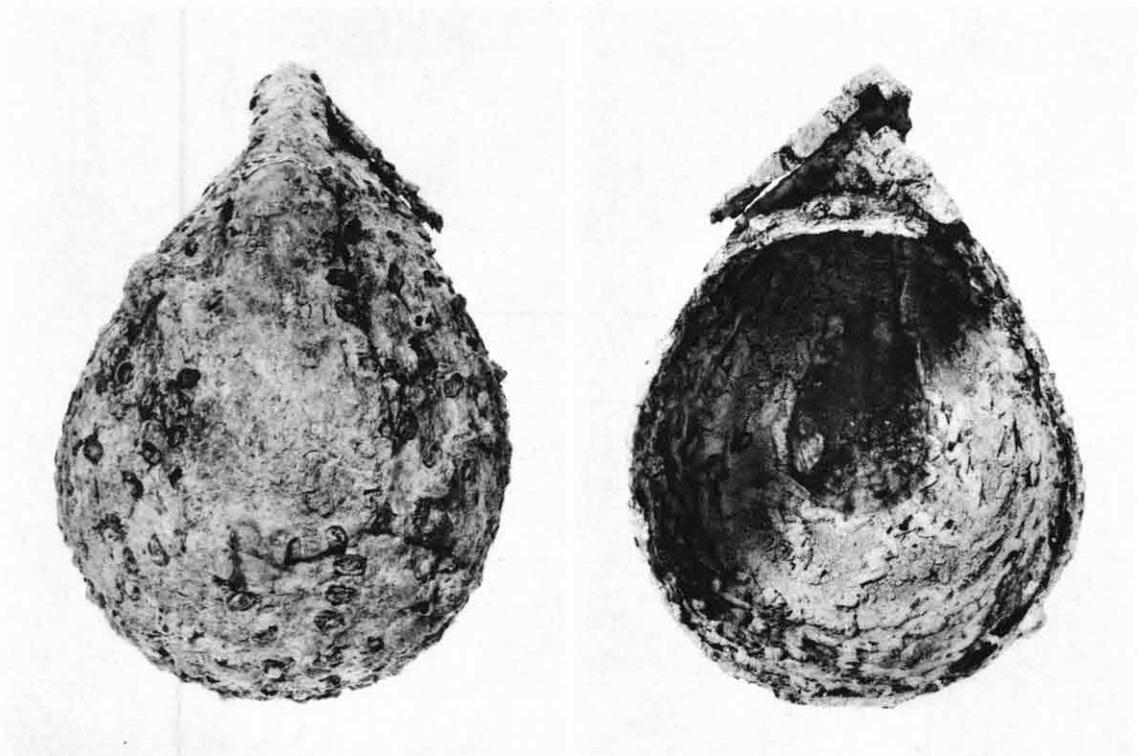
上人ヶ平1号埴輪窯全景（北東から）



(2) 上人ヶ平14号墳出土円筒埴輪

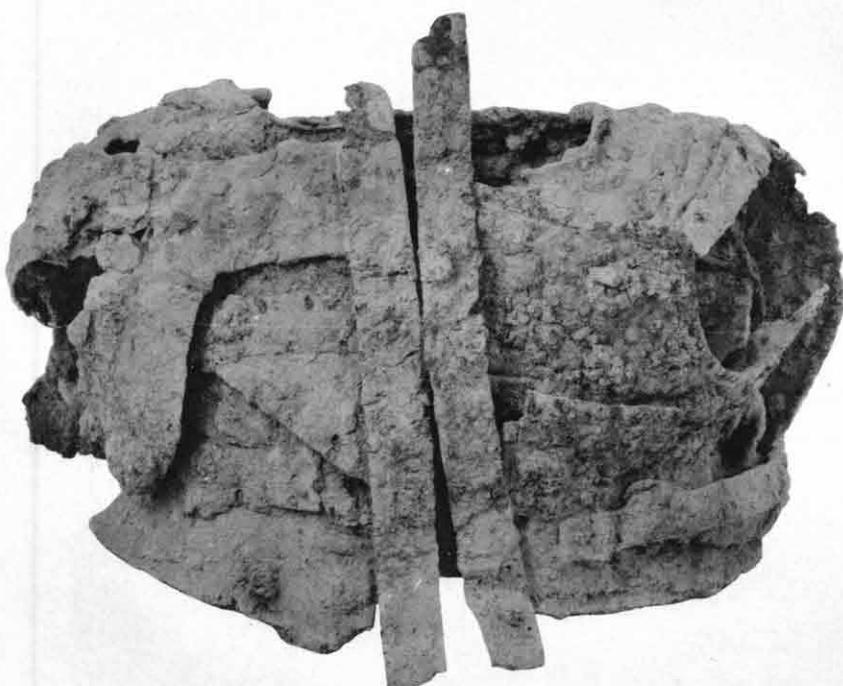


(1) 上人ヶ平14号墳出土蓋形埴輪



(1) 第2主体部出土冑（外面）

(2) 第2主体部出土冑（内面）



(3) 第1主体部出土短甲・付属具

平成元年度発掘調査予定の遺跡

奥村 清一郎

平成元年度に当調査研究センターが予定している発掘調査事業は、別表にしめしたとおり28件、遺跡数にして48件を数える。この28件のうち、27件は発掘調査を行い、残る1件は、遺物整理・報告書作成を行うものである。発掘調査27件を調査原因となる公共事業別に分類・比較すると、例年同様道路建設が最も多く、件数にして17件、調査対象面積にして32,660m²を数える。このほか、施設・庁舎等の建設が4件・4,722m²、農業関連事業が3件・7,100m²、住宅団地造成事業が1件・9,800m²、河川改修工事が1件・3,900m²、学校建設が1件・1,210m²となっている。これらの業務を実施するにあたっての執行体制は、昨年度同様3課6係体制で対応することとなるが、今年度は将来におけるコンピューターの導入を前提とする資料の収集・保管体制の充実を目的として、調査第1課資料係の定員を1名増員して、事務局長以下42名の陣容で臨むことになった(77ページ参照)。以下、今年度調査予定の遺跡について簡単に紹介する。

1 日光寺遺跡は、昨年度の調査では古墳時代の竪穴式住居跡5基や中世墳墓などが検出された日光寺遺跡の一部追加調査のほか、散布地の試掘調査2件を予定している。

2 遠所古墳群は、丹後国営農地開発事業に伴う調査で、遠所遺跡群のほか須恵器窯跡1件、横穴式石室墳1件、経塚1件、小規模古墳群1件の調査が予定されている。このうち、遠所遺跡群は、昨年度に調査した遠所古墳群のある丘陵地の、谷部の斜面を主たる対象として調査を行うもので、遠所古墳群に伴う祭祀遺跡推定地、製鉄炉跡、須恵器窯跡、木炭窯跡、窯状遺構、竪穴式住居跡など多彩な遺跡の調査が予定されている。

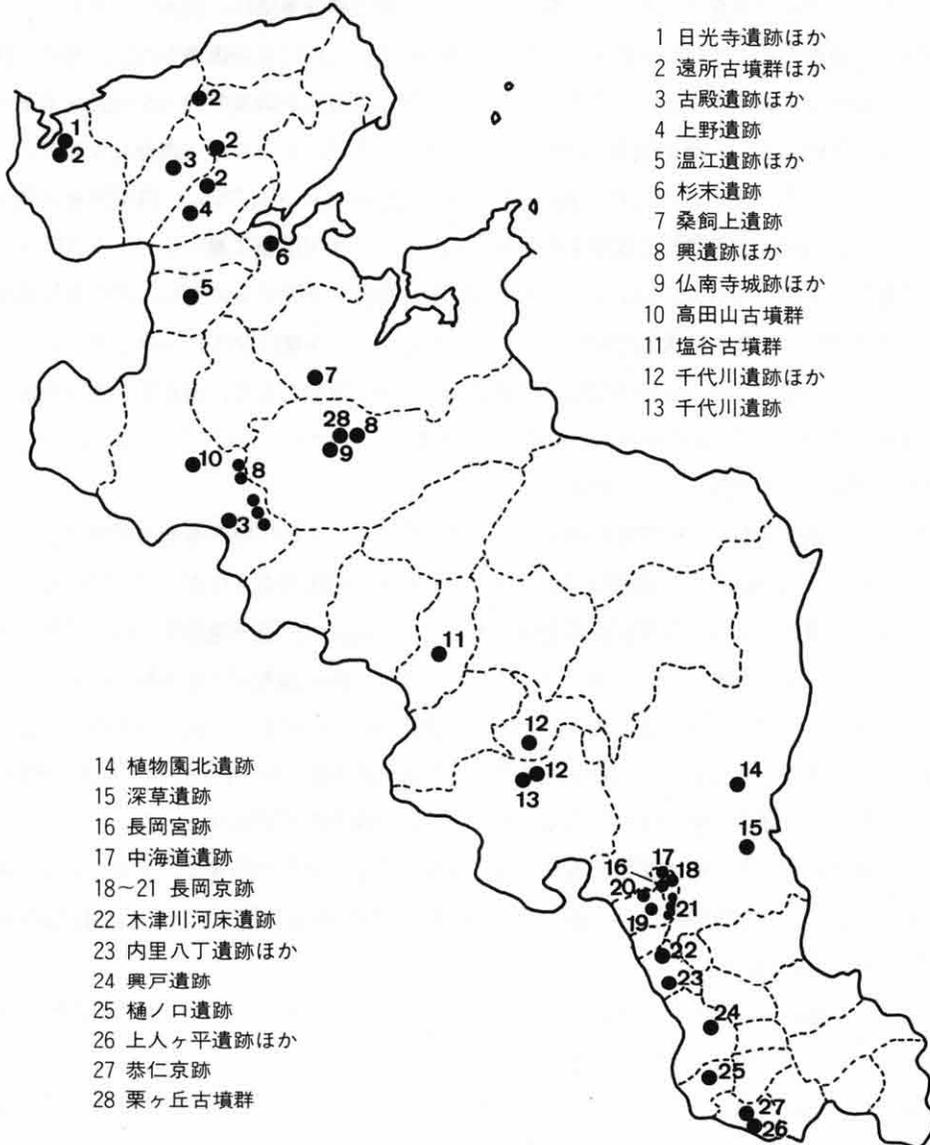
3 古殿遺跡は、府立学校の改築に伴う調査である。過去の調査で、木器の良好な資料を得た古殿遺跡(峰山高校)のほか、中世の遺構・遺物の検出が期待される土師南遺跡(福知山高校)の調査を行う。

4 上野遺跡は、大型石庖丁の出土によって周知されている遺跡である。弥生中期から古墳時代にかけての集落に関する調査成果が見込まれている。

5 温江遺跡は、国道176号線の新設改良工事に伴う調査である。昨年度原位置を保つ梯子が発見され話題となった温江遺跡の北延長部の追加調査と、散布地の試掘調査2件が予定されている。国道176号線関係では、宮津市域においても散布地の試掘調査(6杉末

遺跡) 1件が予定されている。

7 桑飼上遺跡は、由良川の改修に関係するもので、昨年度調査地の上流寄りの地点において面的発掘を行うものである。昭和62年度に実施した試掘調査結果から、弥生後期から奈良時代にかけての集落関係の遺構・遺物が検出されるものと思われる。試掘では、碧玉製管玉の完成品と未成品が採取されており、玉造りに関する調査成果にも期待が寄せられ



平成元年度 発掘調査予定遺跡位置図

平成元年度 発掘調査予定遺跡一覧表

番号	遺 跡 名	種 別	所 在 地	原因工事	調査対象面積	調査予定期間	備 考
1	日光寺遺跡ほか	散 布 地	久美浜町浦明ほか	道路建設	2,000m ²	4～10月	継続
2	遠所古墳群ほか	古 墳 ほか	久美浜町・弥栄町ほか	農地造成	6,000m ²	4～1月	継続
3	古殿遺跡ほか	集 落 跡	峰山町古殿ほか	学校建設		7～9月	新規
4	上野遺跡	集 落 跡	大宮町上常吉	ほ場整備	500m ²	7～8月	新規
5	温江遺跡ほか	集 落 跡	加悦町明石ほか	道路建設	1,400m ²	4～11月	継続
6	杉末遺跡	散 布 地	宮津市杉末	道路建設	300m ²	9～10月	新規
7	桑飼上遺跡	集 落 跡	舞鶴市桑飼上	河川改修	3,900m ²	4～1月	継続
8	興遺跡ほか	集落跡ほか	福知山市・綾部市ほか	道路建設		4～1月	継続
9	仏南寺城跡ほか	城 跡 ほか	綾部市里ほか	道路建設	1,500m ²	7～10月	新規
10	高田山古墳群	古 墳	福知山市庵我中	道路建設	500m ²	10～11月	新規
11	塩谷古墳群	古 墳	丹波町曾根	ため池改修	600m ²	9～11月	新規
12	千代川遺跡ほか (9号B.P.)	集落跡ほか	亀岡市千代川町ほか	道路建設	2,200m ²	4～8月	継続
13	千代川遺跡 (北ノ庄千代川)	集 落 跡	亀岡市千代川町	道路建設		7～11月	新規
14	植物園北遺跡	集 落 跡	京都市左京区	施設整備	500m ²	10～11月	新規
15	深草遺跡	集 落 跡	京都市伏見区	庁舎建設	1,922m ²	1～2月	新規
16	長岡宮跡 (柚原向日)	都 城 跡	向日市寺戸町	道路建設	800m ²	6～7月	新規
17	中海道遺跡	都 城 跡	向日市物集女町	道路建設		9～11月	新規
18	長岡京跡 (JR向日町駅)	都 城 跡	向日市森本町	庁舎建設		5～6月	新規
19	長岡京跡 (開田神足)	都 城 跡	長岡京市開田	道路建設		12～1月	新規
20	長岡京跡(外環)	都 城 跡	長岡京市井ノ内	道路建設	1,900m ²	6～11月	継続
21	長岡京跡ほか (名神)	都城跡ほか	京都市・向日市・長岡京市	道路建設		4～2月	継続
22	木津川河床遺跡	集 落 跡	八幡市八幡源野	下水処理施設建設	2,000m ²	5～9月	継続
23	内里八丁遺跡ほか	集落跡ほか	八幡市内里今福ほか	道路建設		4～2月	継続
24	興戸遺跡	集 落 跡	田辺町興戸犬伏	道路建設	1,500m ²	9～11月	新規
25	樋ノ口遺跡	散 布 地	精華町山田樋ノ口	道路建設		4～6月	継続
26	上人ヶ平遺跡ほか	古 墳 ほか	木津町市坂ほか	団地造成	9,800m ²	4～2月	継続
27	恭仁京跡	都 城 跡	木津町木津	道路建設	260m ²	1～2月	継続
28	栗ヶ丘古墳群	古 墳 ほか	綾部市小呂町	—			整理報告

ている。

8 興遺跡ほかは、近畿自動車道敦賀線建設に伴う緊急調査である。今年度は、弥生中期に始まる集落跡2件(興遺跡・観音寺遺跡)、古墳3件(ヌクモ古墳・小谷古墳・奥大石古墳群)、中世城館跡1件(西山館跡)の発掘調査が予定されている。

9 仏南寺城跡ほかは、西流する由良川の北岸、綾部市青野遺跡の対岸の丘陵地にある中世山城(仏南寺城跡)と由良川に臨む平地にある散布地(里遺跡)の調査を行うものである。

10 高田山古墳群は、中丹広域農道の建設に伴う調査である。方墳2基からなる高田山古墳群に隣接する丘陵頂部平坦面の調査を行うものである。

11 塩谷古墳群は、丹波町にある谷山池の改修用の土取り工事に伴う調査である。独立丘陵上に位置する円墳5基の調査を行う。木棺直葬系の主体部を内蔵する後期前半型の群集墳と思われる。

12 千代川遺跡ほかは、国道9号バイパス建設事業に伴い、亀岡市千代川遺跡と八木町八木嶋遺跡の調査を実施する。千代川遺跡では、推定丹波国府の北西部付近の調査を行うもので、国道9号バイパス関連の千代川遺跡の調査は、本年度で終了することとなる。八木嶋遺跡は、坊田古墳群の所在する谷に位置する古墳時代から中世にかけての遺物の散布地である。

13 千代川遺跡は、府道の新設に伴い遺跡の西部で調査を行うものである。推定国府域の西限から少し西に外れた地点で調査を予定しており、弥生後期の集落に関する調査成果等が見込まれている。

14 植物園北遺跡は、府立植物園からその北方にかけての鴨川扇状地上を占める大規模な集落跡である。これまでに40基を越える弥生～古墳時代の竪穴式住居跡が立会調査などで確認されており、集落関係の調査成果に期待が寄せられている。

15 深草遺跡は、伏見区深草にある警察学校の改築に伴う調査である。

16 長岡宮跡は、向日町警察署の跡地に計画されている道路拡幅工事に伴う調査である。

17 中海道遺跡は、弥生後期から古墳前期にかけての集落遺跡であるが、今回道路拡幅工事に伴い調査を実施するものである。

18～21は長岡京跡およびその下層・上層遺跡を対象とする調査である。18は、JR向日町駅構内において計画されている庁舎建設に伴う調査で、左京一条二坊に関する調査成果が期待される。19は右京五条二坊推定地、20は右京二条二坊推定地においてそれぞれ道路の拡幅・新設に伴い発掘調査がなされるものである。21は、昨年度に着手した名神高速道路の拡幅工事に伴う調査である。長岡京条坊では左京二条三坊から左京六条二坊にかけての条坊関係遺構の検出に期待が寄せられている。また、弥生前期の遺跡として名高い長

岡京市雲宮遺跡，向日市鶏冠井清水遺跡，古墳時代以降の集落跡の向日市芝ヶ本遺跡・鴨田遺跡などの下層遺跡についても成果が期待されている。

22木津川河床遺跡は，八幡市の北部，木津川下流部の沖積平野部にある集落遺跡である。これまでの調査で，弥生後期から古墳後期にかけての竪穴式住居跡群，中世の溝群，近世の地震による噴砂跡などが検出されている。

23内里八丁遺跡ほかは，第2京阪道路建設に伴い，中世を中心とする遺物散布地の八幡市内里八丁遺跡と，弥生後期から奈良時代にかけての遺構・遺物の存在が知られている同新田遺跡の調査を実施するものである。

24興戸遺跡は，綴喜郡田辺町興戸の扇状地上にある，大規模な遺跡である。これまでの調査で，布留式併行期の集落跡，奈良時代の寺院跡(興戸廃寺)，奈良時代の掘立柱建物跡群，中世の土器群などの資料が得られている，町内屈指の複合遺跡である。

25樋ノ口遺跡は，相楽郡精華町の山田川左岸の沖積地にある散布地で，京奈バイパス建設に関連して調査を行うものである。

26上人ヶ平遺跡ほかは，学研都市関連の住宅団地(木津東部地区)造成工事に関連する調査で，上人ヶ平遺跡，瓦谷遺跡，瀬後谷遺跡の3遺跡の調査を計画している。このうち，上人ヶ平遺跡では，台地上において，瓦窯跡(市坂窯跡群)に伴うとみられる奈良期の掘立柱建物跡群の面的発掘を行い，さらに南側の丘陵斜面において昨年新たに発見された埴輪窯の確認調査を行う。瓦谷遺跡では，上人ヶ平埴輪窯跡群の灰原の調査を，谷部で計画している。瀬後谷遺跡では，瓦窯推定地の試掘調査を行う。

27恭仁京跡は，国道163号バイパスに関連して，恭仁京右京の中軸と推定されている作り道の調査を行う。

28栗ヶ丘古墳群は，昭和60～62年度にかけて発掘調査を行った，栗ヶ丘古墳群(横穴群・土壙墓群を含む)の整理・報告書(第13冊)作成を行うものである。

以上に記した発掘調査事業のほか，研修会・講演会・展覧会の開催，『京都府埋蔵文化財情報』の刊行などの普及啓発事業を，京都府教育委員会の補助を得て実施する予定である。研修会は5回予定しており，うち1回はバスを利用して奈良方面の実地研修を計画している。展覧会は「小さな展覧会」と題し，8月中～下旬向日市文化資料館の協力を得て実施する予定である。内容は前年度に当調査研究センターおよびその他の機関が実施した調査の中から主なものをとりあげ，出土遺物および遺跡パネルの展示を行うものである。共同研究事業は，昨年度に引きつづき「京都府の土師器・須恵器研究」をテーマに実施する。今年度は，前年度収集した資料の分類・検討，生産地と消費地との間における交流関係の調査研究を行う予定である。

印刷物の刊行は、例年どおり調査報告書、概報、情報、展覧会パンフレット等を計画している。

以上に記した当調査研究センターの平成元年度事業の実施にあたり、関係各方面の御理解と御協力をお願い申し上げます。

(おくむら・せいいちろう=当センター調査第1課企画係長)

ご 案 内

『京都府弥生土器集成』刊行

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、研究事業の一環として1981年度から、5年にわたって、京都府内の弥生土器集成作業を行い、このたび、下記のとおり『京都府弥生土器集成』を刊行することとなりました。

本書では、総数約1,800個体の弥生土器実測図を掲載し、京都府を丹後・北丹波・南丹波・山城の4つの地域に区分し、各地域における弥生土器の出土遺跡を紹介し、それらの特徴を明らかにしておりますので、ぜひご一読、ご活用下さいませよう、ここにご案内申し上げます。

『京都府弥生土器集成』

編集・発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40-3 Tel075-933-3877

販 売 松香堂書店
A 4判、本文約280ページ、図版76葉

定 価 6,000円(消費税、送料別)

※(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターにて予約申し上げます。

〒617 向日市寺戸町南垣内40-3 Tel075-933-3877

昭和63年度京都府内埋蔵文化財の調査

水谷 寿 克

京都府教育委員会が昭和63年(1月～12月)に集計した京都府内における埋蔵文化財発掘調査は、文化財保護法第57条・同98条の2の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出及び通知件数が188件と、ここ数年増加する傾向にある。近年、内需拡大にともなう、道路建設・住宅建設等の公共事業の大規模開発が府内各地で計画されており、農林水産省近畿農政局による丹後国営農地開発事業、建設省による由良川河川改修・国道9号バイパス建設、日本道路公団による近畿自動車道舞鶴線建設・中央自動車道西宮線(名神自動車道)拡幅、住宅・都市整備公団による関西・文化学術研究都市関連の木津ニュータウン造成など、数遺跡を縦断及び包含する調査も増加している。京都府教育委員会が、「国・公社・公団及び京都府等が行う開発事業に伴う遺跡の発掘調査を実施する」ことを目的として昭和56年度に設立した当調査研究センターでは、昭和63年度の委託契約件数が23件(発掘調査21件、整理報告2件)であり、総計41遺跡の発掘調査を実施した。

なお、昭和63年度の発掘調査地域別件数は、丹後・与謝地域12遺跡、中丹地域13遺跡、南丹・北桑田地域1遺跡、京都市・乙訓地域7遺跡、山城地域8遺跡であり、その調査一覧は付表のとおりである。以下地域毎に主な遺跡の概要を簡単に報告する。

〔丹後・与謝地域〕

当地域の発掘調査は、昭和60年度より実施している丹後国営農地開発計画に伴う団地造成事業による調査(2～9)8件と、一般国道178号・176号・312号の新設に伴う調査(1・10・12)3件、学校建設(11)1件の総計12遺跡の調査を実施した。

日光寺遺跡(1)は、久美浜湾に面する段丘上に広がる集落跡で、今年度2,200m²の調査を実施した。その結果、古墳時代の堅穴式住居跡、奈良・平安時代の掘立柱建物跡、鎌倉時代の墓壇を検出した。また縄文土器や弥生時代の碧玉の原石が出土し注目される。次年度の継続調査が期待される。

アバ田東古墳(2)は、2基の古墳が確認されていたが、アバ田東2号墳については設計変更により保存が図られることになり、1号墳について調査を実施した。しかし後世の削平が著しく、古墳の規模・形態等は判断できなかった。表土中より採取した須恵器より6



昭和63年度 発掘調査実施遺跡位置図

世紀中頃と推定される。

アサバラ遺跡(3)は、昨年度の試掘調査結果により800m²の面的調査を実施した。その結果、古墳時代の竪穴式住居跡4基・土坑・溝等を検出し、また古墳時代から中世にいたる遺跡が出土した。

昭和63年度京都府内埋蔵文化財の調査

付表 昭和63年度 発掘調査実施遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
1	日光寺遺跡	集落跡	久美浜町 浦 明	荒川 史 森島康雄	63. 7. 21 ～元. 1. 21	鎌倉時代の古墓3基、古墳時代中期の竪穴式住居跡5基、奈良時代の掘立柱建物跡
2	アバ田東古墳	古墳	久美浜町 新 庄	荒川 史	63. 4. 19 ～63. 5. 17	古墳時代の木棺直葬墳
3	アサバラ遺跡	集落跡	久美浜町 新 庄	荒川 史	63. 4. 20 ～63. 7. 20	古墳時代の竪穴式住居跡3基、溝、横穴式石室(アバ田東3号墳)
4	鳥取城跡	城館跡	久美浜町 浦 明	森島康雄	63. 4. 21 ～63. 8. 6	弥生時代後期の土坑・溝、室町時代の溝
5	堤谷古墳群	古墳	久美浜町 丸 山	荒川 史	63. 8. 3 ～63. 11. 29	古墳時代中期の木棺直葬墳3基
6	川向1号墳	古墳	久美浜町 大 井	荒川 史	63. 11. 16 ～63. 12. 23	古墳時代後期の横穴式石室墳1基
7	大谷古墳状隆起	古墳	網野町 島 津	中川和哉	63. 6. 1 ～63. 7. 25	遺構・遺物なし
8	遠所古墳群	古墳	弥栄町 木 橋	増田孝彦 中川和哉	63. 6. 1 ～元. 2. 23	古墳時代中・後期の群集墳(木棺直葬墳及び竪穴式横口式石室)22基
9	スクモ塚古墳群	古墳	弥栄町 内 記	増田孝彦 中川和哉	63. 4. 18 ～63. 7. 8	古墳時代中期の木棺直葬墳4基
10	温江遺跡	集落跡	加悦町 温 江	森 正	63. 10. 11 ～元. 2. 25	弥生時代後期の土坑、梯子が出土
11	下畑遺跡	集落跡	野田川町 下 畑	中川和哉	63. 7. 25 ～63. 8. 12	遺構・遺物なし
12	休場古墳	古墳	野田川町 水戸谷	森 正	63. 7. 18 ～63. 9. 14	古墳時代後期の横穴式石室墳
13	桑飼上遺跡	集落跡	舞鶴市 桑飼上	細川康晴 肥後弘幸	63. 4. 12 ～元. 3. 10	古墳時代中期の竪穴式住居跡9基、奈良時代の掘立柱建物跡14棟
14	興遺跡	集落跡	福知山市 興	田代 弘	63. 11. 24 ～元. 3. 15	弥生時代中期の溝・分銅形土製品、鎌倉・室町時代の掘立柱建物跡
15	観音寺遺跡	集落跡	福知山市 観音寺	岡崎研一	63. 11. 24 ～元. 3. 15	弥生時代の溝、鎌倉・室町時代の柱穴
16	私市門山古墳	古墳	綾部市 私市町	竹原一彦 鍋田 勇	63. 4. 11 ～63. 12. 23	古墳時代中期の盛り出しをもつ大円墳、3基の主体部より武器・武具・玉類出土
17	馬場池東方遺跡	散布地	綾部市 私市町	黒坪一樹	63. 11. 7 ～元. 2. 23	顕著な遺構・遺物なし
18	三宅遺跡	集落跡	綾部市 豊里町	竹原一彦	63. 4. 21 ～元. 1. 25	弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代前期の土坑群
19	福垣北古墳群	古墳	綾部市 豊里町	田代 弘	63. 4. 14 ～63. 8. 31	古墳時代中期の古墳4基、うち1基は木棺直葬の主体部を確認
20	館1号墳	古墳	綾部市 館 町	田代 弘	63. 10. 3 ～63. 11. 1	墳丘を削平された古墳
21	赤田遺跡	集落跡	綾部市 位田町	黒坪一樹	63. 5. 19 ～63. 8. 12	古墳時代後期の竪穴式住居跡2基
22	火柴原古墳状隆起	古墳	福知山市 石 原	竹原一彦	元. 2. 1 ～元. 3. 15	遺構・遺物なし、池改修時の盛土
23	青野西遺跡	集落跡	綾部市 青野町	引原茂治	63. 5. 20 ～63. 10. 22	古墳時代前期の竪穴式住居跡5基・溝、平安時代の掘立柱建物跡1棟・溝
24	淵垣城跡	城館跡	綾部市 淵垣町	引原茂治	63. 11. 1 ～元. 1. 27	顕著な遺構・遺物なし(北谷城と改める)
25	岡安城跡	城館跡	綾部市 淵垣町	引原茂治	63. 11. 1 ～元. 2. 17	顕著な遺構・遺物なし(西八田城と改める)
26	千代川遺跡	集落跡	亀岡市 千代川町	小池 寛 嶋島三寿	63. 4. 17 ～元. 2. 17	丹波国府推定地北限の溝、平安時代の掘立柱建物跡3棟、鎌倉時代の掘立柱建物跡・井戸
27	平安京跡	都城跡	京都市 上京区	伊野近富 岩松 保	63. 4. 6 ～63. 8. 10	西洞院通と近衛大路の変遷、戦国時代の便所跡、華南三彩甃
28	長岡宮跡(宮205次)	都城跡	向日市 鶏冠井町	竹井治雄	63. 4. 11 ～63. 6. 29	藤原京期の掘立柱建物跡、長岡京期の掘立柱建物跡・溝
29	長岡京跡(左202次)	都城跡	向日市 上植野町	竹井治雄	63. 8. 1 ～63. 9. 27	長岡京期の掘立柱建物跡・溝・土坑、漆の付着した土器
30	長岡京跡(左200次)	都城跡	長岡京市 馬 場	戸原和人 三好博喜	63. 7. 18 ～元. 3. 10	長岡京推定六条大路の側溝
31	長岡京跡(右306次)	都城跡	長岡京市 粟 生	岩松 保	63. 6. 1 ～63. 7. 24	古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物跡5棟以上
32	長岡京跡(右310次)	都城跡	長岡京市 今 里	石尾政信	63. 7. 5 ～元. 3. 28	長岡京期の西二坊大路東側溝・掘立柱建物跡1棟、木棺4点
33	山崎津跡	官衙跡	大山崎町 山 崎	竹井治雄	63. 11. 8 ～63. 12. 15	平安時代の柱穴、江戸時代の井戸
34	木津川河床遺跡	集落跡	八幡市 八 幡	岩松 保	63. 10. 20 ～元. 3. 1	中世の小溝群、安土・桃山時代の噴砂、古墳時代の竪穴式住居跡
35	内里八丁遺跡	散布地	八幡市 内 里	三好博喜	元. 2. 1 ～元. 3. 8	木津川旧河道
36	小田垣内遺跡	城館跡	田辺町 普賢寺	伊野近富	63. 8. 17 ～元. 3. 11	室町時代の堀・土塁、石仏、骨蔵器
37	上人ヶ平遺跡	集落跡	木津町 市 坂	石井清司	63. 9. 12 ～元. 3. 13	古墳時代中期の古墳8基、古墳時代中期の埴輪窯1基
38	瓦谷遺跡	集落跡	木津町 市 坂	伊賀高弘	63. 4. 19 ～元. 1. 19	上人ヶ平1号埴輪窯の灰原
39	瀬後谷遺跡	散布地	木津町 市 坂	伊賀高弘	63. 11. 21 ～63. 12. 21	丘陵斜面の磁気探査
40	幣羅坂1・2号墳	古墳	木津町 市 坂	石井清司	63. 6. 29 ～63. 9. 26	2号墳は、古墳時代中期の木棺直葬墳、埴輪・鉄器・玉類出土
41	木津遺跡(木津簡裁)	集落跡	木津町 木 津	岩松 保	63. 8. 10 ～63. 10. 4	奈良時代の墓・掘立柱建物跡、近代の製糸工場建物跡

鳥取城跡(4)は、昨年度からの継続調査である。この城跡は山上の平坦地に土塁や石垣を残し、戦国時代末期に丹波守護一色氏の武将粟田内膳正の山城であったと文献にみえるが、調査の結果15世紀初頭まで遡ることが判明した。また城跡以前の遺構・遺物では、弥生時代の溝や柱穴、および久美浜町で初めて旧石器時代のスクレイパーが出土している。

堤谷古墳群(5)は、佐濃谷川をのぞむ丘陵部に位置する。この古墳群は、A支群9基、B支群2基の古墳からなる古墳群であることが判明していたが、今年度はB支群で古墳の存在する可能性がある地点を試掘した結果、新たに4基の古墳を確認し、3基の調査を行った。径18mの円墳、及び一辺10m前後の方墳2基で、内部主体は木棺直葬であった。次年度継続調査を実施する。

遠所古墳群(8)は、昨年度からの継続調査で、古墳22基および古墳に伴う施設を確認した。古墳は、その大半が円墳で、溝により明瞭に区画されていた。埋葬施設は、木棺直葬と横口式石室のものがある。これらの古墳は開口方向・頭位に方向性がみられ、いくつかのグループに分かれる。築造時期は、5世紀末から6世紀後半と推察される。また、古墳群周辺の試掘調査により、須恵器登窯、炭窯、製鉄炉、住居跡等を検出し、丹後地域における一大生産遺跡として注目され、次年度の本格調査が期待される。

スタモ塚古墳(9)は、昭和60・62年度に継続して調査を実施した。古墳群は、竹野川の支流である入山川南岸の丘陵上に位置し、分布調査により46基の古墳を確認している。今回は、円墳1基、方墳3基の調査を行い、5世紀から6世紀後半に築造された古墳群であることが判明した。

温江遺跡(10)は、加悦谷の東側段丘斜面に広がる集落遺跡で、近くには全長150mの大型前方後円墳である蛭子山古墳が存在する。今回約800m²の試掘調査を実施し、弥生時代の竪穴式住居跡や土坑、平安時代の柱穴、溝等を検出した。出土遺物では、顕著なものとして梯子2点がある。その1点は、一辺1.2m×1.6m・深さ約2mの土坑底に立てかけられた状態で検出した。この土坑は、貯蔵穴とも考えられるが、粘土採掘穴の可能性も考えられる。また遺物では、鉄斧柄・鋤先柄など木製品と弥生時代中期から後期にかけての多量の土器が出土した。

休場古墳(12)は、野田川町の通称水戸谷に面する急峻な尾根の先端部に位置し、直径15mの円墳である。埋葬施設は、無袖の横穴式石室で、築造時期は出土遺物から6世紀末頃と推定される。

〔中丹地域〕

当地域の発掘調査は、昭和61年度より実施している近畿自動車道舞鶴線8次区間の調査

(14～22) 9件、昭和60年度より実施している由良川改修に伴う調査(13) 1件、昭和61年度より実施している中丹広域農道に伴う調査(23) 1件、昭和60年度より実施している綾部工業団地造成に伴う調査(24・25) 2件で、いずれも大規模開発にともなう継続調査13件である。

桑飼上遺跡(13)は、由良川の自然堤防上に位置する集落跡で、前年度試掘調査を行い、上下2層より、奈良時代・古墳時代の生活面を検出していた。今回は、約4,000m²の面的調査を実施し、上面から、2間×3間、3間×4間の奈良時代の掘立柱建物跡6棟を検出した。この建物跡は、整然とした規画性をもって建ち並び、柱掘形が方形で大形・柱の径が一般の建物跡に比べ太いことなどから、「豪族の館」あるいは「地方の役所(郡衙など)」と考えられ、当地域での位置付けが注目される。また下面からは、古墳時代中頃の竪穴式住居跡10基を検出している。

興遺跡(14)は、由良川によって形成された沖積地の縁辺部に位置し、自然堤防状の微高地に立地している。当初試掘調査を実施し、北部地区では弥生時代中期の遺構群を、南部地区では弥生時代と中世の遺構群を検出したことから、今年度は南部地区において面的調査を実施した。中世の遺構は、掘立柱建物跡2棟以上、土坑7基、柱穴群を検出し、特に土坑内から短刀、釘、青磁碗等が出土するものや、また木棺の痕跡が認められるものがあるなど墳墓の可能性が考えられる。弥生時代の遺構では、集落を区画する空堀の溝や土坑・柱穴を検出した。次年度は、北部地区で弥生時代中期のほぼ定形に近い分銅形土製品が出土した溝や住居跡等の調査を行う予定であり、その成果が期待される。

観音寺遺跡(15)は、興遺跡の北に立地し、より由良川に接したところに位置する。今回は約2,000m²を対象として1,400m²の試掘調査を実施した。その結果、数条の自然堤防上に、弥生時代から中世にわたる遺構を検出したことから、次年度約4,000m²の面的調査を行い、遺跡の性格を把握する。

私市円山古墳(16)は、標高94mの丘陵上に立地し、福知山盆地を一望のもとに見渡せる極めて眺望のよいところに位置している。前年度より調査を行い、直径71mの円丘に10mの造り出しをもつ全長81mの大円墳であることが判明した。外表施設では、三段築成で人頭大の葺石が約145,000個、円筒埴輪や朝顔形埴輪が約1,500個立て並べてあったと復原推定される。主体部は3基検出し、うち2基は、規模・副葬品ともに酷似し、被葬者どうしが緊密な関係にあったものと推察される。主体部は、2段墓壇・組合せ式木棺で、棺を一部粘土で被覆していた。墓壇内からは、甲冑・胡篋・鉄刀・鉄剣・鉄鏃・農工具・鏡・玉類等多数の副葬品が出土した。特に胡篋は、全国的にも4例程しか形状の判明しているものではなく、金装で一式が判明するものとしては初例である。また甲冑は遺存状況がきわめ

て良好な状態で出土し、三角板革綴短甲、冑、肩甲、頸甲、漆塗革製草摺のセットで検出したものは大阪府黄金塚古墳につき2例目となる。私市円山古墳は、5世紀中頃に築造され、中丹地方の方墳文化圏で突如出現した大円墳であり、墳形・副葬品から大和政権と密接な関係にある首長墓と推察され、地方と大和政権の関係を考えるうえで、きわめて重要な古墳の発見であった。

三宅遺跡(18)は、犀川右岸の段丘上に立地する。前年度より調査を行い、弥生時代中期の方形周溝墓・古墳時代初頭の土坑群・三宅古墳群の周溝・中世の掘立柱建物跡等を検出している。特に土坑は総数約500基以上を数え、壺が埋納されているものがあることから大規模な墓壙群とも考えられるが、良質の粘土が認められることから粘土採掘穴の可能性が強い。

福垣北古墳群(19)は、総数120基を超える以久田野古墳群に北接する11基からなる古墳群である。前年度より調査を行い、方墳2基・円墳5基の調査を実施した。各古墳は、丘陵の自然地形を最大限に利用して墳丘を築いており、いずれも木棺直葬墳であった。今回の調査により、この古墳群が以久田野古墳群の一支群であると考えられ、以久田野古墳群の範囲が若干北西に広がること、築造時期が5世紀前半から始まることなどが明らかとなった。

赤田遺跡(20)は、位田町北西部の山間部に立地し、東には南北朝期の城跡とされる高城山が位置する。当初城館跡として調査を開始したが、郭状の平坦地には遺構・遺物はなく、東側の谷部斜面地で古墳時代の竪穴式住居跡2基を検出した。2基の住居跡は、東側壁面にカマドを有し、伴出する須恵器から、6世紀後半と考えられる。

青野西遺跡(23)は、由良川中流域の自然堤防上に位置し、過去4次にわたる調査により弥生時代から中世に至る複合集落遺跡であることが判明している。今回の調査地は、前年度実施した青野遺跡と旧河道をへだてたところに位置する。検出した遺構は、古墳時代の竪穴式住居跡3基、平安時代の掘立柱建物跡2棟、溝などである。北側に隣接する第1次調査では、竪穴式住居跡15基を検出しており、集落が南に広がっていたことが判明した。

〔南丹地域〕

当地域の発掘調査は、昭和50年度より実施している国道9号バイパス建設にともなう調査(26)1件である。

千代川遺跡(26)は、過去13次にわたる調査で縄文時代から中世に至る複合集落遺跡であることが判明している。またその北半部は丹波国府推定地でもあり、過去の調査により「承和七年三月廿五日」(840年)と記された木簡や「大家」、「小家」、「福敷」などの墨書土器・

緑釉陶器などが出土している。今回の調査では、弥生時代に形成され中世に埋没する自然流路・奈良時代の国府推定地北限の溝・平安時代の掘立柱建物跡・鎌倉時代の建物跡、井戸・中世の条里水田遺構等を検出した。特に拜田丘陵裾部の国府域外に位置する平安時代の建物跡は、一般の集落にはみられない規格性のある大型建物跡で官衙の色彩の強いものであり、また国府北限の溝やその北側から出土した石帯等から、国府域(国衙)を考えるうえで貴重な資料となった。

〔京都市・乙訓地域〕

当地域の発掘調査は、府庁舎建設にともなう調査(27) 1件、法務局庁舎建設にともなう調査(28) 1件、中央自動車道西宮線拡幅にともなう調査(30・33) 2件、学校建設(29) 1件、道路整備改良にともなう調査(31・32) 2件の計7遺跡の調査を行った。

平安京跡関係の調査(27)は、西洞院大路と近衛大路の交差点付近にあたり、西洞院大路の築垣の中心から中心までの幅が当初約24mであったものが、戦国時代では17m、江戸時代では約5mに縮小されるという街路の変遷を知る貴重な成果を得た。また安土・桃山時代には金箔瓦を葺いた建物の存在や、江戸時代の道路面で出土した華南三彩盤、天明の大火(1788年)、嘉永の大火(1855年)にともなう整地層から多量の遺物が出土するなど、その成果は多大であった。

長岡京跡関係の調査は、5件(28～32)実施した。右京第306次調査(31)では、右京二条四坊十二町・十三町に位置するが、長岡京期の遺構は検出されず、長岡京遷都以前の古墳時代後期から飛鳥時代の建物跡と考えられる掘立柱建物跡5棟以上を検出し、近隣に位置する七ツ塚古墳などとの関係が注目される。右京第310次調査(32)では、西二坊大路と二条条間大路の交差点付近に位置し、西二坊大路の東側溝を検出した。今回の調査で、長岡京期に自然流路が丸太材・粘土・礫を用いて路盤の改良工事が施工されていたことが初めて明らかになり、また流路内から多量の土器・木製品に混じって文書様木簡3点が出土した。さらに西二坊大路の辻で検出した石敷きの排水施設をもつ井戸は、遷都前後のようすをうかがえる貴重な資料となった。

他の長岡京関係の調査全般については、本情報の「長岡京跡調査だより」に市町教育委員会が実施した調査も含め詳しく紹介されているので参照されたい。

〔山城地域〕

当地域では、洛南浄化センター建設に伴う調査(34) 1件、第2京阪・京奈バイパスの道路建設に伴う調査(35・36) 2件、住宅・都市整備公団による宅地造成にともなう調査(37

～40) 4件、木津簡易裁判所建設に伴う調査(41) 1件の計8遺跡の発掘調査を実施した。

木津川河床遺跡(34)は、過去5次にわたる調査を行い、木津川の自然堤防上に立地する弥生時代後期から中世にいたる複合集落遺跡であることが判明している。今回の調査では、古墳時代後期の竪穴式住居跡や中世の遺構を多数検出し、また安土・桃山時代の地震の際に生じた噴砂を良好な状態で検出した。

内里八丁遺跡(35)は、木津川により形成された沖積地に広がる遺跡であるが、今回範囲確認のための試掘調査を実施した。その結果、木津川の旧河道もしくは沼地であったものと考えられ、遺跡は北側の内里集落寄りに位置することが判明した。

小田垣内遺跡(36)は、田辺町普賢寺谷に面した丘陵上に位置し、平坦地と土塁・空堀を有する中世城館である。しかし、調査の遂行にともない土塁の中に石造物が埋め込まれていることが明らかとなり、土塁が築かれる以前は、0.5m以上の土壇に石仏を立て、火葬骨を埋めた墓地であることが判明した。時期的には出土遺物より墓地が14世紀から16世紀初頭頃まで、城館が16世紀と推定され、中世の城館と墓地についての様相が把握できる貴重な資料が得られた。

上人ヶ平遺跡(37)は、昭和62年度からの継続調査で、今回は8基の古墳の調査と奈良時代の建物跡・土坑等の調査を実施した。8基の古墳は、造り出し付き円墳である上人ヶ平5号墳を中心に7基の古墳が築かれており、周溝内から多くの埴輪が出土した。主体部はその大半が削平を受けていたが、7号墳・8号墳・16号墳で木棺直葬の痕跡を確認した。

瓦谷遺跡(38)では、田畑部の試掘調査より埴輪窯の灰原を検出した。窯体は上人ヶ平の丘陵斜面に位置することから上人ヶ平1号埴輪窯と命名し、さらに付近の調査を行ったところ今回までに3基の埴輪窯を確認している。今回は1号埴輪窯1基の発掘調査を実施した。窯の規模は、全長6.9m・焼成部幅1.1m・床面傾斜角1.5度を測る。床面は3次にわたって修復を行っており、最終採集面より円筒・朝顔形埴輪のほか家形埴輪が良好な状態で出土した。また灰原内からは、盾、水鳥、馬などの形象埴輪が多数出土した。埴輪窯の調査は、京都府内では初例であり、今後の調査成果が期待される。なお、本情報、上人ヶ平遺跡報文に詳しい。

木津遺跡(41)は、木津町の市街地の大部分を占める遺跡で、奈良時代には平城京の外港として、木津川の水運を利用し、物資の集積を行ったところであり、また恭仁京の推定右京城内でもある。過去5次にわたる調査では、顕著な遺構・遺物は出土していなかったが、今回の調査により、はじめて奈良時代の土坑・掘立柱建物跡など数種の遺構を検出した。また弥生土器が数点出土し、弥生時代の集落が存在する可能性も明らかになった。

以上、昭和63年度の京都府内の調査について、当調査研究センターの調査を中心に概略を述べた。詳細については、各遺跡の概要報告書ならびに末尾に付した『京都府埋蔵文化財情報』・現地説明会資料・中間報告書資料等を参照されたい。なお、今回ふれなかった各市町村教育委員会や関係機関の調査については、京都府教育委員会刊行の『埋蔵文化財発掘調査概報』に毎年、調査概要が紹介されているのであわせて参照されたい。

終わりに、文中で触れた綾部市私市円山古墳については、きわめて重要な成果が得られたことから、地元の方をはじめとして綾部市および京都府の両教育委員会、日本道路公団大阪建設局・同福知山工事事務所等の御努力により、オープンカット工法(丘陵部削平)からトンネル工法に設計変更され、現状のまま保存されることとなった。関係機関の御理解に深く感謝したい。また今後保存整備され、古墳公園として十分に活用されることが望まれる。

(みづたに・としかつ=当センター調査第2課調査第2係長)

『京都府埋蔵文化財情報』掲載遺跡

第29号 1988.9	第30号 1988.12	第31号 1989.3	第32号 1989.6
(9) スクモ塚古墳群 —スクモ塚古墳群 の発掘調査—	(27) 平安京跡 —平安京跡(左京 近衛・西洞院辻) の発掘調査— (12) 休場古墳 —休場古墳の発掘 調査— (16) 私市円山古墳 —私市円山古墳の 発掘調査—	(8) 遠所古墳群 —遠所古墳群の発 掘調査— (13) 桑飼上遺跡 —桑飼上遺跡の掘 立柱建物群—	(37) 上人ヶ平遺跡 —上人ヶ平遺跡の埴輪 窯—上人ヶ平古墳群の 蓋形埴輪(14号墳出土 の蓋形埴輪を中心に) —
—略 報—	—略 報—	—略 報—	—略 報—
1 (2) アバ田古墳群 2 (21) 赤田城館跡 3 (31) 長岡京跡右京 第306次	4 (3) アサバラ遺跡 5 (4) 鳥取城跡 6 (19) 福垣北古墳群 7 (29) 長岡京跡左京 第202次 8 (41) 木津遺跡第6 次	9 (1) 日光寺遺跡 10 (18) 三宅遺跡 11 (24, 25) 北谷城跡 ・西八田城跡 12 (23) 青野西遺跡	13 (10) 温江遺跡 14 (15) 観音寺遺跡 15 (14) 興遺跡 16 (17) 馬々池東方遺跡 17 (26) 千代川遺跡第14次 18 (35) 内里八丁遺跡 19 (34) 木津川河床遺跡 20 (36) 小田垣内遺跡

昭和63年度 現地説明会実施遺跡一覧

遺跡名称	資料番号	開催日
長岡京跡右京第205次 (28)	No. 88-05	1988. 6. 11
スクモ塚古墳群 (9)	No. 88-06	1988. 6. 17
平安京跡 (27)	No. 88-07	1988. 7. 16
休場古墳 (12)	No. 88-08	1988. 9. 9
私市円山古墳 (16)	No. 88-09	1988. 9. 11
福垣北古墳群 (19)	No. 88-10	1988. 9. 28
青野西遺跡 (23)	No. 88-11	1988. 10. 22
桑飼上遺跡 (12)	No. 88-12	1988. 11. 29
日光寺遺跡 (1)	No. 88-13	1988. 12. 9
遠所古墳群 (8)	No. 88-14	1988. 12. 15
千代川遺跡 (26)	No. 89-01	1989. 1. 28
長岡京跡右京第310次 (32)	No. 89-02	1989. 2. 10
上人ヶ平遺跡 (37) [瓦谷遺跡 (38)・幣羅坂古墳 (40)]	No. 89-03	1989. 3. 4
小田垣内遺跡 (36)	No. 89-04	1989. 3. 11

昭和63年度 関係者説明会実施遺跡一覧

遺跡名称	資料番号	開催日
平安京跡 (27)	No. 88-04	1988. 5. 16
アサバラ遺跡 (3)	No. 88-05	1988. 7. 20
長岡京跡右京第306次 (31)	No. 88-06	1988. 7. 21
鳥取城跡 (4)	No. 88-07	1988. 8. 10
長岡京跡左京第202次 (29)	No. 88-08	1988. 9. 27
赤田遺跡 (21)	No. 88-10	1988. 9. 28
福垣城館跡	No. 88-11	1988. 9. 28 (前年度調査)
木津遺跡 (41)	No. 88-09	1988. 9. 29
堤谷古墳群 (5)	No. 88-12	1988. 11. 18
三宅遺跡 (18)	No. 89-01	1989. 1. 25
温江遺跡 (10)	No. 89-02	1989. 2. 3
木津川河床遺跡 (34)	No. 89-03	1989. 2. 21
長岡京跡右京第310次 (32)	No. 89-06	1989. 3. 7
桑飼上遺跡 (12)	No. 89-05	1989. 3. 8
興遺跡 (14)	No. 89-04	1989. 3. 9
長岡京跡左京第200次 (30)	No. 89-07	1989. 3. 10
長岡京跡右京第310次 (32)	No. 89-08	1989. 3. 23

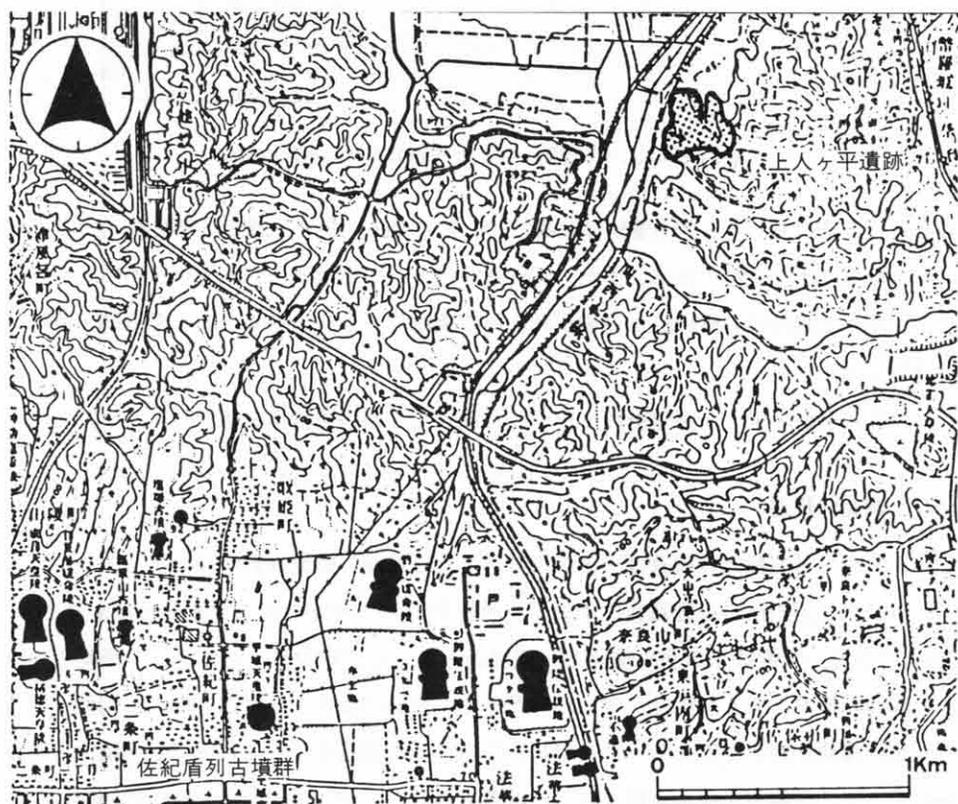
京都府木津町上人ヶ平遺跡の埴輪窯〈図版第1参照〉

石井清司

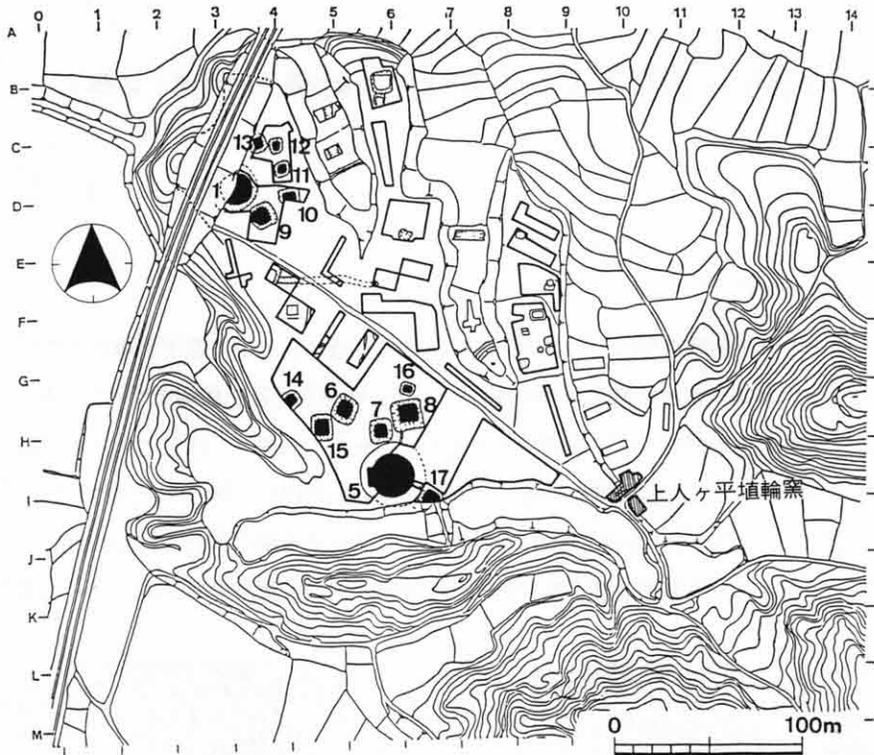
1. はじめに

上人ヶ平1号埴輪窯を含めた木津地区所在遺跡の調査は、住宅・都市整備公団の開発する関西文化学術研究都市の造成事業に先だち、同公団関西支社の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが昭和59年度から継続して実施し、今日に至っている。この5か年の調査では、瓦谷古墳に関連した瓦谷遺跡の埴輪棺^(注1)(川西編年のⅡ期)、興福寺系瓦が出土した中ノ島遺跡^(注2)(梅谷瓦窯の灰原)など注目される遺跡の調査が行われた。

昭和63年度は、上人ヶ平遺跡・瓦谷遺跡・幣羅坂古墳の3遺跡の試掘および発掘調査を



第1図 上人ヶ平遺跡 調査地位位置図



第2図 上人ヶ平遺跡・上人ヶ平埴輪窯跡調査区位置図

行った。このうち、上人ヶ平遺跡は丘陵(台地)上の遺跡であり、調査対象面積は12,000m²以上を測る広大な遺跡である。また、瓦谷遺跡は上人ヶ平遺跡の台地上から西に開く谷部と小丘陵の先端付近の裾に広がる扇状地にある遺跡で、谷部は特に上人ヶ平遺跡と連結した遺跡である。

この瓦谷遺跡と上人ヶ平遺跡にまたがった地点で3基の埴輪窯を確認した。

2. 調査の経過

上人ヶ平1号埴輪窯の調査は、田畑部にある瓦谷遺跡の試掘調査から始まる。

これは、瓦谷21btの試掘調査によって、地表下60cmで炭を含んだ黒褐色土層が厚さ5~35cmにわたって堆積する層を確認し、同層から多くの埴輪が出土した。この黒褐色土層が窯関連の灰原である可能性が考えられたため、急速調査地を丘陵部へ向かう斜面へ拡張し、窯の確認に努め、窯体の一部を確認した。この試掘調査ではこれまでの埴輪窯の調査例からみて、埴輪窯が数基接続することが考えられたため、谷部(瓦谷遺跡)に調査地を拡張したところ、新たに2地点にわたって窯体の一部と灰原を確認した。

以上の試掘調査により、この斜面に3基以上の埴輪窯の存在が明らかとなった。

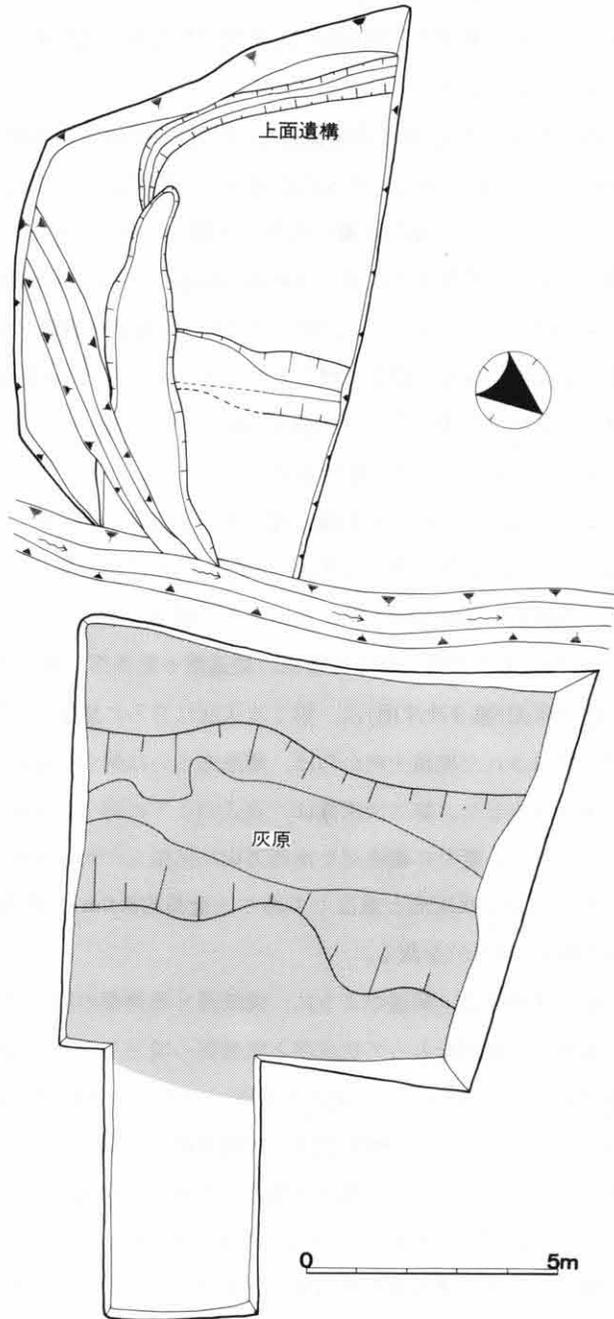
3. 調査の概要

試掘調査の結果、3基の埴輪窯を確認したが、東側で確認した2基の窯(2・3号窯)については、農道が現在も機能しているため調査を行わず、北側の1基(1号窯)のみ、その性格を明らかにするため発掘調査を行った。

1号窯の発掘調査は、試掘調査の結果、明らかとなった灰原の範囲、丘陵斜面で検出した窯体の一部から、窯本体の範囲がある程度予想できたため、窯本体を確認するためのトレンチを約10m×7mの小規模な範囲で設定し、調査を進めた。調査が進むにつれ、窯体の一部(燃焼部)が後世の給水管の埋設工事で、削平を受けていたが、全体に遺存状態が良好な窯であることが明らかになった。

〔1号窯の窯体構造〕

1号埴輪窯は、丘陵斜面をトンネル式にくり抜いた地下式の無段・無階の窖窯で、窯体の検出全長約8.0m(斜距



第3図 上人ヶ平1号埴輪窯 遺構図

離), 幅約1.45mを測る。窯体内は煙道部・焼成部・燃焼部からなり, 煙道部は焼成部端から幅が狭くなり, 焼成部と煙道部の境には比高差約20cmの段を設け, 火桶の役割りを果たしている。焼成部と燃焼部には床面の断ち割りの結果, 3面の床面を検出しており, 燃焼部, 焼成部の床下げが認められる。

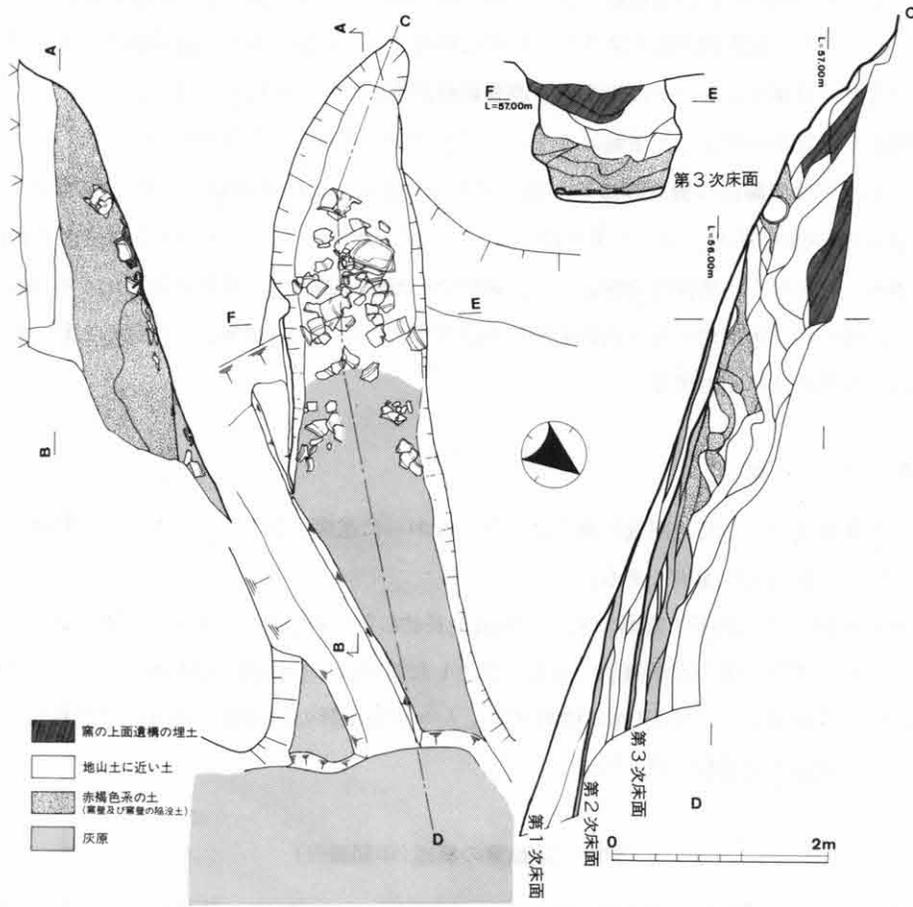
築窯当初の床面(第1次床面)は, 床面傾斜角約20°を測り, 燃焼部最大幅1.45m, 焼成部最大幅1.45mを測る。床面に認められる燃焼部と焼成部の境の段は, この第1次床面では認められず, 床面に堆積した厚い灰原から推定すると, 焼成部の長さは約4mを測る。第1次床面の煙道部は, 第1次床面の精査が次年度以降に持ちこされたため, 今後の調査結果を待たねばならないが, 第3次床面の煙道部に重複するものか, あるいは第2次床面, 第3次床面の修復に際して削平されたものかどうかは明らかでない。第2次床面あるいは第3次床面の修復にさいして削平されたものであれば, 後述する第3次床面の円筒埴輪が転倒した付近にあった可能性がある。

第2次床面は, 第1次床面の焼成部下半部から燃焼部にかけて, 床面の床上げを行ったもので, 第1次床面の焼成部から燃焼部に向け順次厚さを増して堆積している。第2次床面の燃焼部の傾斜角は, 第1次床面の燃焼部の傾斜角よりもゆるくなり, 燃焼部床面の傾斜角は約10°を測る。第2次床面の煙道部と燃焼部の境については不明瞭である。

最終床面(第3次床面)は, 第2次床面にさらに床上げを行ったもので, この床面の床上げに使用された埋積土内からは, 窯壁あるいは焼台と思われる粘土塊の焼き上がったものが多く出土した。第3次床面は, 前述のように第1次床面(あるいは第2次床面)の煙道部をこわして, 新たに煙道部を南西方向に拡張した可能性がある。この第3次床面は, 第1次床面, 第2次床面と重複してあり, 全長約8.0m(斜距離), 焼成部幅1.45m, 焼成部床面の傾斜角約15°を測る。

第3次床面は, 前述のように, 焼成部と燃焼部の境には灰層が堆積しており, この灰層の堆積した範囲をもって焼成部と燃焼部の境とした。この灰層の堆積した燃焼部の範囲は, 長さ約3.0mにおよぶ広い範囲である。この第3次床面の焼成部の範囲を第1次床面からみると, 第1次床面の燃焼部および焼成部の半分までが, 第3次床面では燃焼部として利用したことになる。この第3次床面の燃焼部と焼成部付近の側壁をみると, 他の側壁にくらべて, 高温の火を受けているためか, 還元炎に近いかのような状態で, 灰褐色土で堅緻に焼けている。また第2次床面に廃棄された埴輪が, この第3次床面の焼成部と燃焼部の境付近では, 第3次焼成時の影響を受け, 須恵質状に強く焼かれている埴輪が多い。

第1～第3次床面の各床面を成形する時には, 窯壁の残滓・黄褐色粘質土によるかさ上げとともに, 淡赤褐色砂質土の土を薄く敷いている。



第4図 上人ヶ平1号埴輪窯 窯体図

窯体内に落ち込んだ埋積土内には、半地下式客窯の埋積土にみられるような窯壁の落ち込みは顕著でなく、また、比較的小さな窯壁を観察してもスサ入り粘土はなかった。

窯体の側壁は、断ち割り作業を行っていないため明らかでないが、粘土の貼り付けは認めがたい。

各床面からは、形象埴輪を含む埴輪が出土しており、特に最終床面である第3次床面では、ある程度まとまった状態で埴輪が出土した。

1号窯の灰原は、焚口部から直径約10m以上の範囲にわたって広がっており、特に布留式土器を含む旧流路の凹地に間層を挟んで3層の灰原が堆積しており、床面の修復回数と似た傾向にある。

〔1号窯出土の遺物〕

1号窯では、前述のような各床面から円筒埴輪のほか家形埴輪を含む形象埴輪が出土し

た。また灰原内からは円筒埴輪のほか、家・盾・靱・馬・鶏・蓋などの形象埴輪が出土した。ただ、この灰原内の出土遺物が1号窯に帰属するものか、あるいは隣接する2・3号窯の灰原に帰属するものかは灰原内の調査範囲が狭いため、明らかでない。

現在1号窯から出土した埴輪は水洗い・復原作業を進めている段階であり、図示していないが、円筒埴輪の特徴をみると、第3次床面で検出した円筒埴輪は、口径約26cm・推定器高約45cmを測り、第2・第3段目のタガ間の幅に対して不つりあいな大きさの円形の透かし孔がつく。窯体内で確認した円筒埴輪の器壁の調整は、遺存状態が悪く不明瞭なものが多いが、灰原内からの円筒埴輪片を観察するかぎり、B種横ハケが認められ、川西編年のⅣ期にはほぼ相当する。

4. 小 結

1号埴輪窯は、当初の調査計画では予想しなかった遺構であり、上人ヶ平の古墳群の性格をより明瞭にした遺構である。

1号埴輪窯は、地下式窖窯であり、検出全長約8.0m(斜距離)を測り、前述のように3回にわたって窯の床上げが確認できる。出土した埴輪は、川西編年のⅣ期に相当し、埴輪窯から直線距離にして約150mに位置する上人ヶ平古墳群の14号墳の埴輪に肉眼観察によるかぎり近似した埴輪と思われる。

付載 埴輪窯の集成(中間報告)

上人ヶ平1号埴輪窯の調査を契機として、全国的にみて埴輪窯の調査例が何例あるのか、また窯体構造の地域・時期的な差異などを検討するため、各地域の埴輪窯の報告例を収集した。この作業にあたっては報告書の収集につとめたが、入手しがたいものも多く、網羅しきれていない。ここでは現在までに管見にふれたものをもとに一覧表を作成した。

各報告書では、最近の調査成果も含まれているが、数十年前に報告されたものも含まれており、記述に統一性がない。このため、筆者が理解した範囲で記述を行った。またこの一覧表では時期をⅣ・Ⅴ期に分類した。このⅣ期・Ⅴ期は筆者が川西編年に依拠して記述したが、各地域で埴輪の調整技法等に差異が認められるため、今後修正する資料もありうる。なお、Ⅳ期は5世紀中葉～後半、Ⅴ期は6世紀以降にはほぼ相当する。

〔構築方法〕

埴輪窯は、須恵器窯と同様、トンネル状に丘陵をくり抜いた地下式と丘陵斜面を溝状に掘ったのち、天井部を構築する半地下式窖窯がある。この地下式と半地下式の構築方法の差異には、1つの検討方法として地山土の性質が考えられる。これは各報告書で築窯時の

丘陵の性質(洪積層かどうか等)の記載が少なく、また、私自身も埴輪窯の検出地点に立った例が少ないため明らかにしがたいが、トンネル工法にして地山土が耐えうる地質かどうか問題となる。天井部が陥没しやすい土質であれば地下式窖窯にはしがたい。この地山土の性質とともに考えられるのが時期的変化である。一覧表ではⅣ期の埴輪窯の調査例が少なく、Ⅳ期とⅤ期との比較検討資料に欠けるが、Ⅳ期では福岡県立山山窯1・2号窯、京都府上人ヶ平埴輪窯が地下式構造である。Ⅴ期では、ある地域、ある埴輪窯跡群で地下式構造の窯が集中する例がある(群馬県生出塚窯跡群)が、その多くは半地下式である。

〔平面形態〕

平面形態については地域差が顕著である。

近畿・東海以西では、うなぎの寝床ともいわれるように、燃焼部と焼成部の境が明瞭なものが多く、わずかに煙道部の幅が、上人ヶ平1号埴輪窯のように狭くなり、区画としてみられるものがある。灰原は焚口部から扇形に広がるものが大半である。

近畿以東、特に関東地方では平面形態に差異があり、塩野博・萩原恭一氏は4～5タイプに形態分類されている。

塩野氏の形態分類^(注4)によるとⅠ。「焚口と灰原のプランが隅丸方形を呈し、その長さが焼成部とはほぼ同じ」『馬室タイプ』、Ⅱ。「灰原部が燃焼部とはほぼ直線的に直結し、袋状に浅く掘り込まれており、焚口部との区別が認められない」『公津原タイプ』、Ⅲ。「灰原が長方形プランを呈する」『富沢タイプ』、Ⅳ。「灰原が扇形に広がる」『馬渡タイプ』の4タイプに分かれる。また、萩原氏^(注5)は塩野氏の形態分類に加え、焼成部が弾頭形のものと同方形を示すもの、江南権現山1号窯のように「3の部屋に区別される」窯体構造のものを加えて6タイプに分類されている。

この近畿・東海以西の埴輪窯が比較的統一された窯体構造に対して、東海以東、特に関東地方では数タイプの窯体構造に分かれる。この差異について言及しえる資料はないが、近畿・東海以西では埴輪生産のための專業窯、あるいは須恵器と併用して埴輪を焼成する窯であるのに対し、東海以東では土師器と併用して焼く例が多く、須恵器生産者が関与したものと土師器生産者が関与したものとの差異であるかもしれない。

〔床面構造〕

窯は製品を生産(焼成)して、供給地へその製品を送るためのもので、最終床面で生産品が良好な状態で残る例は非常に少なく、焼成時の状態を把握できる資料も少ない。このような中で一部床面の状況が確認されているものを列記すると、破損した埴輪を製品の焼台として使用したり、あるいは埴輪片を用いて段状施設を設けるもの(栃木県唐沢山ゴルフ場ハニワ窯跡)がある。特異なものとして福岡県立山山窯1号窯では側壁に近い部分に円

筒埴輪の基底部をつなげて「入れ子」状に並べたものが確認されている。また、大阪府日置荘埴輪窯では、埴輪片を破碎し、床面に敷きつめたような遺構が検出された。この床面の構造は、焼成部の燃焼効率を考えたとみられる。

床面は、2～3回の床上げを行っている例が多く、6回の床上げ(大阪府野々上1号窯・馬渡2号埴輪窯)をしたものもある。

〔窯の基数〕

埴輪窯は、数基の窯が接続して築かれる例が多い。大阪府菅田白鳥遺跡は全体の調査はなされていないが、11基以上の窯が接続してある。関東では埼玉県割山遺跡の20基、同生出塚埴輪窯跡の24基などがある。この埴輪窯の基数も窯体構造の差異と同様、東海以西と以东とでは差異がある。東海以西では数基の窯が何mかの間隔で整然と築かれているが、関東地方、特に埼玉県では生出塚埴輪窯に代表されるように、狭い範囲に2～5基の窯が重複してあり、古い窯をこわすかあるいはその一部を利用して新たに築窯しており、最終調査後の平面形態は、数基の窯が重複し、あたかも「ヤツデ」のような形となる。

〔共伴遺物〕

埴輪窯は、埴輪を生産するための窯であるが、共伴遺物にも地域性が認められる。

福岡県立山山窯・島根県平所遺跡・大阪府野々上1号窯・京都府上人ヶ平1号窯などは埴輪のみ窯体および灰原内から出土し、埴輪専業窯と思われる。関東地方では土師器(鬼高期)が共伴する例が多い。また愛知県・三重県では須恵器窯の中に一部埴輪を含めて焼成する例がある。

〔時期〕

各窯の埴輪をみると、立山山窯1号窯・菅田白鳥遺跡・上人ヶ平1号窯などはⅣ期に相当し、他の多くはⅤ期に相当する。このうち、私が調査した上人ヶ平1号埴輪窯からの供給先と思われる上人ヶ平14号墳で、TK208の須恵器無蓋高杯・杯蓋などが出土している。またON46型式の須恵器を生産した東山48(218-I)号窯の須恵器窯でも円筒埴輪が出土しており、前述のⅣ期の埴輪窯は5世紀後半と思われる。関東地方では6世紀以降に埴輪窯がみとめられ、共伴する土師器の編年から7世紀前半に含まれる埴輪窯もある。

〔供給先〕

前述のように、上人ヶ平1号埴輪窯は直線距離約150mにある上人ヶ平古墳群に、その製品の一部分が供給されているものと考えられる。上人ヶ平埴輪窯のように埴輪窯とその供給先である古墳が同時に調査された例としては埼玉県生出塚埴輪窯がある。

他の埴輪窯の調査例では供給先を近接する古墳等により、推定している例が多い。

〔小結〕

埴輪窯は関東地方で検出例が多く、埼玉県では12遺跡100基以上の窯が知られる。これに対して近畿以西では埴輪窯の調査例は少なく、京都府内でも上人ヶ平1号窯跡がはじめての調査例である。

これら東海以西と以東、特に関東地方との比較検討は調査例の多寡により今後変化がみられるが、窯体構造、共伴遺物など地域性がみとめられる。

この地域性の差異は、現在の調査成果からみると、近畿以西で成立した埴輪窯が、時期をおって関東地方へと派生した時間的な変化だけではない。窯体構造に見られるように近畿・東海以西では須恵器窯とよく似た窯体構造で埴輪窯が築かれており、須恵器工人の関与がみとめられるのに対し、東海以東では土師器工人の関与が考えられる。そして各窯が整然と並ぶ近畿以西の埴輪窯に対し、関東地方では「ヤツデ」のように狭い範囲に窯が築かれる例が多い。^(注6)

おわりに

京都府木津町所在の上人ヶ平1号埴輪窯は、埴輪のみを生産するための専業窯であり、須恵器・土師器を同時に焼成する兼業窯ではない。

また、窯体内あるいは灰原から出土した埴輪は、川西編年のⅣ期に相当し、全国的な埴輪窯の時期をみても、比較的古い時期の埴輪窯であり、畿内では菅田白鳥遺跡に続く時期の窯である。

上人ヶ平1号埴輪窯の窯体構造は、須恵器を生産するための窖窯に近似し、何らかの形で須恵器工人の関与が考えられる。

上人ヶ平1号埴輪窯の製品の一部は、直線距離にして約150mに位置する上人ヶ平遺跡の古墳への供給が考えられ、古墳と埴輪窯を考える上で重要な遺跡である。

上人ヶ平埴輪窯を含めた上人ヶ平遺跡の調査は、今後も調査の継続が予定されており、新たな展開が予想されるが、ここでは埴輪窯のみについて概要説明を行った。

本文執筆にあたっては、伊野近富・伊賀高弘・小山雅人・奥村清一郎より助言を得た。また近畿地方の埴輪窯の資料収集には羽曳野市教育委員会笠井敏光氏の、関東地方の埴輪窯の資料収集には埼玉県鴻巣市教育委員会山崎 武氏の協力を得た。記して謝意を表したい。

(いしい・せいじ=当センター調査第2課調査第3係主任調査員)

付表1 埴輪窯跡地名表

遺跡名	所在地	時期	調査有無	窯の構造	窯の規模	出土埴輪	共伴遺物	備考
〈福岡県〉 下の谷窯跡								
立山山窯 1号窯	八女市忠見区	Ⅳ期後半～Ⅴ期	発掘調査	地下式窖窯	全長6.7m 焼成部幅1.9m 床面傾斜角16°(第1次床面)	円筒・人物・家・不明		2～3回の床上げ 第2次床の東壁際に長さ3.4mにわたり、円筒埴輪の基底部をつなげて、「入れ子」状に並べている。 第2次床面の段階で還元焰に焼成。 埴輪は須恵質に近い堅緻なものが多い。
2号窯		Ⅳ期		地下式窖窯	全長6.44m 焼成部幅1.75m 床面傾斜角25°	円筒		円筒片をつきこんで、床面をつきかためる。 遺構の切り合いより2号窯→1号窯
〈山口県〉 大井埴輪窯	阿武郡大井村	?	発掘調査	地下式窖窯	残存長5.14m 焼成部幅1.3m	円筒・盾?		
〈島根県〉 平所遺跡		Ⅴ期?	発掘調査	半地下式?	残存長5.8m 幅1.2～1.55m	円筒・馬・家・鹿・人物		
〈愛媛県〉 谷田1号窯跡	松山市西野町	Ⅴ期?				円筒・家・人物		
〈大阪府〉 野々上窯跡群 1号窯	羽曳野市 野々上	Ⅴ期	発掘調査	地下式窖窯	全長6.5m 焼成部長3.4～4.6m 焼成部幅1.6m 焼成部床面傾斜角10～24°	盾・馬・家		6回の焼成を確認
2号窯			範囲のみ	地下式?	全長5.0m ×幅1.4m	蓋・人物		

京都府木津町上人ヶ平遺跡の埴輪窯

誉田白鳥遺跡 W1号窯 他10基	羽曳野市白鳥	Ⅳ期	一部調査 範囲のみ			盾・家・蓋 ・靱・人物		
土師の里遺跡 内1基 他5基	藤井寺市		一部試掘 平面観察		7.0m×1.5 m			
日置荘遺跡 2号窯	堺市日置荘	Ⅴ期	発掘調査	半地下式	全長7.0m 幅2.0m	円筒・家・ 人物		3面の床面を確認
日置荘西町窯 跡群	堺市日置荘							
百舌鳥梅町窯 跡	堺市	Ⅳ期 ?	発掘調査	半地下式 窖窯		円筒・家・ 人物・猪	土師器 須恵器	
泉ヶ丘町土山	堺市	Ⅴ期			7.2m			
新池窯跡群 10余基内1基 その他	高槻市土室	Ⅴ期	平面観察 調査中	地下式窖 窯	不明	盾・馬・家 ・蓋・人物		
青池南畔窯跡	豊中市上野	Ⅴ期	試掘調査	半地下式	4.5m×2.0 m		須恵器	
桜塚下原窯跡	豊中市桜塚							
松尾池尻	岸和田市	Ⅳ期～ Ⅴ期?						
〈奈良県〉 鳥見山麓	桜井市	?	表面観察	半地下式 か?	?	円筒・形象		
〈京都府〉 上人ヶ平遺跡 1号埴輪窯	木津町市坂	Ⅳ期	調査中	地下式窖 窯	全長8.0m ×1.45m	円筒・家・ 鶏・靱・ 盾・蓋		
2・3号窯		Ⅳ期	試掘	?	?			
徳雲寺窯跡群	園部町小山東	?	分布調査	?			須恵器 ・土師 器	
カマカケ1号 窯	園部町口司	?	分布調査	?				

〈兵庫県〉 那波野丸山3号窯		V期?		半地下式 窖窯				須恵器窯で埴輪を焼く。
〈和歌山県〉 森小手穂埴輪窯跡	和歌山市	Ⅳ期?	試掘			円筒・家・蓋・人物		窯体や明確な灰原は確認されていない。
砂羅谷窯4-II号窯	吉礼	Ⅳ期? ～Ⅴ期	発掘調査	半地下式 窖窯	規模不詳	円筒	須恵器	4-II号窯の上面に須恵器窯である4-I号窯がある。
〈三重県〉 藤谷埴輪古窯跡 (2基)						家・蓋・盾・鶏・不明 形象		
久居2号窯	一志郡久居町	Ⅳ期	灰原のみ 調査			(円筒のみ)	須恵器 (TK23)	
〈愛知県〉 城山2号窯跡 3号窯跡	尾張旭市 城山町	Ⅴ期				円筒・不明	須恵器 (ON-46~ TK208)	
東山111号窯跡	名古屋市 昭和区 伊勝町	Ⅴ期				円筒	須恵器 (TK216~ ON-46)	
東山48号(281-1)号窯跡	名古屋市 千種区	Ⅴ期					須恵器 (ON-46)	
下原2号窯跡		V期				円筒・人物	須恵器 (TK23, 47)	
上向佃3号窯跡						家・円筒	須恵器	
4号窯跡						不明		
水神2号窯跡		Ⅳ期?				人物	須恵器	
〈埼玉県〉 馬室埴輪窯群 1号窯	埼玉県鴻巣市	V期	発掘調査	半地下式 窖窯		円筒・馬形 人物・靱		
2号窯		V期						

京都府木津町上人ヶ平遺跡の埴輪窯

3号窯		V期		半地下式 客窯	焼成部長さ 4.4m 幅1.6m				
4号窯		V期		半地下式 客窯	焼成部長さ 4.1m 幅1.25~1.70m	円筒・人物			
5号窯		V期		半地下式 客窯					
6号窯		V期		半地下式 客窯	現存長4.6 m 焼成部幅 1.5m	円筒・馬形 ・盾形			
桜山窯跡群 1号窯	東松山市 田木桜山	V期	発掘調査	半地下式 客窯	2回の操業				
2号窯		V期		半地下式 客窯	2回程度の 操業	円筒・太刀 形			
3号窯		V期		半地下式 客窯					
4号窯		V期		半地下式 客窯			円筒・馬形		
5号窯		V期		半地下式 客窯			円筒・人物		
7号窯		V期		半地下式 客窯	焼成部幅 1.26m		円筒・馬形		
9号窯		V期		半地下式 客窯			円筒・馬形		
10号窯		V期		半地下式 客窯	焼成部幅 1.95m		円筒		
11号窯		V期		半地下式 客窯			円筒		
12号窯		V期		半地下式 客窯			円筒		
13号窯		V期		半地下式 客窯			円筒		
14号窯		V期		半地下式 客窯					
15号窯		V期		半地下式 客窯			円筒		
16号窯		V期		半地下式 客窯					2枚の灰層

17号窯		V期		半地下式 窖窯		朝顔	高杯	
18号窯		V期		半地下式 窖窯				
19号窯		V期		半地下式 窖窯				
生出塚埴輪窯 跡 A群								
1号窯跡	鴻巣市東	V期	発掘調査	地下式窖 窯	焼成部長さ 2.6m 幅2.1m 傾斜角30°	円筒		円筒埴輪片を焼き台と して使用
2号窯跡		V期			焼成部長さ 幅1.6m 傾斜角30°	円筒・家形		
6号窯跡		V期		地下式窖 窯?	焼成部長さ 3.1m 幅1.2m 傾斜角26°			古墳によって削平され ている
3号窯跡		V期		地下式窖 窯	焼成部長さ 3.12m 幅1.6m 傾斜角28°	円筒	土師器 甕	1回の床上げ 4号窯によって削られ る 円筒埴輪を焼き台とし て使用
4号窯跡		V期		地下式窖 窯	焼成部長さ 4.2m 幅1.54m 傾斜角28°	人物・円筒		1回以上の床上げ 落盤した天井の上に8 号窯の炭化物層が乗っ ている
8号窯跡		V期		地下式窖 窯	焼成部長さ 3.5m 幅0.98m 傾斜角27°	円筒		B群1グループの操業 の終焉の時を示す
9号窯跡		V期			焼成部現存 長1.10m 幅1.58m 傾斜角26°	円筒		1号2号の捨場に破壊 されている
10号窯跡		V期		地下式窖 窯	焼成部長さ 3.3m 幅1.92m 傾斜角37°	円筒・馬		9号窯跡および1号2 号捨場により破壊され ている
7号窯跡		V期		地下式窖 窯	焼成部現存 長3.00m 幅1.50m 傾斜角31°	円筒		

11号窯跡		V期		地下式客窯		円筒		
12号窯跡		V期		地下式客窯	焼成部幅 1.50m	円筒		
5号窯跡		V期		地下式客窯	焼成部幅 1.31m 傾斜角18°	円筒・馬・ 人物		
13号窯跡		V期		半地下式客窯	焼成部現存 長3.11m 幅1.75m 傾斜角11°	円筒		
14号窯跡		V期		地下式客窯	焼成部現存 長2.81m 幅1.58m 傾斜角29°			
15号窯跡		V期		地下式客窯	焼成部現存 長3.02m 幅1.41m 傾斜角16~ 21°	円筒・馬・ 水鳥・蓋・ 家	土師器	
権現坂埴輪窯 (3基) 1号窯	江南町権現坂	V期	発掘調査	地下式?	全長6.50m 焼成部幅 1.5m 傾斜角15°	円筒・馬・ 靱	土師器	窯体は複室構造
2号窯		V期		半地下式?	全長7.6m 傾斜角 約20°	円筒・人物	土師器	
3号窯		V期		半地下式客窯	全長7.0m			
割山遺跡 第1号埴輪窯 址	深谷市	V期	発掘調査	半地下式客窯	現存長 2.4m 焼成部 最大幅 0.8m	円筒		第7号埴輪窯址によっ て切られる
第2号埴輪窯 址		V期		半地下式客窯	現存長 5.9m 現存幅 約1.5m			第5号埴輪窯址によっ て切られる 1回の操業でおわる
第3号埴輪窯 址		V期		半地下式客窯	現存幅 1.2m 床面傾斜角 約10°			第5号埴輪窯址によっ て切られる

第4号埴輪窯址	V期	半地下式 窖窯	現存長 1.5m 現存幅 1.15m 床面傾斜角 11°		
第5号埴輪窯址	V期	半地下式 窖窯	現存長 2.9m 幅 約1.5m 床面傾斜角 0°	円筒・形象	第2・3・7号窯址を切り、第6号窯址によって切られる 2回の操業 窯底を掘り下げたのち埴輪の細片を敷きつめて排水の施設として利用
第6号埴輪窯址	V期	半地下式 窖窯	現存長 1.8m 床面傾斜角 5°		第5号窯址を切り、第4号窯址に切られる
第7号埴輪窯址	V期	半地下式 窖窯	現存長 2.7m		2回の操業
第8号埴輪窯址	V期	半地下式 窖窯	全長 3.8m 焼成部 幅1.7m 床面傾斜角 11.5°	円筒・馬形	最低5回以上の床上げ
第9号埴輪窯址	V期	半地下式 窖窯	全長 4.25m 幅1.45m 床面傾斜角 約5°		灰原・燃焼部は廃棄された粘土採掘坑の窪地を利用 焼成部に埴輪を横に並べて置き、焼台として使用
第10号埴輪窯址	V期	半地下式 窖窯	全長 4.5m 焼成部 幅1.4m	円筒・靱	第9号埴輪窯址に切られ第11号埴輪窯址を切る 燃焼部・灰原は粘土採掘坑の窪地を利用 燃焼部から焼成部にかけて窯底を掘り込み、排水溝として利用 1回のみ操業

京都府木津町上人ヶ平遺跡の埴輪窯

第11号埴輪窯址		V期		半地下式 窖窯		円筒		粘土採掘坑の窪地を利用して灰原を廃棄
第12号埴輪窯址		V期		半地下式 窖窯	現存長 3m 最大幅 1.2m 床面傾斜角 8°	円筒		
和名埴輪窯	吉見町和名	V期	発掘調査				人物・馬	
有勝寺裏窯跡 (3基)	本庄市前山	V期	電波探知 調査					
八幡山窯跡 (2基)	児玉町八幡山	V期						
蛭川窯跡	児玉町蛭川	V期						
姥ヶ沢窯跡 (3基?)	江南町千代	V期						工事に際し確認
赤坂窯跡	本庄市五十子						盾・鬘	工事に伴って焼土と埴輪が出土
宇佐久保窯跡 (12基)	美里町白石							
〈群馬県〉 本郷埴輪窯跡 A号窯	藤岡市本郷	V期						
B号窯		V期						
駒形神社埴輪窯	太田市北金井							
金井口埴輪窯	太田市東金井							
猿田埴輪窯								七輿山古墳のすぐ東側
〈千葉県〉 畑沢埴輪窯	木更津市畑沢	IV期?	発掘調査	地下式窖 窯	全長8.1m (推定) 幅1.4m 床面傾斜角 約22°	円筒・蓋・ 盾・壺		3回以上の窯体の改修
公津原埴輪窯	成田市	V期	発掘調査	地下式窖 窯	全長16.8m 幅1.6m 床面傾斜角 約12°	円筒・家・ 人物		周辺の古墳である船塚古墳に供給されたもの
〈神奈川県〉 白井坂埴輪窯	川崎市	V期						

<p>〈茨城県〉 馬渡窯跡群 (14基) 〈A地区〉 馬渡1号埴輪窯</p>	<p>勝田市 馬渡向野</p>	<p>発掘調査</p>	V期	半地下式 窖窯	全長6.5m 焼成部幅 1.7m	円筒・人物		2回以上の窯底の床上げ
馬渡2号埴輪窯			V期	半地下式 窖窯	全長4.5m 焼成部幅 1.55m	円筒	土師器	
馬渡3号埴輪窯			V期	半地下式 窖窯	全長4.2m 焼成部幅 1.5m	馬形・人物 ・鳥		2回以上の窯底の床上げ
馬渡4号埴輪窯			V期	半地下式 窖窯	全長5.0m	円筒・人物		
馬渡5号埴輪窯			V期	半地下式 窖窯	現存長4.8 m 焼成部幅 1.7m	円筒	土師器	
馬渡6号埴輪窯			V期	半地下式 窖窯	現存長5.2 m 焼成部幅 1.2m	円筒	土師器	窯跡の焼成室・燃焼室 の東西両窯壁に沿って 丸太材が打ち込まれて いる
馬渡7号埴輪窯			V期	半地下式 窖窯	現存長4.8 m 中央幅 1.35m	円筒	土師器	煙道部の床面に補修あり
馬渡8号埴輪窯			V期	半地下式 窖窯	現存長 約3.0m			
馬渡9号埴輪窯			V期		現存長2.4 m 中央幅1.3 m			
<p>〈B地区〉 馬渡1号埴輪窯</p>			V期	半地下式 窖窯	現存長5.4 m 焼成部幅 1.3m	円筒		
馬渡2号埴輪窯	V期	地下式窖 窯	全長7m	円筒		燃焼室は6回の窯底の 床上げ		
<p>〈C地区〉 馬渡1・2号 埴輪窯</p>	V期	発掘調査 半地下式 窖窯	全長7.3m 1号窯 長さ4m 焼成部幅 1.7m 2号窯 焼成部幅 1.3m			1・2号窯が重複して いる 2回以上の窯底の床上げ 2号窯は1号窯を破棄 したのち、1号窯の焼 成部付近を焚口部とし て構築している		

馬渡3号埴輪窯			一部調査				築窯途中で中止している
元太田山埴輪窯跡群 (11基)	太田市			半地下式 窖窯			
陣屋埴輪窯	石下						
小幡埴輪窯	茨城						
〈栃木県〉 唐沢山ゴルフ場 ハニワ窯跡 1号窯		V期	発掘調査	地下式窖 窯？ (推定)	残存長2.2 m 幅1.1m	円筒・人物 ・剣	
2号窯		V期		地下式窖 窯？	築窯当初 長さ5m 平均幅1m 床面傾斜角 約13° 改築時 最大幅1.6 m 床面傾斜角 約3° (床面に約 30cmの埋 土をおこな う)	円筒・靱	1号窯を埋土し、さら に山腹に前進構築した もの 2号窯当初の窯底と廃 棄期の窯底では、かな りその高さに違いが認 められる
3号窯		V期		地下式窖 窯？	全長約5m 平均幅 約1.2m 床面傾斜角 当初約24° 廃窯期 約28°	円筒・人物 ・剣	2期の窯床の床上げが ある 新しい時期には埴輪片 をもちいて段状施設を 設ける
4号窯		V期			現存長3.7 m 中央部幅 1.5m 床面傾斜角 当初28° 廃窯期27° (30cmの 床面の床し 上げ)	円筒・盾・ 剣	廃窯期の床面には埴輪 を用いた段状施設が認 められる

5号窯		V期		地下式客窯？	剣		煙道部の一部を確認
7号窯		V期			円筒		煙道部の一部を確認 埴輪片を用いた段状施設が認められる
8・9号窯		V期		地下式客窯？ 8号窯 現存長4.9m 幅1.4~1.5m 床面傾斜角16° 9号窯 全長6.8m 平均幅1.0m	8号窯 円筒 馬鈴 9号窯 円筒 靱・人物・剣		窯の重複あり（8号→9号） 9号窯は、8号窯を埋めて、さらに山腹へ前進築窯したもの
10号窯		V期		地下式客窯？			煙道部のみ確認 埴輪片を用いて段状施設をもうける
11号窯		V期		地下式客窯			煙道部のみ確認
12号窯		V期	表面観察				
飯塚埴輪窯 (3基)							
〈宮城県〉 富沢窯跡				地下式客窯		土師器	

- 注1 伊賀高弘「木津地区所在遺跡 (i)瓦谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第26冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987年
- 注2 戸原和人「木津地区所在遺跡 (7)中ノ島遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第21冊, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986年
- 注3 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『古墳時代政治史序説』収録 塙書房) 1988年
- 注4 塩野 博「窯跡の構造について」(『馬室埴輪窯跡群』埼玉県教育委員会) 1987年
- 注5 萩原恭一「関東地方の埴輪生産遺跡」(『研究連絡誌』第5号, (財)千葉県文化財センター) 1983年

注6 埴輪窯跡群では上人ヶ平埴輪窯のように数基の窯が丘陵部にある間隔をおいて連接する窯跡群(Iタイプ)と生出塚埴輪窯のように数基の窯が同一地点に重なりあってあり、最終の調査結果では「ヤッデ」のような形になる窯跡群(IIタイプ)がある。この築窯方法の差異を、窯の配置結果のみで考えた場合、数基の窯が同時に操業した可能性のあるものがIタイプの窯であり、IIタイプの窯は同一地点に窯が築かれているため、ある程度の時間幅が想定できる。またIIタイプでは割山遺跡に代表されるように、粘土の採掘坑を利用して窯を築いた例があり、数基の窯が同時に操業していた可能性に疑問の残る窯跡群がある(ただし、IIタイプの窯跡群の各支群では同時操業はありえる)。

このIタイプとIIタイプの築窯方法の差異について考えられることは、現象面のみをみた場合、短期間の操業が考えられるのがIタイプであり、IIタイプは長期にわたる可能性がある。ちなみに、Iタイプの窯跡群の窯の基数では誉田白鳥遺跡・新池窯跡では10数基を最高例とするが、IIタイプの窯跡群の基数は20基以上を数えるものがある。

このIタイプとIIタイプの差異を供給先で考えた場合、操業期間・窯の基数からIタイプではある古墳(あるいは古墳群)に限定して操業した窯であるのに対し、IIタイプは時間幅をもって各地域の古墳(あるいは古墳群)へ供給するための窯であった可能性もある。

窯の燃焼効率をみると、IIタイプは同一地点に窯が重なりあってあるため、築窯方法は簡便かもしれないが、燃焼効率のよさに疑問が残る。この燃焼効率の悪さを備えつつも、IIタイプの窯がある地点に限定して築かざるをえなかった。その規制が、IIタイプの埴輪工人にはあったものと思われる。

〔埴輪窯文献〕

- 立山山窯；小田富士雄『立山山窯跡群』(『八女古窯跡群調査Ⅳ・総集篇』八女古窯跡調査団) 1972年
- 大井埴輪窯；山本 博「長門国大井村発見の埴輪窯について」(『考古学雑誌』第27巻第8号) 1937年
- 平所遺跡；松本岩雄「平所遺跡」(『国道9号線バイパス建設予定地内・埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ, 島根県教育委員会) 1977年
- 谷田1号窯跡；西尾幸則「愛媛県形象埴輪出土地一覧表」(『形象埴輪の出土状況資料』第17回埋蔵文化財研究会) 1985年
- 野々上窯跡群；笠井敏光ほか「古市遺跡群Ⅲ」羽曳野市教育委員会 1982年
- 誉田白鳥遺跡；野上丈助『誉田白鳥遺跡発掘調査概要』(『大阪府文化財調査概要』1971-4, 大阪府教育委員会) 1972年
- 土師の里遺跡；野上丈助「埴輪生産をめぐる諸問題」(『考古学雑誌』第61巻第3号)
- 日置荘遺跡；大阪府教育委員会・大阪文化財センター「日置荘遺跡(その5)」(現地説明会資料) 1988年

- 岡本健一「日置荘遺跡(その5)で検出された埴輪窯」
日置荘西町窯跡；大阪府教育委員会，岡本健一氏の御教示による。
新百鳥梅町窯跡；中村 浩『窯業遺跡入門』（『考古学ライブラリー』13，ニュー・サイエンス社）1982年
- 泉ヶ丘町土山；末永雅雄「和泉陶器村窯跡発掘概要」（『考古学雑誌』第22巻第3号）1932年
新池窯跡群；免山 篤「大阪府高槻市土室の埴輪窯跡」（『古代学研究』62号）1971年
高槻市教育委員会，森田克行氏の御教示による。
- 青池南岬窯跡・桜塚下原窯跡；藤沢一夫・小林行雄「埴輪と祝部の窯跡」（『考古学』第5巻第10号）1934年
『豊中市史』本編1，豊中市
- 鳥見山麓；松本俊吉「大和桜井町鳥見山麓発見の埴輪出土遺跡及び窯址」（『考古学雑誌』第27巻第4号）1937年
- 那波野丸山3号窯；森内秀造氏の御教示による。
森小手穂埴輪窯跡；藤井保夫「和歌山市所在井辺前山古墳とその関連遺跡」（『広域遺跡群細分布調査』I，和歌山県教育委員会）1987年
- 砂羅谷4-II号窯；中村 浩『古代窯業史の研究』柏書房
藤谷埴輪古窯；橋本 滋「藤谷遺跡—埴輪古窯跡」（『津市民文化』第4号）1977年
久居2号窯；児玉高明・山沢義貴『久居窯跡群発掘調査報告』久居古窯址群発掘調査団 1968年
- 下原2号窯跡；愛知県建築部・小牧市教育委員会『桃花台ニュータウン遺跡調査報告，小牧市篠岡古窯址群』1976年
- 城山2号窯跡・3号窯跡・東山111号窯跡；斉藤孝正「猿投窯成立期の様相」（『名古屋大学文学部研究論集』LXXV I—史学29—）1983年
- 上向佃3号窯跡・4号窯跡；猿投町誌編集委員会『来姓遺跡群・上向佃古窯址群』1969年
東山111号窯跡；斉藤孝正「猿投窯成立期の様相」（『名古屋大学文学部研究論集』LXXV I—史学29—）1983年
- 水神2号窯跡；赤塚次郎「愛知県形象埴輪出土地一覧表」（『形象埴輪の出土状況《資料》』第17回埋蔵文化財研究会）1985年
- 東山48(218-I)号窯跡；荒木 実ほか「東山218号窯の古式須恵器について」（『古代人』33，名古屋考古学会）1978年
斉藤孝正「猿投窯成立期の様相」（『名古屋大学文学部研究論集』LXXV I—史学29—）1983年
- 馬室埴輪窯跡；塩野 博・増田逸朗・駒宮史朗『馬室埴輪窯跡群』（『埼玉県埋蔵文化財調査報告』第7集，埼玉県教育委員会）1978年
- 桜山埴輪窯跡；水村孝行・岡村和子ほか『桜山窯跡群』（『日本住宅公団高坂丘陵地区 埋蔵文化財発掘調査報告—VI—』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団）1982年
- 生田塚埴輪窯跡；増田逸朗・山崎 武『生田塚遺跡』（『鴻巣市遺跡調査会報告書』第2集，鴻巣市遺跡調査会）1981年
山崎 武『鴻巣市遺跡群II—生田塚遺跡(A地点)—』（『鴻巣市文化財調査報告』第2集，埼玉県教育委員会）1987年
- 権現坂埴輪窯；小沢国平「江南・権現山埴輪窯址」（『台地研究』No.14，台地研究会）1964年
- 割山遺跡；今泉泰之・大和 修ほか『割山遺跡』（『深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書』深谷市割山遺跡調査会）1981年

和名埴輪窯・有勝寺裏窯跡・八幡山窯跡・姥ヶ沢窯跡・赤坂窯跡・宇佐久保窯跡・本郷埴輪窯跡・駒形神社埴輪窯・金井口埴輪窯・猿田埴輪窯；金井塚良一ほか『討論 群馬・埼玉の埴輪』あさを社 1987年

畑沢埴輪窯；安藤鴻基「千葉県木更津市畑沢埴輪窯跡の調査速報」（『古代』第57号，早稲田大学考古学会）1974年

公津原埴輪窯；『公津原』千葉県企業庁・（財）千葉県地域振興公社 1975年

白井坂埴輪窯；坂詰秀一「神奈川県白井坂埴輪窯跡」（『武蔵野』44-2・3）1965年

馬渡窯跡群；大塚初重・小林三郎『茨城県馬渡における埴輪製作址』（『明治大学文学部研究報告考古学』第6冊）1976年

元太田山埴輪窯跡・陣屋埴輪窯跡・小播埴輪窯跡；若松良一・萩原恭一「埴輪窯址集成」（『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会）1981年

唐沢山ゴルフ場埴輪窯跡；佐野市史編さん委員会編『佐野市史』資料編1 1975年

飯塚埴輪窯・富沢窯跡；若松良一・萩原恭一「埴輪窯址集成」（『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会）1981年

上人ヶ平古墳群の蓋形埴輪〈図版第2参照〉

—14号墳出土の蓋形埴輪を中心に—

伊賀高弘

1. はじめに

昭和63年度の上人ヶ平遺跡の発掘調査によって、遺存状態の良好な埴輪資料を得たのでここに紹介する。

上人ヶ平遺跡は、弥生時代後期から古墳時代中期前半の集落遺構と、古墳時代中期後半から後期前半の古墳群、および奈良時代後半の瓦生産関連遺構を主たる内容とする複合遺跡である。63年度の調査では台地の南半部を対象とし、古墳・奈良時代の遺構・遺物を確認した。特に、前者は古墳を中心とし、調査区内で8基を数える。その内容は、1基の造り出し付き円墳(5号墳)とその周囲に群在する7基の小規模な方墳(6・7・8・14・15・16・17号墳)からなる。いずれも、平坦な台地上に立地するため、周溝(周濠)を掘削し、その内方基台に段築を設けずに盛土して墳丘を築く方法が採られる。埴輪は、古墳の規模に関係なくすべての古墳から出土した。ただ、原位置で確認したのは5号墳(1段目墳丘テラスと外堤)のみで、他は周溝内に転落した状態で出土している。つまり、現地表面に隆起が認められない小形の方墳は、後世の整地・耕作等で墳丘のかなりの部分が削平されており、その際、周溝内に埴輪が落ち込んだものと考えられる。

出土した埴輪は、大部分が普通円筒埴輪であるが、各種の形象埴輪も少なからず存在する。特に後者は、小形の方墳にも高い比率で存在し、当古墳群の特異性を示している。これらの埴輪類は、膨大な量に達し(コンテナ約150箱)、現在整理中であるが、少なくとも形象埴輪に関しては、概ね付表1に示すような内容を確認している。本稿では、そのすべてを扱うだけの準備が整っていないので、14号墳から出土した蓋形埴輪と普通円筒埴輪を紹介したいと思う。

2. 埴輪の概要

各古墳の周溝内における遺物出土状況には2通りのパターンが看取できる。一つは、上層に瓦類が多量に堆積し、奈良時代以降に人為的に埋められ整地されたもの(付表1-a)である。他の一つは、上層の瓦敷きがなく溝内下層にまで若干の瓦類が混入するもので、少なくとも奈良時代まで周溝としての形態を残していたもの(同-b)である。いずれも、

付表1 上人ヶ平古墳群出土形象埴輪一覧表

古墳名	形象埴輪の種類								溝内状況	備考	円の筒時埴輪
	家	蓋	盾	鞆	甲冑	馬	鶏	その他			
1号墳								○	c	円墳，半壊	V
5号墳	○	○	○	○	△	○	○	○	a	造出付円墳，葺石，埴輪列	Ⅳ前
6号墳						○			b	方墳，周溝内から須恵器	Ⅳ前
7号墳		○							a	方墳，主体部・周溝から須恵器	Ⅳ前
8号墳		○		○					a	方墳，主体部盗掘坑から須恵器	Ⅳ前
9号墳	○	○		○				○	c	方墳，周溝内に土器（祭祀遺構）	Ⅳ
14号墳		◎							a	方墳，周溝内から須恵器・土師器	Ⅳ後
15号墳	△	○							a	方墳，墳丘削平	V
16号墳	△	○							a	方墳，群内最小規模，鬼瓦混入	Ⅳ前
17号墳								◎	b	方墳，近世の遺構により攪乱	Ⅳ
1号埴輪窯	◎	○	○		○	○	○	○	—	無段無階の地下式窖窯	ⅣV

* 時期は川西編年5期区分による。◎は完全復原可能なもの。△は小片のため断定できないもの

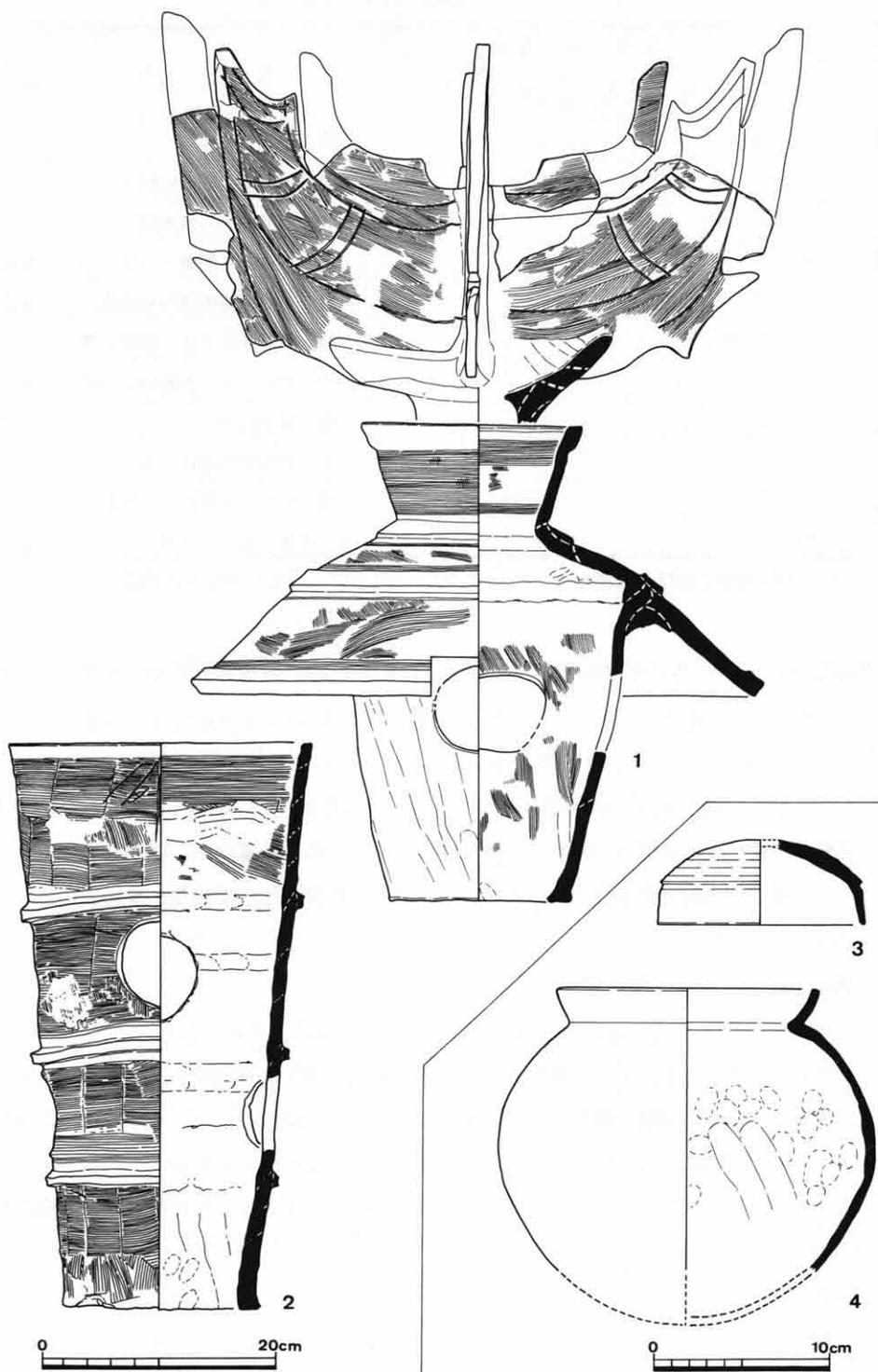
埴輪類は埋土下層(多くは墳丘流土と考えられる茶褐色土)に包含されるが，周溝四辺に均等に出土するのを通例としている。これは，墳丘上の樹立形態を反映しているものと考えられる(この他一定期間をかけて自然埋没したものをcとする)。

ここで扱う埴輪2点は，14号墳(一辺約7mの小形の方墳)の東周溝内で出土した。当古墳周溝内の遺物出土状況は，前者(a)の類例であり，上層に多量の瓦が堆積している。ただし，古墳内外の削平の度合いが他と比較して高く，直接下層の埴輪類が検出面に露呈する箇所も少なくない。

蓋形埴輪(第1図1・図版第2-1)

遺存度は高く，立ち飾り部の下部(=軸部・笠本体受け部に挿入する小円筒状の部分)を欠失する以外は，ほぼ正確に復原できる。保存状態は，全体に良好だが，焼成がやや甘いこともあって，表面剝離・摩耗する範囲も少なくない。全体の形状は，本体では，上方に開く円筒形台部(基台・高さ27cm)に，その接点を境にしてS字状にカーブする笠部がとりつき，その上位に外上方に直線的に開く受け部を設ける(受け部を含めた笠本体の高さ23cm・笠径49cm)。また，低平な突帯(幅3cm・高さ5mm)が受け部端部・笠部上端(受け部との接点)・笠部中位・笠部下端の各外面に計4条横位に巡る。

立ち飾り部は，基本的にはU字形の板を2枚直交させた形状で，その外縁に切り込み・削り込みを入れて羽根本体とそれから派生する鱗を造りだしている。つまり，羽根本体に

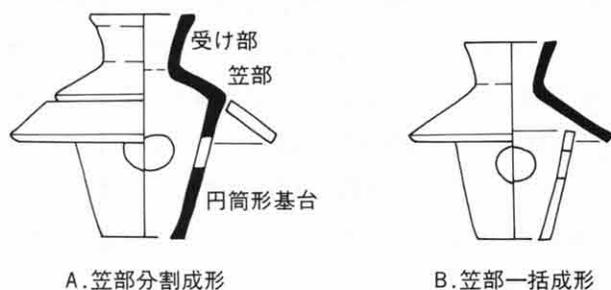


第1図 上人ヶ平14号墳出土遺物実測図

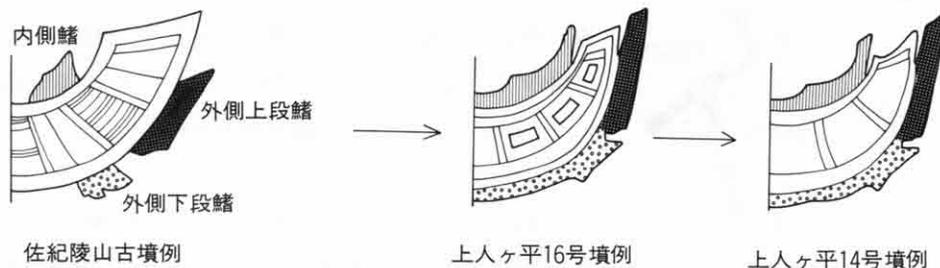
鱗を付加するのではなく、両者を一体として成形するため、幾分形骸化した羽根本体は、後述する線刻界線によって鱗部と区別される(立ち飾り部残存高34cm・最大幅35cm)にすぎない。鱗部は四方に張りだす羽根本体1枚につき、内側1, 外側2個宛配される。内側と外側上段の鱗は、大胆に上面を内側に抉られた羽根本体よりも高く誇張して表現するが、有段の切り込み、側面の微妙な湾曲等の細部の表現に、古い要素を残している(第3図参照)。U字板の交点を支える受け皿部は、途中で屈曲することなく内湾ぎみに短く立ち上がり、その内端よりわずかに外側で軸部がとりつく。

笠部本体の成形法は、破断状況や接合方法等の観察から比較的容易に識別できる。ここに紹介する個体の場合、円筒形台部との接合も含めた笠部の成形において、2段階の工程が看取される。一般に笠部の成形には、一連の工程のもとに全体を造り上げる方法(一括成形)と、円筒部との接点を境に分割して製作する方法(分割成形)の2通りが確認されている(注2)。これは、基部との成形とも密接に関連している。前者は、円筒台部に形として完成した笠部を載せるように接合し(第2図-A)、後者は、笠部上半と円筒台部を続けて成形し、これに笠部下半を追加している(第2図-B)。言い換えれば、工程の境を、前者は笠部の成形と円筒部の接合との間に、後者は笠部上半～円筒基部と笠部下半との接合の間に求めることができる。このような2通りの成形法の使い分けは、笠部の直径に規制される

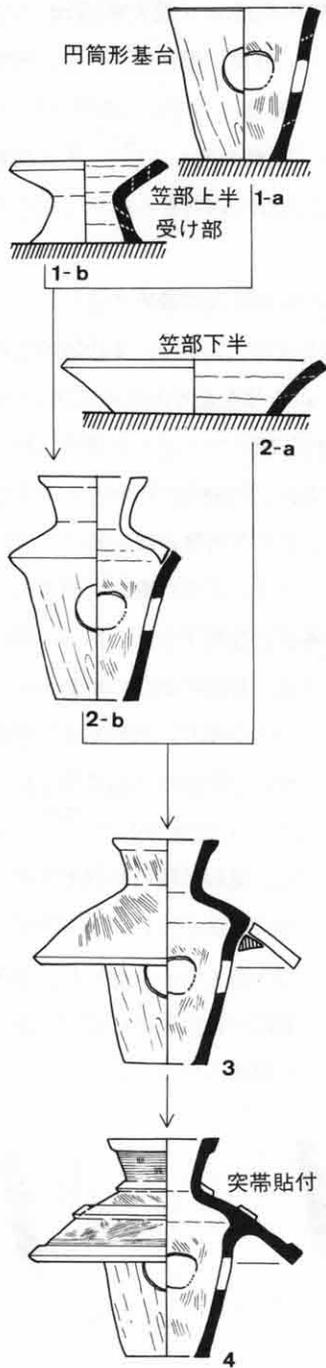
ことが多く、大形品は分割成形、小形品は一括成形を採ることが確認されている(注2)。また、蓋形埴輪の時期的変遷の中で笠径が年代の下降に従って小さくなることから、結果的に一括成形は相対的に新しい技法ということになる。



第2図 蓋形埴輪笠部成形概念図



第3図 蓋形埴輪立ち飾り部形態変遷図



第4図 蓋形埴輪製作工程図

14号墳出土の蓋形埴輪は、笠部分割成形によって製作される。以下、その工程を順を追って詳述する。まずはじめに円筒形基台が通常の円筒埴輪と同様に正立した状態で粘土帯輪積みにより成形される。器面調整(外面は左上がり指ナデ、内面は指ナデの後、粗い縦方向のハケ)や透孔穿孔も円筒単体の段階ですでに完成していたとみられる(笠部との接合後に調整は行われていない。第4図1-a)。

基台の成形と並行して笠部上半・受け部が成形される。両者の成形・接合は、受け部口唇が水平面をなすことから倒立した状態で行われたものとみられ、円錐台形の受け部下端に粘土帯輪積みにより順次笠部上半が造り出される。また倒立時に、接地する受け部口縁に粘土の重みによって生じる肥厚は、後でそのまま突帯へと利用・整形される(第4図1-b)。

次に、正立して円筒形基台と笠部上半が接合されるわけであるが、この場合、円筒部上端を外上方に屈曲させ(笠の直径に合わすためか)、笠部上半の下端面が円筒部内面に載るように接合する。この接合に際し、補充粘土は用いず、笠部の方の内壁粘土を押し出して円筒内面に密着させている(円筒内壁からの押し出しはなく、この時点で基台の方は乾燥が進んでいたものと思われる。第4図2-b)。

この工程の一方で、笠部下半が別個に製作される。粘土帯を輪積みして成形するが、倒立して行うため重みで緩く外反した形になる。この場合、最下位の輪積み粘土(輪台)を笠部上半の下縁の直径に揃えなければならないが、輪積み法によれば比較的容易に行うことができたであろう(第4図2-a)。

最後に、笠下半部を本体に接合するが、壁の粘土押し出しはせず(両者とも乾燥が進んでいるため)、補充粘土を用いて接合部を補強する。このように笠部の上半と下

半が別工程で接合されるため、笠全体の側面形が接点を境にS字状に湾曲するのである(第4図3)。

器面調整と突帯の貼付・整形は、円筒形基部を除き全体形が整った後に施される。笠本体受け部は、外面は縦ハケの後でいねいな横ハケ、内面は粗い横ハケのみで成形段階の指ナデが残る。笠部は、外面は上位ほど傾きを強める左上がりのハケを用い、その後下半部のみ断続的な横ハケを加える。笠内面は、上半が未調整、下半に横ナデ・押さえ(笠接続前の調整)を施す。突帯は、受け部上端と笠部下端は押し出し成形、受け部と笠部の笠中位は粘土帯を器面調整後に貼付して整形する。笠本体の装飾は、上記突帯のみであり、笠中位突帯以下の線刻は省略される。^(注3)立ち飾りは、U字板のラインに沿って下から上にていねいなハケで調整する。U字板の線刻は、器面調整後にヘラ状工具を用いて施文する。

線刻の意匠は、各羽根表裏共通しており、上方にのびる内外の鱗部と羽根本体を分離する切り込みを始点に、羽根本体と鱗を画す界線(外縁線)を設け、この外縁線の内側に沿って内縁線(縁取り線)を表わす。内縁線の内側は、羽根本体上端のくりぬきラインに沿った2本組の円弧線を3単位配する。^(注4)

普通円筒埴輪(第1図2, 図版第2—2)

前記蓋形埴輪の近くで、同じ東辺周溝内より出土した。出土状況は、蓋と同様、溝底のやや高い位置に横位に倒れており、墳丘の削平に伴って倒れ込んだものと考えられる。部分的に破碎していたが、ほぼ完形で、保存状態も良好である。焼成は須恵質だが、全体に淡黄褐色を呈し、完全に還元されていない。黒斑はない。全体は、口縁に向かって直線的に広がる形態を示し、高さ49cm、底径17cm、口径26cmを測る中型品である。基部粘土(底部輪台)を1枚作りとし、以上粘土紐を輪積みにして、これに内外とも左上がりの縦ナデを加えて円筒形に成形する。器体を倒立させることはない(底部未調整)。器面調整にはハケメのみを用いる。1次調整は外面のみで、底端部からていねいに縦ハケを行う。タガ貼付・整形後の2次調整は、外面各段ともにやや粗雑な静止痕をとどめる連続的な横ハケ(川西氏のいうB種横ハケ・静止間隔は3~5cm)を施すが、基底段下半は省略する。内面は口縁段に限り横ハケ調整する(部分的に静止痕を認める)。口唇内外は、最後に横ナデして上方に面をもつように整形する。突帯(タガ)はほぼ等間隔で3条巡り、側面がややくぼむ台形断面を呈する。透孔は、大形の円形(径6.5~8cm)で、2・3段目に各2個宛平面对称、立面交互に配する。口縁段外面にヘラ描き沈線による図形が線刻されるが、事物形象か記号か定かでない。以上の特徴から当資料は、川西編年Ⅳ期に該当する。14号墳固有の円筒埴輪として代表させてもよい資料と考えられる。

土器類(第1図3・4)

ここに挙げる土器類は、出土状況が上記埴輪類と変わらず、直接古墳に関連すると考えられることから比較資料として掲載する。^(注5)

須恵器杯蓋(3)は、天井部が丸みを帯び器高の約1/2を占める。口縁部はわずかに中位で外方に屈曲する「く」字形を呈する。肩部稜線は突出度が小さいが、下部を小さく削り込むことによって鋭利につくる。口唇形態は、わずかに内傾するもの丸くおさめ明確な段は有しない。器面調整は、天井部外面は回転ヘラ削り(天井部全面に及ぶ)の後、回転カキメ調整を加える。内面は、回転ナデ調整の後、天井部にやや粗雑な不整方向のナデを加える。焼成は堅緻で、暗紫灰色を呈する。TK208併行(陶邑I-2後半～I-3前半)の資料である。口径11.9cm、稜径11.5cm、器高4.80cmを測る。

土師器甕(4)は底部を欠損するが、球形の体部に短い口縁が付く中型品である(残存高16.0cm)。体部最大径(21.5cm)は体部中位にあり、口縁部径(15.0cm)を凌駕する。口縁部は、内湾ぎみに短く立ち上がり、口唇部が上外方に端面をもつ面取りとなる。口縁部の接合部は、内方に肥厚するが、屈曲はシャープで、外面に横位のナデはみられない。摩耗のため器面調整の詳細は不明である。ただ、内面に押捺・ケズリの痕跡が認められる(器厚平均5mm)。焼成は良好で茶褐色を呈する。中に赤色顔料が充填された状態で出土した。

3. ま と め

以上が上人ヶ平14号墳出土の埴輪類を中心とした遺物の概要である。特に、ここでは蓋形埴輪が完全に復原でき、細部の形態や製作工程が判明するなど大きな成果を得た。さらに、編年が概ね確立している円筒埴輪や須恵器とも共伴することから、蓋形埴輪の編年研究にとって定点となるべき資料として貴重である。すなわち、円筒埴輪は、川西編年のⅣ期に相当するが、同じⅣ期でも上人ヶ平5号墳のそれに比較して明らかに後出する。Ⅳ期に時間幅があるのは同氏も認めるところで、仮にこれを前半期と後半期に二分すれば、14号墳の資料は後半期の典型と捉えることができる。須恵器の編年観もこれを否定するものではない。

ところで、近年各地で検出例が増加している小形の方形墳と埴輪の関係については、一般に小形の方墳に埴輪が外部施設として用いられることは、通常古墳に比して相対的に少ないことが判明している。埴輪の使用が認められる場合も、原位置を保って検出された例がほとんどないため正確な数はつかめないが、数基～数十基程度が墳頂部の主体部を囲繞するようにまばらに樹立されていたと想定される。また、形象埴輪が確認された例は、さらに少なく、一部に単独で優品が入るのは例外として、通常小形の方墳には使用されな

いのが一般的といえる。ところが、上人ヶ平古墳群の小形の方墳の場合、そのほとんどに埴輪の使用が認められ、形象埴輪の比率も高く、種類も豊富である。このような現象をどのように理解するかは、今後の課題である。ただ、少なくとも、小形の方墳が前方後円墳を頂点とする墳墓体系から除外される墓制と理解する立場に立てば(筆者はそのように考える)、古墳群の近傍で埴輪窯群が検出されたことを積極的に評価し、単に、埴輪の生産地(=窯)に近いという理由で、通常埴輪を用いない上人ヶ平古墳群の小形方墳にも、地域の首長墳に比しても何ら遜色のないほどの多様で精巧な埴輪を使用することができたとするのがより自然な解釈であろう。今後、上人ヶ平古墳群の他の古墳の膨大な資料を整理観察して、さらに検討を深めていきたい。

最後に、上人ヶ平1号埴輪窯(前掲石井報文)の埴輪との関連について若干付言したい。もっとも窯の資料についても鋭意整理中であり、その内容を十分把握していない。このため断定は避けたいが、現時点では少なくとも1号窯で焼成された円筒埴輪の一群に14号墳のそれと共通する要素が指摘できる。主な具体相を挙げると、埴輪全体の形状・法量、透孔の形状・法量、器面調整技法、焼成等に共通点がみいだせる。ただし、これらの一群は灰原の資料であって、窯体内床面に残されたものではない。最終床面の埴輪が明らかに新相(例えば外面2次調整の省略)を示すことから、それに先行する操業に係る資料といえる。一方、灰原より出土した蓋形埴輪は、笠部の細片で、どの操業に帰属するか明確でないので、14号墳のそれと単純に比較できない。いずれにせよ、今後、自然科学分析も混じえて、より精緻な観察を行い、後日、別稿にて紹介したいと思う。

(いが・たかひろ=当センター調査第2課調査第3係調査員)

- 注1 現在確認した蓋形埴輪の内、最も古い実例として、奈良県佐紀陵山古墳の蓋が知られるが、特にその立ち飾り部の形態や文様構成に本例と共通する要素が認められる。
- 注2 高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第2号(1988.3)
ただし、個々の成形法の名称は伊賀が仮称したものである。
- 注3 田中秀和氏は、蓋形埴輪を笠の形態の変化(主として笠部外面の表現の変化)に着目して形式分類されている。同氏の分類によると、14号墳の蓋形埴輪はI-D類の古段階(笠部外面中位に突帯をめぐらす、それより下位に段差や沈線を設けないもの)に相当する。同段階に属する資料として大阪府蕃上山古墳・同岡山南遺跡例を挙げられ、前者はV期の円筒埴輪が共伴するとされる(田中秀和「畿内における蓋形埴輪の検討」『ヒストリア』第118号 1988年)。
- 注4 黒姫山古墳(大阪府南河内郡)から本例と形態・文様構成が近似する蓋立ち飾り部が出土している。
- 注5 上人ヶ平古墳群では土器が出土する古墳が比較的多い。ただ、大部分が埴輪を多量に包含する周溝内埋土中から出土し、副葬品として確認したのは7号墳の1点のみである。

注6 ただし、窯の資料、特に最終床面の資料の中に、外面2次調整省略(V期の要素)の個体が含まれる。これは、14号墳のそれより後出し、むしろ15号墳のそれに近い。

付記 近接する上人ヶ平16号墳出土の蓋形埴輪は、立ち飾り部の羽根本体を縁取る界線が3本あり、また別に内部の二重円弧線間に長方形透しを入れた個体が確認されている(第3図中央)。これに伴う笠部は、笠中位の突帯以下に更にヘラ描き沈線による界線を加えて上下2段とし、各段に3本1単位の縦線を交互に配している。共伴する円筒埴輪が14号墳のそれよりわずかに古く、形態・構成がよりオリジナルに近いことから、14号墳に先行する蓋形埴輪と考えられる。16号墳の埴輪については、現在整理中で実測図が提示できなかったが、他の多くの形象埴輪も含めて年度報告で紹介する予定である。

昭和63年度発掘調査略報

13. 温江遺跡第1次

所在地 与謝郡加悦町温江他
 調査期間 昭和63年10月11日～平成元年2月25日
 調査面積 約800m²

はじめに 今回の発掘調査は、一般国道176号線の道路新設改良事業に伴う事前調査として行ったものである。本遺跡は、野田川右岸に形成された低位段丘上にあり、東西600m・南北800mの広がりをもつ集落跡である。ここでは、過去には場整備が行われていることもあり、まず、遺跡の範囲、時期、遺構の残存状況を調べることを主眼として行った。

調査概要 調査は、路線内に合計29か所の試掘グリッドを設定し、その結果を基に一部については拡張調査を行った。以下、調査の主な成果について述べる。

A区G2・3では、本遺跡のある段丘と作り山古墳群のある丘陵の間の谷筋にあたり、弥生中期～後期・平安時代の遺物が出土した。B区G5～7では、包含層は全く残存していなかったが、土坑・柱穴等を確認したため、約350m²を拡張した(第1トレンチ)。C区G17・19では、東から西へ流れる流路を計3条確認した。D区では、包含層が残存しており、南東～北西方向に流れる幅約3m・深さ1.5mの流路を確認した。その他の試掘グリッドでは、ほ場整備によって地山面におよぶ削平が行われたものと見られ、遺構・遺物は残存していなかった。しかし、ほ場整備時に付近の包含層を盛土した地区においては、攪乱層より弥生時代後期の土器が多量に出土した。第1トレンチにおいては、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土坑・竪穴式住居跡・溝・柱穴等の遺構を検出した。特に、弥生時代後期の土坑については、深さ2mをはかる大形のものがあり、底部には木製の梯子が使用時の状況を示すように立てられたまま残っており、注目すべき事例となる。

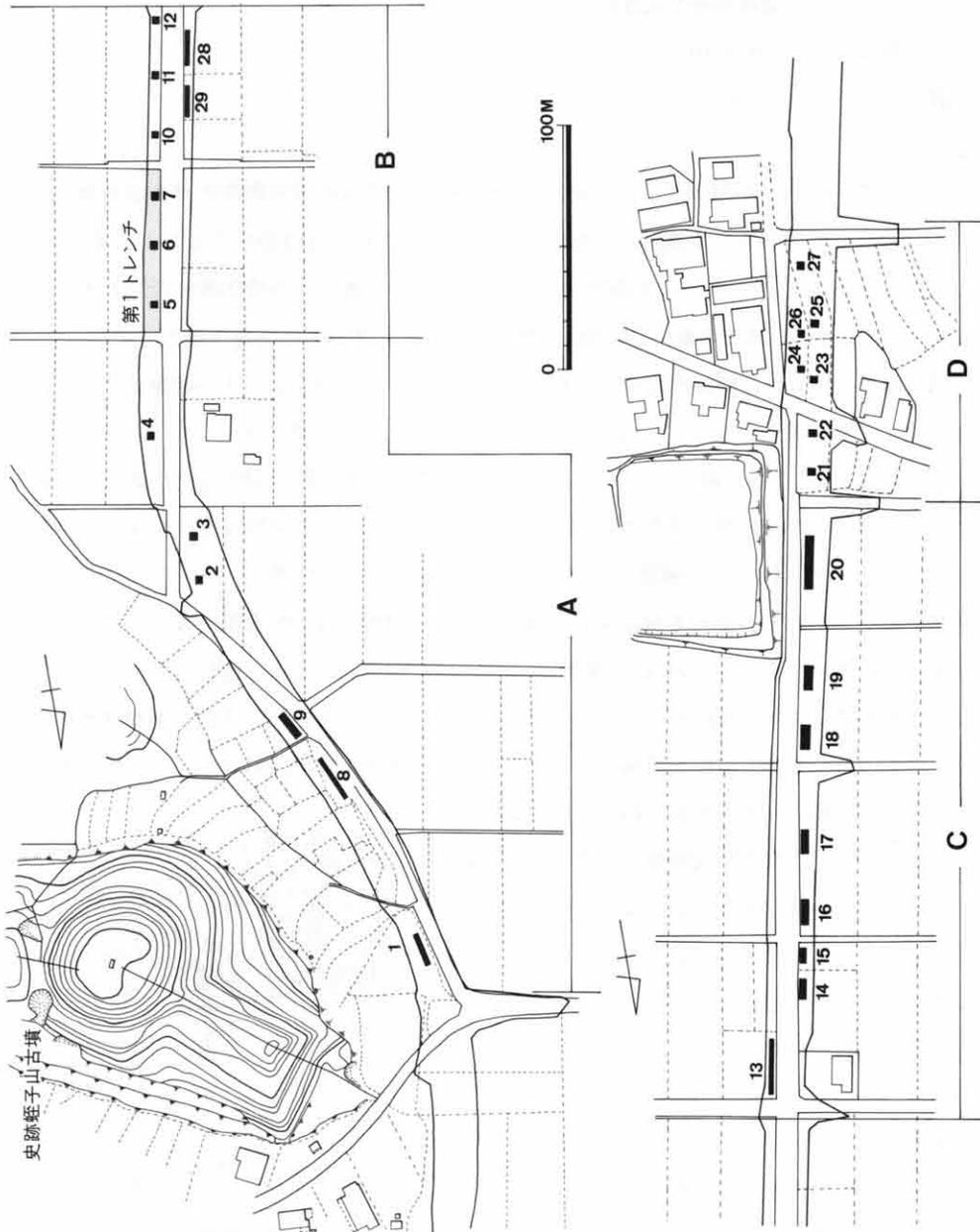
まとめ 今回の調査によって温江遺跡は、弥生時代後期に中心をおき、弥生時代中期から平安時代にかけての複合遺跡であることが判明した。特に、第



第1図 調査地位位置図 (1/50,000)

1 トレンチの大形の土坑群については府内において初例であり、その性格については集落内でのありかた、他地域の類例もふまえた上で検討を加えていかなければならない。

(森 正)



第2図 試掘グリッド配置図

14. 観音寺遺跡

所在地 福知山市字観音寺・興
 調査期間 昭和63年11月24日～平成元年3月15日
 調査面積 約1,400m²

はじめに この調査は、近畿自動車道舞鶴線建設に伴い実施した試掘調査である。

観音寺遺跡は、弥生時代から中世にかけての土器の散布地であり、由良川によって形成された沖積地に位置する。遺跡の中央を中丹広域農道が縦断する。この農道建設に伴う試掘調査は昭和54年度に実施しており、^(注1)遺物群の検出から、弥生時代から中世にかけての遺構が存在すると考えられていた。また、観音寺遺跡は、有樋式石剣の出土地としても周知の遺跡である。



調査地位置図 (1/50,000)

調査概要 予定路線範囲内に5m×10mの試掘トレンチを25か所設定し、掘削した。調査の結果、2か所から自然堤防状の微高地を検出した。ここから、弥生時代中期と奈良時代後半と中世の遺構・遺物を検出した。なかでも中丹広域農道付近から由良川近くまでは、川沿いにのびる微高地上にあたり、中世の柱穴や奈良時代後半の溝や弥生時代中期の溝・土坑などを検出した。検出状況から、比較的遺構の残りはよく、この付近一帯に大きく3時期の遺構が存在すると思われる。微高地外では、砂や礫が厚く堆積しており、由良川の氾濫原であったものと考えられる。しかし、このようなところにおいても、観音寺遺跡西端から、低地を利用した一部人工による溝を検出することができた。

まとめ 大きく弥生時代中期と奈良時代後半と中世を中心とする3時期の遺構が、自然堤防状の微高地上に広がることが判明した。これらの試掘調査結果は、興遺跡の発掘調査とあわせて、福知山市字観音寺・興付近の歴史を知る手がかりになるものと思われる。

(岡崎研一)

注1 堤圭三郎・久保哲正「観音寺遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』京都府教育委員会) 1980

15. 興 遺 跡

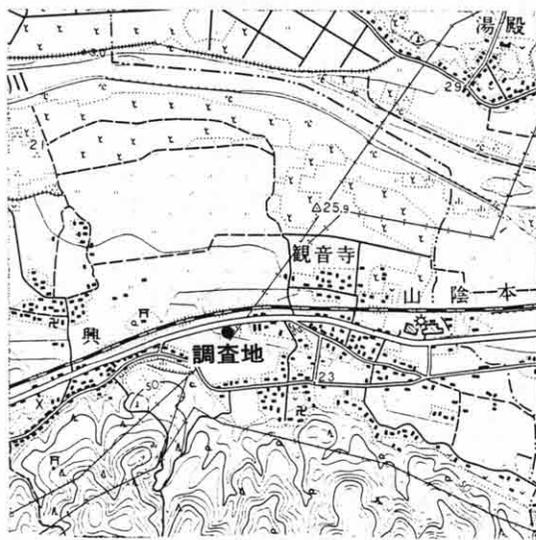
所在地 福知山市字興ほか
 調査期間 昭和63年11月24日～平成元年3月15日
 調査面積 約900m²

はじめに 今回の発掘調査は、近畿自動車道敦賀線建設に伴って実施したものである。興遺跡は、由良川によって形成された沖積地の縁辺部に位置し、自然堤防状の微高地に立地している。この遺跡からは広い範囲にわたって弥生土器をはじめとする各種の遺物が出土することが知られており、早くから遺跡であることが確認されている。発掘調査の結果、弥生時代中期から室町時代にわたる各種の遺構や遺物が出土した。

調査概要 調査地は、JR山陰線と府道を挟んで南北2地区に分かれている。本調査に先立って試掘を行ったところ、北部地区では弥生時代中期の遺構群を、南部地区では弥生時代と中世の遺構群をそれぞれ確認したことから、面的に調査を実施することになった。当該年度は、主に南部地区について調査を実施した。

南部地区では、農道を挟んでA拡張区とB拡張区の2地区を設けた。B拡張区では小規模な溝を1条検出しただけなので、主にA拡張区の成果について説明する。

A拡張区では、上層で鎌倉・室町時代の遺構群(第2図)を、下層で弥生時代中期の遺構群を検出した(第3図)。上層遺構には掘立柱建物跡(SB01～03)、土坑(SK01～07)、柱穴群などがある。SK03からは、短刀と土師器皿、SK01からは釘や青磁碗、SK06では木棺の痕跡などを検出している。これらは墳墓跡と考えられる。掘立柱建物跡は3棟確認したが、柱穴群の分布状況からみてあと何棟かはあったようである。下層の遺構には、溝、土坑、柱穴などがある。溝のうちSD01, 02, 08は他と比べて深く、幅もあることから集落を区画するような性格をもつものと思われる。溝の埋土は、いずれも水が流れたり溜ったような痕跡は認められず、当時は空堀であったようだ。柱穴は竪穴式住居跡の支柱穴

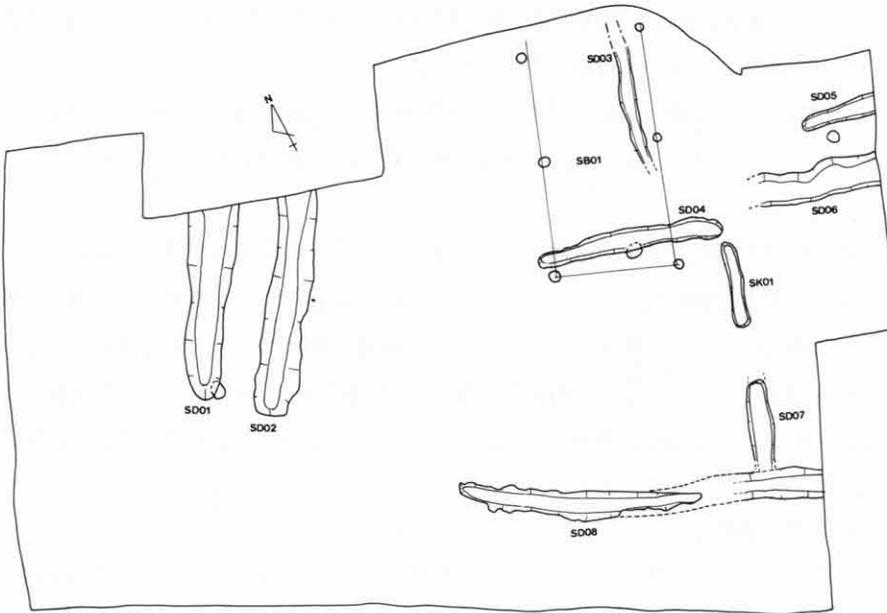


第1図 調査地位置図

だけが残ったものか、倉庫のような掘立柱の柱穴であるのか、性格は明らかでない。溝以外のまとまった遺構は確認できなかったが、当時はSD01, 02, 08で区画された空間の中に住居跡などの生活遺構が広がっていたと想像される。今後、北部地区の調査を予定しており、興遺跡の内容がより明確になることが期待される。 (田代 弘)



第2図 上層遺構群(鎌倉・室町時代) S=1/200



第3図 下層遺構群(弥生時代中期) S=1/200

16. 馬々池東方遺跡

所在地 綾部市私市東町
調査期間 昭和63年11月7日～平成元年2月23日
調査面積 約1,200m²

はじめに 馬々池東方遺跡は、綾部市街地の西方で福知山市との市境に近く、由良川右岸の丘陵上平坦地に位置する。周辺の遺跡としては、南西方向に府内最大規模の円墳である私市円山古墳や、縄文時代から鎌倉時代に至る集落跡としての小貝遺跡などがある。

当遺跡は、これまで本格的な調査例がなく、遺跡の性格付けについては不明であった。今回の調査は、近畿自動車道舞鶴線の建設工事に伴って実施したもので、遺構と遺物の検出によって、弥生時代前期から古墳時代さらに中世の人々の生業が当地に営まれていたことを裏付けた。

調査概要 調査地の中央が浅い谷筋の道で分断されているために、北側を第Ⅰ区・南側を第Ⅱ区に調査区を分けて掘削を開始した。

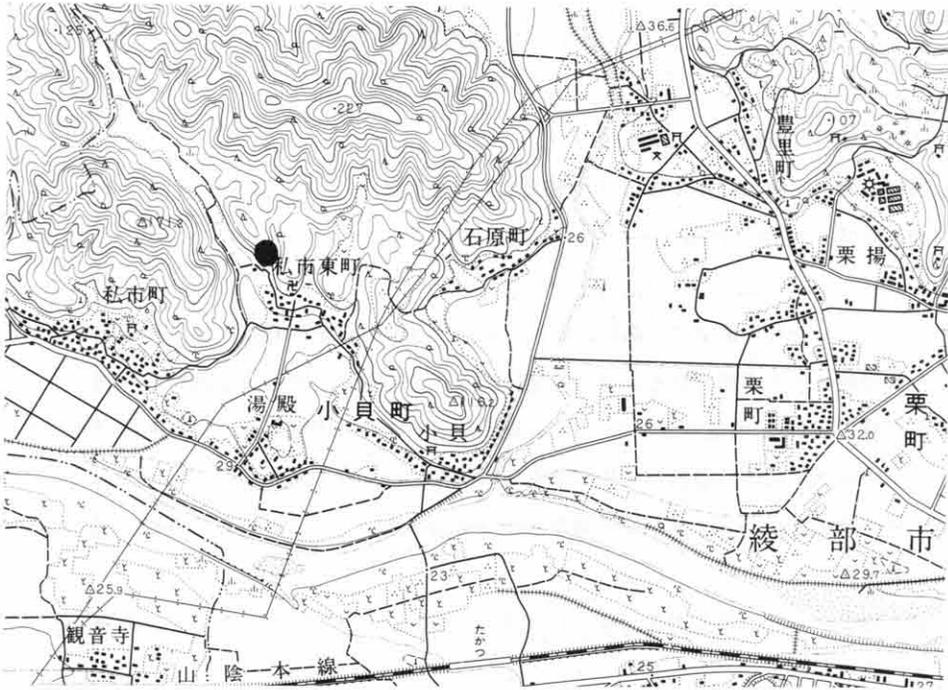
植林による浅い耕作土を除去し、遺物包含層である厚さ約15cmの暗褐色砂質土を人力で掘り進めると、Ⅰ区では暗赤褐色砂礫・Ⅱ区では黄褐色粘質土の地山面が広がる。今回検出された遺構は、Ⅰ区からの焼土坑1基である。焼土坑は隅丸方形で、長辺1.1m・短辺80cm・深さ15～20cmを測る。内面の縁辺部に焼土塊が、底面に炭化物がみられた。残念ながら中からの遺物は少なく、時期も不詳である。

出土遺物は、弥生土器(前期)・石器類(石斧・削器)・土師器(甕)・須恵器(杯・甕)・土師質皿・土錘などがある。中でも弥生時代前期の資料は、綾部市域ではあまり例がなく、貴重なものと言える。

まとめ 今回の調査の結果、遺構としては焼土坑1基を検出したただけであるが、弥生時代から中世に至る遺物が出土した。こうした点から、弥生時代・古墳時代に集落や古墳が営まれた可能性は大きい。両区とも由良川の段丘礫層を部分的に包含する地質であるが、よりやせ尾根状のⅠ区からは、古墳時代の須恵器類が圧倒的に多く出土し、平坦面がより広大なⅡ区からは、弥生時代や中世の土器類が多い。すなわち、Ⅰ区は古墳的な、Ⅱ区は集落的な様相を色濃く帯びた地区と言える。弥生時代前期の資料はごくわずかながら、当期の遺跡の成立基盤について考える材料となろう。

また今回の調査は、当地のような山間部に類似する周辺地域においても調査の必要性をうながす結果となった。

(黒坪一樹)



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 調査地全景

17. 千代川遺跡第14次

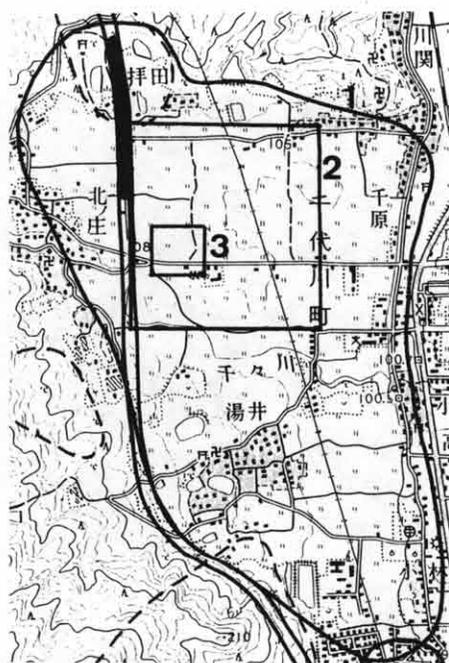
所在地 亀岡市千代川町拝田
 調査期間 昭和63年4月19日～平成元年3月3日
 調査面積 約6,300m²

はじめに 千代川遺跡は、亀岡市千代川町に所在し、丹波国府推定地、桑寺廃寺を含みこむ大規模な複合遺跡である。今回の発掘調査は、建設省近畿地方建設局が計画している京都縦貫自動車道(国道9号バイパス)の建設にともなって実施した。当調査研究センターでは、昭和59年度から継続して発掘調査を行っており、今年度はその5年目にあたる。今回の発掘調査地は、昨年度の13次調査区域の東側にあたり、合計12か所の調査区域を設定して発掘調査を行った。

調査概要 今回の発掘調査で検出した遺構・遺物は多いが、中でも主要な調査区域をとりあげ報告する。

No.11区 調査区南半部から、No.10区北辺にかけて、幅約30mの自然流路跡(SR16001)を確認した。これは昨年度調査の16・17区で検出した自然流路跡の延長部にあたる。この自然流路跡の存続時期は、出土遺物より弥生時代後半から鎌倉時代である。流路内の堆積は厚く、多くの古式土師器、須恵器、木製品、石製品が出土した。特に、鉄鏃を忠実に模した木製鏃は貴重な資料といえる。^(注)流路北側は、微高地を呈し、東西3間×南北4間の総柱による掘立柱建物跡を1棟、その東側に井戸を1基確認した。掘立柱建物跡の柱穴内および井戸内からは、瓦器碗・土師器皿が出土した。時期的には、ともに13世紀前半である。

No.30区 21区で検出したほぼ東西に走る溝の延長部分を確認した。この溝は、調査区



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

- 1 : 千代川遺跡 2 : 丹波国府推定地
 3 : 桑寺廃寺

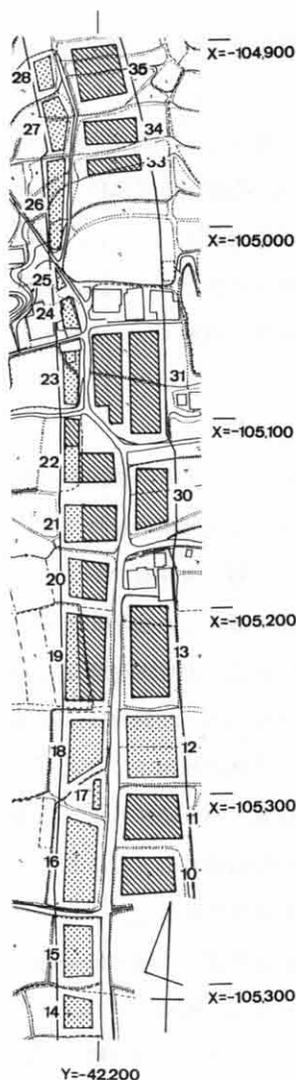
東辺で弧を描くように曲がり、国府北限の溝と推定される堀状の落ち込みに続いていく。溝内より、奈良時代から平安時代にかけての須恵器・土師器とともに、石帯(丸柄)1点が出土した。この丸柄の石材は蛇紋岩である。

No.34区 検出した遺構は、掘立柱建物跡・土坑・中世素掘り溝である。掘立柱建物跡は、全部で4棟確認できた。東西4間×南北2間の建物跡2棟、東西4間×南北3間の建物跡1棟、東西2間×南北3間の建物跡1棟である。建物跡は、黒褐色粘質土を20～70

cm程度搬入し、平坦に整地した後、建てられている。整地層より出土する遺物と建物の柱穴内より出土する遺物は、ともに平安時代で、時期的にもほとんど差はない。そのため、整地後すぐに作られたと思われる。

No.35区 検出した遺構は、掘立柱建物跡、井戸、土坑、中世素掘り溝である。掘立柱建物跡は、東西4間×南北5間の総柱による建物跡である。また、この建物跡の東側に方形の木組井戸を1基確認した。井戸枠は、厚さ約2cmの板材を縦組みし、横方向の棧を3か所設け構築している。深さは約1.5mを測り、底からは、瓦器碗・土師器皿が出土した。遺物の年代は、13世紀前半で、掘立柱建物跡と同時期のものである。

まとめ 昭和59年度から継続して行っている千代川遺跡の調査は、常に丹波国府との関連で注目されている。今回の調査では、奈良時代の建物跡は確認し得なかったが、平安時代の建物跡は、No.34区でまとめて検出することができた。これにより、国府推定地外にも建物の広がり認められ、この建物跡は国府との関連を考え合わせると興味深いものである。一方、やはり国府推定地外にあたるNo.31区からは奈良～平安時代の須恵器、土師器とともに、石帯が2点出た。1点は丸柄で石材は大理石、1点は巡方で石材は蛇紋岩である。石帯は千代川遺跡からは初めての発見であり、国府との関係を考える上でも貴重な資料である。(鶴島三寿)



第2図 調査区配置図
斜線部が14次調査

注 鶴島三寿「千代川遺跡出土の木製品」(『京都府埋蔵文化財情報』第31号) 1989.3

18. 内里八丁遺跡

所在地 八幡市内里小字今福
調査期間 平成元年2月1日～平成元年3月8日
調査面積 約500m²

はじめに 今回の発掘調査は、第二京阪道路建設に先立ち、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施したものである。

内里八丁遺跡は、木津川によって形成された沖積地に位置し、現状では畑地や水田などの農耕地として利用されている。周辺では近年来進められているは場整備事業に伴う発掘調査が随所で行われてきた。今回の調査地に近接した地域での調査成果をみると、西方約400mの地点で古墳時代の竪穴式住居跡が検出されている。東隣の地点では、木津川旧流路に伴う沼状地に堆積した中世遺物が出土している。また、南西側の調査では、木津川旧流路の西岸が北へのびることが確認されている。

今回の調査では、集落跡もしくは木津川旧流路の検出が予想された。

調査概要 調査にあたっては、調査対象地内にトレンチを設定して、遺構の検出を目的として試掘調査を実施した。また、必要に応じて随所で重機を用いて土層観察を行った。

調査の結果、調査地全般にわたって耕作土層・砂質土層・シルト層・粗砂層の順での堆積が確認された。遺物は、砂質土層・シルト層にみられ、瓦器を主体とした遺物が含まれていた。瓦器以外では、布目瓦や白磁・須恵器・土師器・中世陶器・近世陶磁器などの

破片が若干ある。今回出土した遺物は、整理箱1箱程度である。遺構は検出することができなかった。この状況から判断すると、調査地周辺は、木津川の旧河道もしくはこれに伴う沼状地であった可能性が強い。

まとめ 今回の調査地は、木津川旧河道にあたるものと考えられる。堆積の年代は、中世以降なのであろう。旧河道の西岸は、現在の内里集落寄りに位置するものと思われる。

(三好博喜)



調査地位置図 (1/50,000)

19. 木津川河床遺跡

所在地 八幡市八幡焼木他
 調査期間 昭和63年10月20日～平成元年3月1日
 調査面積 約2,700m²

はじめに 今回の発掘調査は、洛南浄化センターの建設に伴う事前調査で、昭和57年度以来、今回で第6次をむかえる。今までの調査では、古墳時代後期の集落や、弥生時代末～古墳時代初頭(庄内期)の集落を確認している。63年度には消化タンク棟と水処理施設の試掘調査と発掘調査を実施した。

調査概要 消化タンク棟建設予定地約1,200m²のうち約200m²の試掘調査を行った。古墳時代後期の集落を検出した管理本館や汚泥脱水機棟の調査トレンチの西北方100～150mに位置している。この調査地では、南北方向の畑作「畝」と考えられる溝(中世)を多数検出したが、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。

水処理施設建設予定地は約5,500m²のうち、当初500m²の試掘トレンチを設けて調査に着手した。この調査地は、昭和61年度に調査を行い、庄内期の集落を検出したET2地区に北接したところにあり、当初から、関連遺構・遺物の検出が期待された。試掘調査の段階で、庄内期の竪穴式住居跡2棟や庄内式土器片を多く検出し、同時期の集落が北方に広がっていることが判明した。そのため、関係各位と協議を行い、約2,000m²の拡張を含む、発掘調査を実施することとなった。このトレンチの調査は平成元年度も引き続き実施する。現時点では、上層から切り込まれた中世の畑作溝の検出に努めている。これらの溝には東西と南北方向のものがあ、それぞれが「群」をなしており、畑の「区画」が良好に残存しているものと考えられる。

まとめ 消化タンク棟予定地内の調査では主要な遺構はなく、水処理施設予定地では周囲の調査と矛盾しない結果を得た。63年度は試掘調査が主眼であったため、詳細な調査結果は、元年度調査をふまえて報告したい。

(岩松 保)



調査地位置図 (1/50,000)

20. 小田垣内遺跡

所在地 綴喜郡田辺町普賢寺字小田垣内
 調査期間 昭和63年8月17日～平成元年3月17日
 調査面積 約2,600m²

はじめに 小田垣内遺跡は、中世の城館と推定されていたが、今般この地に京奈バイパス道路が建設されることになり、日本道路公団の委託を受け、発掘調査を実施した。

調査概要 調査前の地上観察によれば、普賢寺谷に面した舌状の丘陵全体を利用した城館で、土塁や空堀で防御を固めた約100m四方がその範囲となる。つまり、丘陵上面は約50mの平坦地で、北端は自然丘陵を成形して、土塁もしくは土壇を形成している。南端には土塁があり、更に南に空堀がある。防御施設である土塁は両側の谷部まで及び、前記の規模となる。

発掘調査をした結果、丘陵部には3面の平坦地(北からA～Cブロックと呼称)のあることが判明した。Aブロックは表土下40cmで地山である黄褐色砂礫層となった。ここでは北端に高さ30cmの細長い平坦面を設けていたことが判明した。そして、中央部に「コ」の字形の溝を設け、その南側に径20cmの柱穴を配置していた。柱穴の埋土には少し焼土が混じっており、桃山時代の遺物が埋没していた。Bブロックについては、その北端に堀もしくは池であろう遺構を検出した。最下層の粘土からは平安時代末期から鎌倉時代の遺物を検出した。西端は一辺2.3mの方形土壇を設けていたが堀とは重複していない。Cブロックは他より傾斜がある。北半分にはほとんど遺構はなく、南半分にある土塁部分で多数の遺構を検出した。出土遺物から土塁は15世紀末～16世紀初頭頃に造営されたが、その直前まで墓地であったことが判明した。蔵骨器のあるものは瓦器羽釜、土師器羽釜を使用し、火葬骨を埋納していた。また石仏や五輪塔も15個体以上検出し、その内石仏4個体は往時のまま立ててあった。今回の調査によって中世墓地と城館の資料が得られた。



(伊野近富)

調査地位置図 (1/50,000)

資 料 紹 介

私市円山古墳出土の甲冑〈図版第3参照〉

鍋 田 勇

1. 冑と短甲

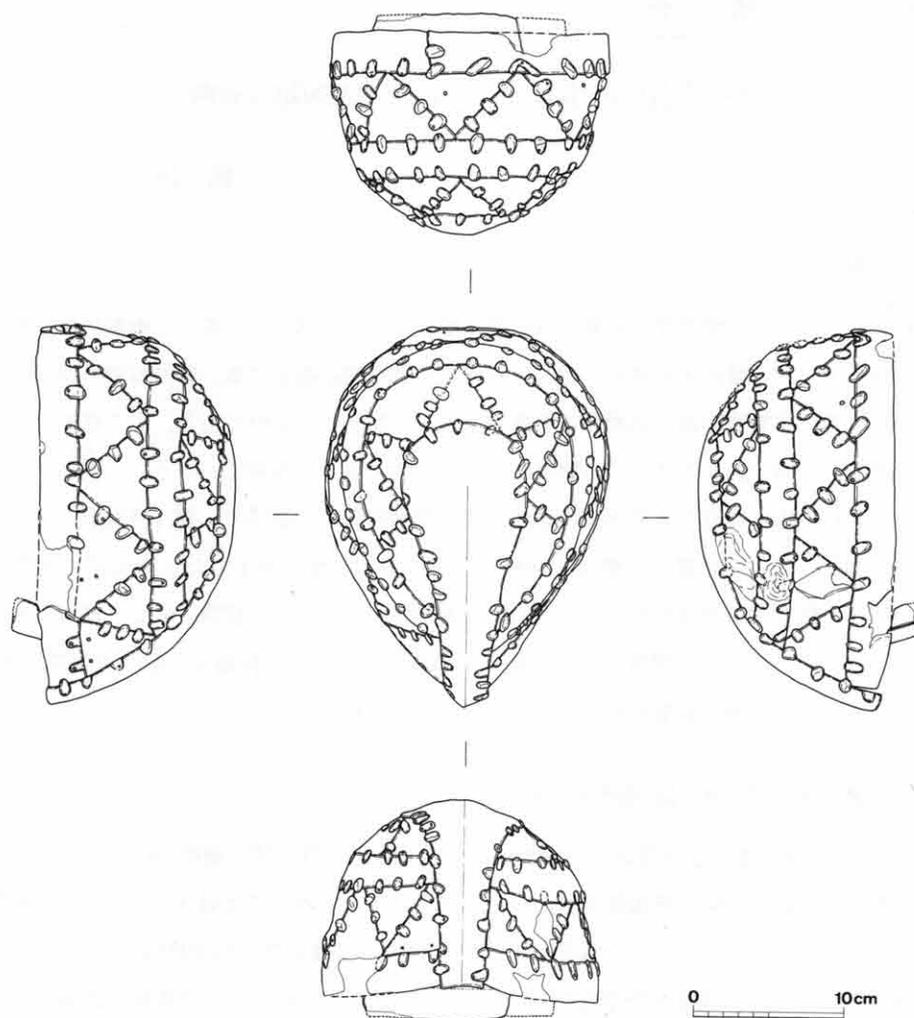
鉄製の短甲は、古墳時代の前期から古墳の副葬品として納められるが、中期には、短甲の形態の画一化と量産化が進み、古墳への副葬が飛躍的に増加する。冑や短甲の付属品を含めた甲冑の保有形態は、各地域の軍事力を如実に反映したものであり、その意味で甲冑を保有する古墳のあり方は、その地域にとって重要な位置を占めているといえよう。^(注1)

京都府綾部市に所在する私市円山古墳では、昭和63年度の調査で、第1主体部から冑・短甲・頸甲・肩甲・草摺が、第2主体部から冑・短甲・鍔^(注2)が出土した。京都府の北部では、甲冑を保有する古墳が少なく、当古墳の重要性をあらためて認識することができる。ここでは、以下、その基礎資料となる第1主体部の短甲とその付属具、第2主体部の冑・鍔をとりあげ、遺物の観察を行い、後に問題点の整理を行う。

2. 第2主体部の冑・鍔(図版第3参照)

a) 出土状況 第2主体部は当古墳の中心主体であり、冑・鍔・短甲のほか、鉄刀・鉄鍔・農工具・鏡・玉類・堅櫛等が出土した。短甲は、この紹介では取り上げないが、前胴の三角板の配置が小林氏分類のA型に属する^(注3)、胴一連で通有の三角板革綴短甲である(前胴縦上第2段は、三角板を使用しない)。短甲は、東西を主軸にとる主体部の西側木口付近に置かれており、被葬者の足元側にあたる。短甲上部の棺の被覆粘土がほとんど陥没していなかったために、形はゆがんでいたものの、大きく型くずれすることはなく、ほぼ原形を保った状態であった。冑・鍔は、この短甲内部に収められていた。また、冑は鍔との連結がはずれ、鍔の内部に落ち込んでいた。そのため冑の遺存状態はきわめて良好であった。副葬品の埋納時には、冑を先に納めた後、短甲を上からかぶせるように置いていることがわかる。なお、短甲内には、冑とともに、刀子・勾玉・白玉が出土しており、これらの副葬品埋納過程における取り扱いが注意される。

b) 遺物の観察 〈冑〉伏板・地板第1段・胴巻板・地板第2段・腰巻板および衝角底板・堅眉庇から構成される通有の三角板革綴衝角付冑である。三尾鉄は付属しない。着装状態で復原前後25.0cm、左右18.5cm、全高14.5cm、鉢部高12.9cmを測る。

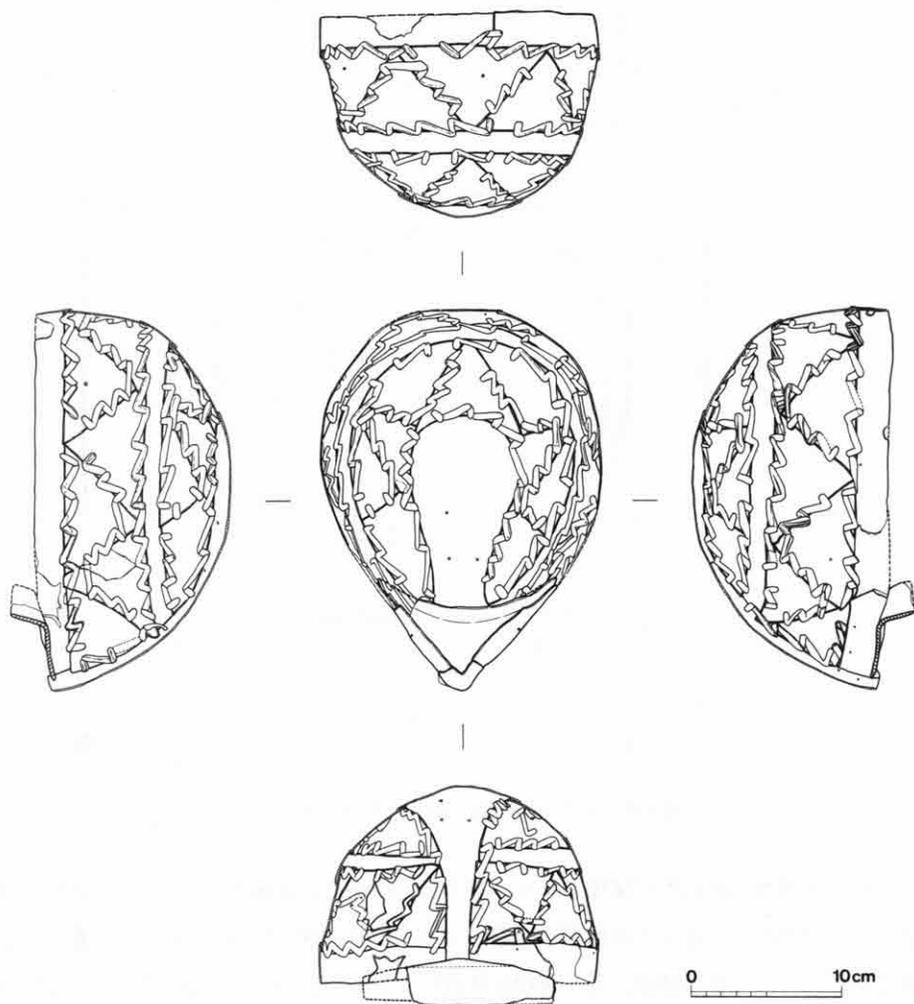


第1図 第2主体部出土青実測図(外面) scale=1/5

短甲内に収められていたために遺存状況は、きわめて良好である。

伏板は、前後25.3cm、頂部での最大幅8.2cm、先端部で2.9cmを測る。上からみて杓子状を呈する。横からみると、頂部からゆるやかに弧を描き、衝角部を形成する。衝角部は「く」字状の断面形を呈し、内側の角度は約95~100°を測る。衝角部の先端は、内側へ折り曲げられており、衝角底板をささえる役割を果たしている。

地板第1段は、後部中央地板で幅4.8cmを測り、9枚の三角板より構成される。衝角部を通る前後の中心ラインに対し、基本的に左右が対称となるように三角板が配置される。

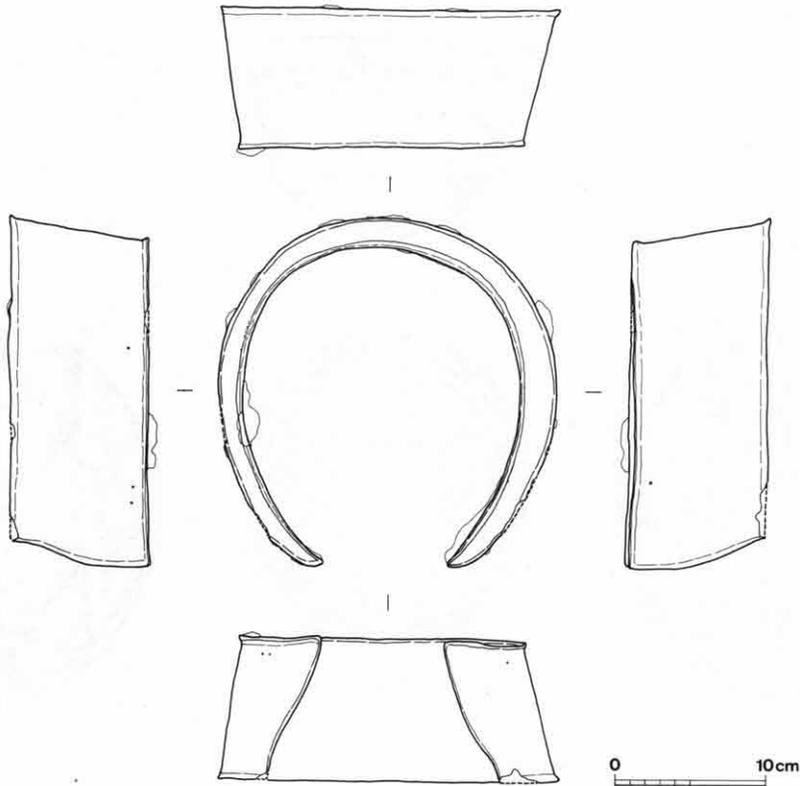


第2図 第2主体部出土冑実測図(内面) scale=1/5

地板は、衝角部に近いものほど上重ねに連結され、後部中央の地板がすべてに下重ねされている。

胴巻板は、幅2.8cm、長さ54.0cmを測る1枚の帯金からなる。地板第1・第2段に対して上重ね、伏板に対しては下重ねにされる。帯金上部は、地板第1段と接続するための孔が21か所、下部は、地板第2段と接続するための孔が23か所、両端に伏板衝角部と接続するための孔がそれぞれ1か所、合計46か所の穿孔が認められる。

地板第2段は、伏板付近で幅約4.2cm、後部中央で4.5cmを測り、全体的に地板第1段



第3図 第2主体部出土鍔実測図 scale=1/5

よりもやや大きな地板13枚で構成される。第1段と同様に、前後の中心ラインに対し、基本的に左右は対称となるように地板が配置される。また、地板の重ね方も同じ方法をとる。後部中央のほか、3枚の地板には、板綴を装着するための孔が、それぞれ1孔ずつ認められるが、錆化のためすべては確認できない。

腰巻板は、幅2.6cmの2枚の帯金からなり、後部中央よりもやや右寄りで、接続している。革綴は、帯金上部と地板第2段との革綴の途中で、帯金を經由し、続けて行われている。衝角部付近は、衝角底板・堅眉庇を接続するため、前端から約7.3cmを幅1.3cmで内側へ折り曲げている。接続の方法は、小林氏の第I技法^(注3)、野上氏の上接式^(注4)に属する。

衝角底板・堅眉庇は、1枚の鉄板で構成されるが、衝角底板の一方は欠損している。前後4.7cm、左右は復原で12.1cmを測る。衝角底板になる部分は、底辺約10cm・斜辺約7cmの三角形を呈するが、底辺は先端に向かってゆるやかに弧を描いており、そのため、底板から垂直に折り曲げられた堅眉庇も弧状に湾曲している。堅眉庇の幅は、中央部で2.5cmを測る。衝角底板には、左右2か所ずつの孔が穿たれ、腰巻板と革綴されている。

鉄板使用枚数は、地板22枚、伏板1枚、胴巻板1枚、腰巻板2枚、衝角底板・堅眉庇1枚の合計27枚である。

なお、伏板頂部には、三尾鉄を取りつけるための孔が、内側から3か所確認できるが、孔の配置から本来は4か所に穿孔されていると思われる。しかし、三尾鉄は出土しておらず、また、痕跡も確認できないことから、取り付けられていなかったと考えられる。

革綴は、同じ孔に2回以上革紐をくぐらせ、内面で次の孔へ移る方法で、結果的に、地板裏面において革紐が鋸歯状に進行するものである。

〈綴〉1枚の鉄板よりなる板綴である。着装状態で、上部前後21.4cm、左右18.9cm、下部前後20.8cm、左右22.3cm、高さ9.2cmを測る。上端から下端に向けて裾の広がる形状を呈する。前端部はそれぞれ、下方に向けてえぐり取るように曲線を描きながらカットされている。縁はすべて、幅0.4cmを外方に曲げている。覆輪は施されない。冑本体との連結用の孔は、錆化のため、すべてを確認することはできないが、現状で4個の孔が認められ、復原すると、両側の前後に2孔1組で1か所ずつ穿たれていると思われる。さらに、冑本体の後部地板にも連結用の孔があることから、綴後部にも、もう1か所存在する可能性が高く、合計5か所で冑と綴がつながれていたと考えられる。

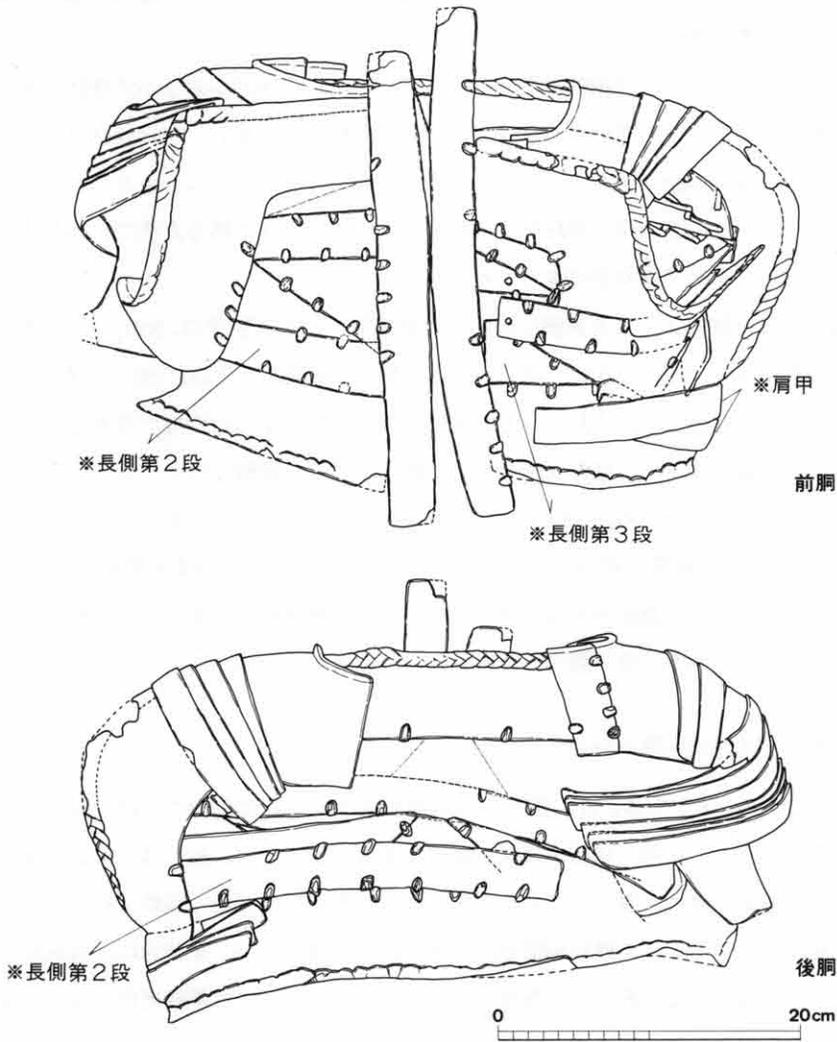
3. 第1主体部の短甲と付属具(図版第3参照)

a) 出土状況 第1主体部は、第2主体部埋葬後に営まれたもので、冑・短甲・頸甲・肩甲・草摺のほか、鉄剣・胡籥・鉄鎌・鏡・堅櫛等が出土した。短甲は、第2主体部と同様、棺の西側木口付近に置かれており、やはり、被葬者の足元側と判断される。短甲とその付属具は、土圧によって鉄板が部分的にずり落ちてはいたが、全体的には良好な遺存状態であった。冑は、この紹介では取り上げないが、通有の三角板革綴衝角付冑(三尾鉄は付属しない)と思われ、短甲内に収められた状態であった。

短甲は、前胴を西側木口に、後胴を被葬者側に向けて置かれていた。草摺は、漆膜の遺存により確認したもので、革製のものである。位置的には、短甲の後胴に接して被葬者側に収められていたと推定される。

b) 遺物の観察 第4図は、短甲出土状態での実測図であり、現段階では全体を復原するまでには至っていない。そのため、細部に不明な点を残しているが、可能なかぎりの観察を行う。

〈短甲〉前胴縦上3段・長側4段、後胴縦上3段・長側4段からなる胴一連、通有の三角板革綴短甲である。復原高は、前胴中央で、37cm前後、左右幅は、押付板で45cm前後、裾板で38cm前後、前後幅は、裾板部で31cm前後を測る。形状は、原形をよくとどめてい



第4図 第1主体部出土短甲・付属具実測図 scale=1/5

るが、前胴左側が、前のめりに倒れ込み、また、鉄板の綴革がはずれ、鉄板がずりおちた状態で錆化している部分もある。

鉄板の連結は、前胴引合板に近いものが上重ねになり、引合板・帯金・押付板・裾板が地板に上重ねになる原則が守られている。前胴三角板の配し方は、小林氏の分類によるA型に属する。^(注3) 革綴は、冑と同様に、同じ孔に2回以上革紐をくぐらせ、内面で次の孔へ移る方法で、地板裏面において革紐が鋸歯状に進行する。

前胴縦上第1段は、正面から脇まで連続する「S」字状の鉄板を用いている。右側の縦

上第1段は、引合板・堅上第1段との連結がはずれ、堅上第2段にかぶさるような状態となっている。引合板と連結する箇所、幅6.7cm、脇付近で6.8cmを測る。覆輪は、基本的に4本の革紐を用いて革組覆輪が施されていると思われる。

前胴堅上第2段は、左側の遺存状態が良好で、小型の三角形鉄板2枚で構成されている。堅上第3段と接続する下側の三角板には、ワタガミ緒孔が認められる。

前胴堅上第3段は、幅3.0cmの帯金であり、引合板・堅上第1段に下重ね、堅上第2段・長側第1段に上重ねされる。

前胴長側第1段は、4枚もしくは6枚の地板で構成されると思われるが、脇の下側の地板が観察しにくい、ため、確定できていない。引合板に接続する正面の鉄板は、底辺約8.5cm、高さ約6.8cm、斜辺約11.3cmの直角三角形を呈する。

前胴長側第2段は、幅2.8cmの帯金である。

前胴長側第3段は、右側は、裾板との連結がはずれ、完全に短甲内部に落ち込んだ状態であり、観察できない。左側も連結がはずれ、下半が裾板内部にずり落ちている。

長側第4段の裾板は、1枚の鉄板からなり、両端がそれぞれ引合板に接続される。下縁に向かってゆるやかに外反する形状を呈する。下縁の覆輪は、遺存状態が悪く、観察しにくい、が、堅上第1段と同様の手法によるものと思われる。

後胴堅上第1段の押付板は、左右45cm前後、中央の幅11.0cmを測る。上縁には、前胴堅上第1段と同様の手法による覆輪が施されている。

後胴堅上第2段は、錆化が著しく形状を把握しにくい、が、二等辺三角形の鉄板を中央に配置し、両脇には、押付板・堅上第3段の隙間をうめる地板を配していると思われる。

後胴堅上第3段は、幅2.6cmの帯金である。

後胴長側第1段は、三角形の地板で構成される、が、下半が後胴長側第2・3段とともに裾板内部に落ち込んでおり、十分に観察できない。

後胴長側第2段は、幅2.9cmの帯金である。裾板の上部にまでずり落ちている。

〈頸甲〉革綴打延式で、正面の引合板を2枚使用し、合計5枚の鉄板から構成される。出土時は、後部の引合板がはずれ、落下した状態であった。

正面の立面形は、肩がやや下降し、上部の幅の広い、いわゆる逆台形状を呈する。そのため、全体の形態としては、藤田分類のⅡ-c頸甲(注1)に属する。しかし、正面の引合板が2枚使用されていることで、古い様相もとどめているといえる。

〈肩甲〉幅2.5cm前後、長さ33cm前後の鉄板を半円状に曲げ、重ね合わせたものである。左肩甲では、4段、右肩甲では、9段が原位置をとどめており、落下していたものを合わせると、左右11段ずつの肩甲であったと思われる。

4. 特徴と意義

私市円山古墳出土の甲冑について、出土状況や遺物の観察を踏まえ、次の3点について問題点の整理を行い、まとめたい。

(1)各主体部に1領ずつの保有であること。このことは、それぞれの甲冑が個人所有であったことを示しており、各被葬者に対して1領ずつ配布されたものと考えられよう。逆に言えば、個人所有を越えるような圧倒的なまでの軍事力を有するまでには至らなかったものであり、それは、墳形において前方後円形を採用していないことも密接に関連する意味をもつと思われる。

(2)第1,第2主体部における短甲の副葬位置が、棺内の同一場所であること。これは、刀剣類の出土状況についても同様で、第1主体部被葬者の葬送儀礼中、副葬品の埋納過程、少なくとも武具武器については、第2主体部のそれが忠実にトレースされていることを物語っている。第2主体部被葬者の葬送儀礼で、第1主体部被葬者へと受け継がれた首長権は、再び、同種の儀礼を通じて、新たな首長へと引き継がれたとの想定が可能であろう。

(3)第1主体部出土の甲冑と第2主体部のそれを比較した場合、いずれも三角板革綴短甲ではあるが、後者は、前胴竪上第2段に三角板を使用していないなど、型的にわずかながら新しい要素が認められ、第2主体部→第1主体部の築造順位と矛盾する結果となること。この点については、短甲の配布がすでに両型式とも存在した時期に行われたことを示していると思われる。さらに、後者が、短甲と冑で構成されるのに対し、前者は、短甲の付属具および草摺を備えた武具一式であることから、第2回目の配布(第1主体部の被葬者)に際しては、前回以上の待遇を受けたともいえよう。

さて、旧丹波国^(注5)の範囲において甲冑を保有する古墳は、これまでに数例が知られるにすぎず、また、断片資料も多いことから、不明な点が多い。そのなかで、京都府弥栄町ニゴレ古墳^(注6)、同綾部市聖塚古墳^(注7)、そして、兵庫県篠山町雲部車塚古墳^(注8)の3例は注目される。当古墳と聖塚古墳およびニゴレ古墳の短甲がいずれも三角板革綴短甲で、なおかつ1領ずつの保有であることは、それぞれの被葬者に対してほぼ同時期に配布が行われたことを示し、当該時期の丹波在地首長^(注9)に対する畿内政権の政策の一端を知ることができ、興味深い。例えば、旧丹波国を現在の丹後と丹波地域として考えた場合、古墳時代前期から大前方後円墳を築き得た、いわば旧来の伝統をもつ丹後地域に対し、新興の勢力ともいえる丹波地域については、限られた資料とはいえ、丹後と同等、もしくはそれ以上の扱いをしていることが窺えるのである。さらに推測を進めれば、これらの古墳被葬者に対する短甲の配布は、雲部車塚の被葬者を介在として行われた可能性も指摘できる。雲部車塚は、全長

140mの前方後円墳で、内部主体に長持形石棺をもつきわめて畿内的な古墳であり、石室内から8領の短甲が出土している。形式的には、横矧板鋌留短甲を含み、藤田編年の7期に属するが4期まで遡る短甲を有していたことも示唆されている。^(注1)雲部車塚の築造年代が先述の3古墳よりもやや下がるとしても、その被葬者が丹波地域での支配体制を確立した時期を勘案すると、畿内政権から安定した武具の供給を受けていた雲部の被葬者が、型式としては旧式の三角板革綴短甲を在地の有力首長に配布したという想定も可能であろう。

以上のように、資料的制約が大きいとはいえ、甲冑の保有形態から考えると、大卒において旧丹波国の範囲では、前期の丹後地域主導型から、中期には、雲部車塚の被葬者を頂点とする丹波地域主導型の政治体制へと移行していったようすを知ることができるものと思われる。私市円山古墳の被葬者は、古墳時代中期に再編成された政治体制のなかにあつて、雲部車塚の被葬者のもと、在地の最有力首長として活躍をみた人物であつたのではないだろうか。

(なべた・いさむ=当センター調査第2課調査第2係調査員)

- 注1 藤田和尊「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」(『橿原考古学研究所論集』第8) 1988
- 注2 鍋田 勇「私市円山古墳の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第30号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注3 小林謙一「甲冑製作技術の変遷と工人の系統(上・下)」(『考古学研究』20-4, 21-2) 1974
- 注4 野上文助「甲冑製作技法と系譜をめぐる問題点・上」(『考古学研究』21-4) 1975
- 注5 以下の記述は、注1文献に拠るところが大きいですが、丹波の古墳文化については、以下の考察も非常に参考となった。
常盤井智行「由良川中流域の古墳の動向」(『丹波の古墳Ⅰ-由良川中流域の古墳』山城考古学研究会) 1983
平良泰久「方墳二態」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
奥村清一郎「大堰川水系における前・中期古墳の動向」(日野昭博士還暦記念論集『歴史と伝承』) 1988
- 注6 西谷真治・置田雅昭『ニゴレ古墳』(弥栄町教育委員会) 1988
- 注7 梅原末治「多田村の方墳」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第1冊) 1919
- 注8 山本明彦他『雲部車塚古墳』(篠山町教育委員会・篠山町文化協会) 1984
- 注9 私市円山古墳の被葬者については、平成元年3月26日に綾部市中丹文化会館にて行われたシンポジウムでは、在地の有力首長であるとする見解が大勢を占めた。

府下遺跡紹介

43. 銭 司 遺 跡

銭司遺跡は、京都府相楽郡加茂町に所在し、古代の銅銭が鑄造されたところとして古くから知られている。銭司は、鑄銭司の置かれたところをさし、古代における銭貨の製造所として重要な遺跡である。

鑄銭司は、『日本書紀』持統8(694)年3月癸酉条に「以直広肆大宅朝臣麻呂、勤大式臺忌寸八嶋、黄書連本実等、拜鑄銭司」と、はじめて文献上に見える。このときの鑄銭司については、5年後の文武3(699)年12月にも「始置鑄銭司」(『続日本紀』)とあって、本格的な鑄造はこのときには行われなかったとする意見が有力である。事実、これまでに、鍛造の無文銭の出土はあるが、鑄造による銭貨は「和同開珎」までないので、これまでの意見が正しいことが理解される。

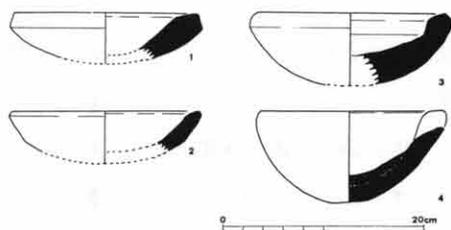
ところで、鑄銭司は、『続日本紀』の和銅元年から3年にかけて集中的にでてくる。このことは、確実な活動が和同開珎の鑄造にはじまることを示している。特に、催鑄銭司に多治比真人三宅麻呂が就任しており、栄原永遠男の言うように、この催鑄銭司が河内鑄銭司などを統括して、近江国・播磨国、大宰府などの鑄銅能力のある地方行政機関に鉄を献納させたのであろう。鑄銭司は、河内国・長門国・周防国にあったことが文献史料からわかるが、現在、同時にこれらが並存したのかどうかについては、議論が分かれている。ただ、いずれも、交通の要衝、特に瀬戸内海ルート上にあったことから、銭貨の運搬にあ

っては海上交通が意識されていたようである。官司の形態としては、時期によって人数に変化はあるが、長官・次官・判官・主典の四等官制をとり、史生(民領とも記述されることがある)も存在していた。また、官司の命令系統はよくわからないところもあるが、概ね太政官に直接属していたとみてよからう。

このなかで、銭司遺跡は、文献上では『類聚三代格』の天長4(827)年7月3日付けの太政官符に、「右得鑄銭司解偏、検案内、此



第1図 遺跡所在地 (1/50,000)



第2図 埴埦（『銭司遺跡』より転載）

司在岡田之日，典薬医師一人別置司家」とあるのが初見である。この記載から，天長4年7月段階ですでに山城国相楽郡岡田郷にあった鑄銭司は停廃されていることがわかる。その後のことについては、『日本三代実録』の貞観7（865）年9月26日条に，「勅木工寮，採銅於山城国相楽郡岡田郷旧鑄銭司山」とあり，

同年11月26日条に「勅，以山城国相楽郡旧鑄銭司地二十余町，為採銅之地」と書かれているように，鑄銭司が停廃されてからも，この岡田郷の地で銅を採るようなことが行われていたようである。この採銅については，元慶5（881）年6月1日条に「勅，停廃採山城国岡田銅使，其屋舎什器付国令守護」とあって，このころまで続いていたのである。

このように，鑄銭司が停廃されてからの旧鑄銭司のことはある程度は文献史料からも窺うことはできるが，運営されていた当時の史料がないため，具体的な実態などは不明である。ただ，この山城国にあった鑄銭司については，比定地である銭司遺跡の試掘調査を1923年に梅原末治が行っており，場所についてはすでに確定されている。

岡田郷の鑄銭司の存続期間については，梅原によれば、『続日本紀』の天平7（735）年閏11月19日条に，「更置鑄銭司」と見え，同書の延暦元（782）年4月11日条に見える勅の中に「宜且罷造宮勅旨二省，法花鑄銭兩司，以充府庫之宝，以崇簡易之化」としてでてくることをもとに，天平7年から延暦元年までとした。その後，中村一紀は，岡田郷での鑄銭の開始を天平13（741）年の恭仁京遷都とからめてその頃とする考えを提示している。発掘調査の結果だけからすれば，瓦は8世紀後半頃に比定されるので，いずれとも決めがたい。しかし，中村説に立てば，天平7年条の意味がいま一つ明らかにならない。天平7年頃から疫病が流行しただけでなく，翌8年には公田賃租が制度としてはじめられ，太政官の雑費に充てられたりしており，銭納が必要とされる土壌は天平7年頃にも存在している。したがって，河内または中央に置かれた鑄銭寮とは別に，さらに岡田郷の地に鑄銭司が置かれたとすれば，梅原が推定したように，天平7年からとする方がよいのかもしれない。

このように，岡田郷に置かれた鑄銭司は，天平7年から延暦元年までの間に和同開珎などの銭貨を鑄造していたのである。ところで，銭司遺跡の発掘調査は，梅原末治の試掘以後地元では注意されていたが，1974年になって163号線の歩道設置工事にもなって発掘調査が実施されることになった。先の梅原の試掘では，軒平瓦が出土していてそれが山城国分寺出土瓦と一致することが指摘されていた。この1974年の調査では，埴埦やふいごの羽口のほかに土師器や瓦器なども出土しているが，なかでも埴埦は銅の鉱石から銭貨になる

までの各過程で用いられたようである。

鑄銭司が延暦元年に停廃されて以後に、採銅使が任命されたりしているが、この岡田郷の地に銅を産出する鉱山があったかどうかが問題になる。現在までのところ、岡田郷のどこかに小さい規模の銅山があったとする意見と、実際に銅山で銅を採集するのではなく、銅を造る工程の段階をさすことばととらえる意見がある。いずれが正しいとも判断できないが、8・9世紀に鑄銭司や採銅使が置かれた事実から考えて、岡田郷の地、すなわち銭司遺跡の周辺地は、長期間にわたって銅の精練や採集と密接な関係のあったことだけは認めてよかろう。

(土橋 誠)

<参考文献>

- 梅原末治「銭司ノ遺跡」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第4冊)
同「銭司ノ遺跡(補遺)」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第7冊)
時野谷滋「加茂町銭司出土品」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第18冊)
八木 充「山陽道の銅産と鑄銭司」(福尾猛一郎編『内海産業と水運の史的研究』)
同「周防鑄銭司と鑄銭司遺跡」(『山口大学文学会志』23)
同「周防鑄銭司小考」(『山口大学文学会志』17-1)
中村一紀「鑄銭司の所在地について」(『書陵部紀要』第24号)
栄原永遠男「鑄銭地の変遷とその立地—『河内鑄銭司』にふれて—」(『古代を考える』10—河内
国府と国分寺址の検討—)
『銭司遺跡』(加茂町文化財調査報告第1集 加茂町教育委員会)

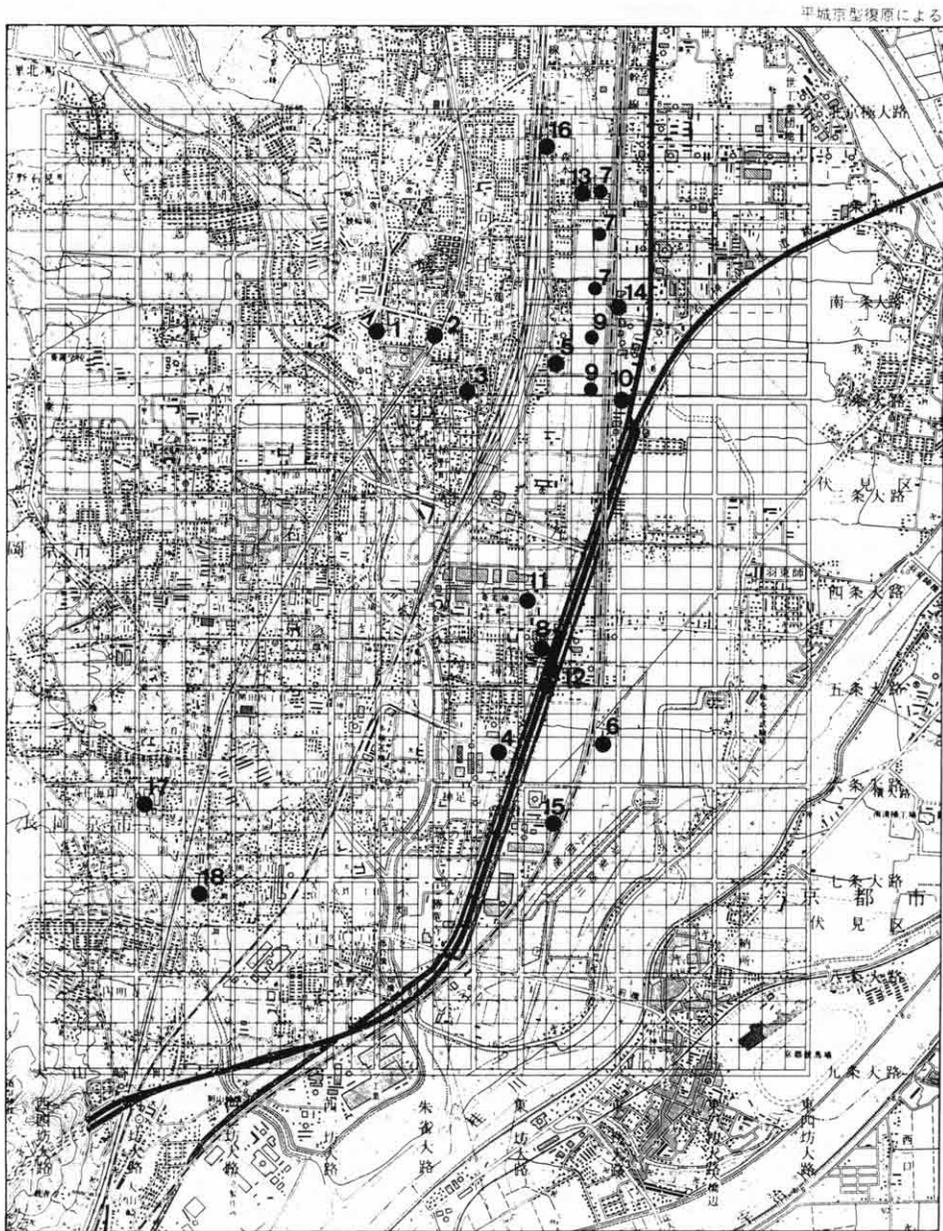
長岡京跡調査だより

平成元年2月22日と3月22日および4月26日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮域3件、左京域13件、右京域2件の計18件を数える。左京域における調査件数が、とくに多いのが今回の特徴である。これは、左京域一工場地域が占める面積が大きい一にある民間工場の増改築工事の急増に伴うもので、内需拡大、消費税導入前のかけこみ需要などの影響によるものと推察される。上記の18件の調査地その他については、下表および次頁位置図に示したとおりである。このうち、主なものいくつかについて、調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(平成元年4月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第223次	7AN14R	向日市向日町南山28	(財)向日市埋文	1/24～1/27
2	宮内第224次	7AN9R	向日市鶏冠井町山畑15-3	(財)向日市埋文	1/28～2/18
3	宮内第225次	7AN10N	向日市上植野町浄徳11-1, 36	(財)向日市埋文	2/14～3/31
4	左京第204次	7ANMYO	長岡京市神足柳田・焼町地内	(財)長岡京市埋文	9/26～4/21
5	左京第208次	7ANESH-7	向日市鶏冠井町沢の東14	(財)向日市埋文	1/6～
6	左京第210次	7ANMOB	長岡京市神足落述15-1	(財)長岡京市埋文	1/17～3/31
7	左京第211次	7ANDHC-3	向日市森本町東ノ口・小柳他	(財)向日市埋文	1/24～
8	左京第212次	7ANMYB-1	長岡京市神足神田15	(財)向日市埋文	3/15～
9	左京第213次	7ANEKD-3	向日市鶏冠井町小深田地内	(財)向日市埋文	4/3～4/11
10	左京第214次	7ANEGZ-2	向日市鶏冠井町極楽寺27・28	(財)向日市埋文	4/3～
11	左京第215次	7ANLKC-2	長岡京市馬場北石ヶ町1-1	(財)長岡京市埋文	4/1～
12	左京第216次	7ANMOR-2 他	長岡京市神足ほか	(財)京都府埋文	4/4～
13	左京第217次	7ANDHC-4	向日市森本町東ノ口36-1	(財)向日市埋文	4/13～4/22
14	左京第218次	7ANEHD-2	向日市鶏冠井町七反田14-1	(財)向日市埋文	4/17～
15	左京第219次	7ANMTB-2	長岡京市神足暮角1-1	(財)長岡京市埋文	4/15～
16	左京第220次	7ANDKD-2	向日市森本町上町田14他	(財)向日市埋文	4/19～
17	右京第324次	7ANOIR-2	長岡京市下海印寺伊賀寺20	(財)長岡京市埋文	2/6～
18	右京第325次	7ANNKG-3	長岡京市友岡四丁目114他	(財)長岡京市埋文	3/7～



数字は本文()内と対応

調査地位置図

宮内第224次(2)

(財)向日市埋蔵文化財センター

朝堂院東第三堂推定地において実施された調査である。調査地は昭和40年に調査された宮内第13次調査(M地区)トレンチと一部重複している。第13次調査では、石敷の範囲から東第三堂の建物の規模・形状が推定復原されているが、今回の調査では基壇北辺推定位置から凝灰岩抜き取り痕とみられる東西溝が検出され、その周辺から多数の凝灰岩片が見いだされた。

左京第204次(4)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

民間企業の社屋建設に伴い、左京六条一坊十一・十四町推定地において実施された調査である。調査面積は、約3,200m²を測る。

長岡京期の遺構は、調査区のほぼ中央を南北に横切る東一坊第二小路およびその両側の宅地部分で検出された掘立柱建物跡・井戸・溝・柵・土坑などからなる。東一坊第二小路は、東西両側溝の心々距離で計測した路面幅約9.3mの、小路としては標準的な規模を有している。小路の西側で検出された十一町の宅地は、東西溝によって南北2区画に分割されており、北側の区画には掘立柱建物跡4棟、井戸1基、土坑3基などが、南側の区画には掘立柱建物跡6棟、井戸1基、溝などがそれぞれ配置されていた。とくに北側の宅地では、東一坊第二小路の西側溝を越えるための橋遺構およびその内側から1間×1間の門跡らしい掘立柱建物跡が検出されているのが特徴である。いっぽう十四町の宅地は、掘立柱建物跡5棟、井戸1基などが検出されているが、十一町に比べて遺構の密度は散漫で、十一町でみられた区画溝もみられない。

このほか調査区の中央部を弧状に南北に横切る古墳時代の自然流路跡、近世の井戸・流路跡などの各時代の遺構も見いだされている。

出土遺物には、長岡京期の土器類、瓦埴類、土製品(土馬、紡錘車、陶硯)、木製品、木簡、金属製品(小銅鏡、帯金具、銭貨)、古墳時代の土師器、須恵器、埴輪、有孔円板、弥生時代の弥生土器、石庖丁、石斧などがある。

左京第208次(5)

(財)向日市埋蔵文化財センター

左京二条二坊六町推定地において実施された調査である。調査

地は、昭和52年に大量の木簡が発見された左京第13次調査地の西隣に相当する。調査成果としては、木簡が出土した溝SD1301の西延長部を追加確認したほか、その北側から東西棟の大規模な掘立柱建物跡SB20800が確認された。確かめられたのは、東側の妻部付近の一部で、南側に廂を設けた梁間3間、桁行2間以上の建物である。柱間寸法は、桁行が10尺等間、梁間が身舎10尺、廂13尺を測る。この建物は、京域で確認された建物遺構としては、右京第25次調査で見つかった東西棟の掘立柱建物SB2569に次ぐ正殿クラスの建物といえるもので、太政官厨家の正殿とみる見解が調査主体者によって提示されている。

左京第210次(6)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

左京六条二坊十四町推定地において実施された調査である。長岡京関係では、調査区の南半部から六条条間小路の側溝と思われる一対の東西溝(SD21033・SD21038)を検出したほか、北半部からは、井戸1基、掘立柱建物跡3棟などが検出された。このほか、古墳前期の自然流路跡も見つかっている。SD21033とSD21038によって画される推定六条条間小路は、心心距離24.5mを測る大路相当の幅員があり、また位置的にも従来の平城京型復原図に重ねると約35m南にずれている。京域でもとくに南半部の東西路については、平城京型復原図にうまくのらないことは従来から指摘されてきたところであるが、今回の調査データはこの問題を解明する上で重要な意味をもつものと思われる。

右京第325次(18)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は、右京八条三坊推定地にあたるが、調査の結果、縄文時代中・後期の土器・石器類および中世の石組み井戸が検出された。縄文時代に関する資料としては、乙訓地域でも有数の成果が得られた調査である。

(奥村清一郎)

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧
(平成元年4月17日現在)

<p>理事長</p> <p>福山 敏男 (京都府文化財保護審議会委員) 京都大学名誉教授</p> <p>副理事長</p> <p>樋口 隆康 (京都府文化財保護審議会委員) 京都大学名誉教授</p> <p>理事</p> <p>中沢 圭二 (京都府文化財保護審議会委員) 京都大学名誉教授</p> <p>川上 貢 (京都府文化財保護審議会委員) 福井大学工学部教授</p> <p>上田 正昭 (京都府文化財保護審議会委員) 京都大学教養部教授</p> <p>藤井 学 (京都府立大学文学部教授)</p> <p>足利 健亮 (京都大学教養部教授)</p> <p>佐原 眞 (奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター研究指導部長)</p> <p>都出比呂志 (大阪大学文学部教授)</p> <p>藤田 价浩 (西芳寺貫主)</p> <p>太田 至朗 (京都府文化芸術室長)</p> <p>上田 将 (京都府教育庁指導部長)</p> <p>堤 圭三郎 (京都府教育庁文化財保護課長)</p> <p>荒木昭太郎 (常務理事・事務局長)</p> <p>監事</p> <p>堂端 明雄 (京都府出納局長)</p> <p>奥村 幸一 (京都府監査委員事務局長)</p>	<p>事務局長</p> <p>荒木昭太郎</p> <p>事務局次長</p> <p>山本 勇</p> <p>中谷 雅治</p> <p>総務課</p> <p>課長 山本 勇 (次長兼務)</p> <p>総務係長 安田 正人</p> <p>主事 杉江 昌乃 今村 正寿</p> <p>〃 林 淳次 木村 幸世</p> <p>調査第1課</p> <p>課長 中谷 雅治 (次長兼務)</p> <p>企画係長 奥村清一郎</p> <p>調査員 磯野 浩光</p> <p>嘱託 長関 和男</p> <p>資料係主任 平良 泰久</p> <p>主任調査員 松井 忠春</p> <p>調査員 田中 彰 土橋 誠</p> <p>調査第2課</p> <p>課長 杉原 和雄</p> <p>調査第1係長 辻本 和美</p> <p>主任調査員 増田 孝彦</p> <p>調査員 岡崎 研一 岩松 保</p> <p>〃 細川 康晴 森 正</p> <p>〃 森島 康雄 石崎 善久</p> <p>調査第2係長 水谷 寿克</p> <p>主任調査員 引原 茂治 伊野 近富</p> <p>調査員 竹原 一彦 黒坪 一樹</p> <p>〃 田代 弘 小池 寛</p> <p>〃 鍋田 勇 鶴島 三寿</p> <p>調査第3係長 小山 雅人</p> <p>主任調査員 戸原 和人 石井 清司</p> <p>調査員 竹井 治雄 石尾 政信</p> <p>〃 三好 博喜 荒川 史</p> <p>〃 伊賀 高弘 中川 和哉</p>
---	--

センターの動向 (元.2~4)

1. できごと
2. 1 内里八丁遺跡(八幡市)試掘調査開始
火柴原古墳状隆起(福知山市)試掘調査開始
- 3 温江遺跡(加悦町)発掘調査関係者説明会実施
- 7 中沢圭二理事, 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査現地視察
- 10 長岡京跡右京第310次(長岡京市)発掘調査現地説明会実施
樋口隆康副理事長, 上人ヶ平遺跡(木津町)発掘調査現地視察
- 18 第50回研修会開催(別掲)
- 21 木津川河床遺跡発掘調査関係者説明会実施
- 22 長岡京連絡協議会開催
- 23 馬場池東方遺跡(綾部市)発掘調査終了(11.7~)
遠所古墳群(弥栄町)発掘調査終了(6.1~)
温江遺跡発掘調査終了(10.11~)
3. 1 木津川河床遺跡発掘調査終了(10.20~)
- 2 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議「消費税講習会」開催(於・当センター)
- 4 上人ヶ平遺跡・瓦谷遺跡・幣羅坂古墳(木津町)発掘調査現地説明会実施
- 7 長岡京跡右京第310次発掘調査現地説明会実施
- 8 内里八丁遺跡試掘調査終了
桑飼上遺跡(舞鶴市)関係者説明会実施
- 9 興遺跡(福知山市)発掘調査関係者説明会実施
- 10 桑飼上遺跡発掘調査終了(4.12~)
全国埋蔵文化財法人連絡協議会ブロック会議(枚方市)出席(荒木事務局長・田中総務課長・安田総務係長)
- 11 小田垣内遺跡(田辺町)発掘調査現地説明会実施
- 13 上人ヶ平遺跡発掘調査終了(9.12~)
- 15 火柴原古墳状隆起試掘調査終了
長岡京跡左京第200次(長岡京市)発掘調査終了(7.18~)
興遺跡発掘調査終了(11.24~)
観音寺遺跡(福知山市)発掘調査終了(11.24~)
- 17 樋口隆康副理事長, 長岡京跡右京第310次発掘調査現地視察
平成元年度職員(調査員)採用試験実施
小田垣内遺跡発掘調査終了(8.17~)
- 20 福山敏男理事長, 長岡京跡右京第310次発掘調査現地視察
- 22 長岡京連絡協議会開催
- 25・26 樋口隆康副理事長・堤圭三郎理事, 北部発掘調査現地視察
- 29 第24回役員会・理事会開催一於・京都堀川会館一福山敏男理事長, 樋口隆康副理事長, 荒木昭太郎常務理事, 中沢圭二・上田正昭・藤井学・佐原

眞・原口正三・藤田价浩・小嶋一夫・
上田 将・堤圭三郎の各理事及び奥村
幸一監事出席

31 退職職員辞令交付(別掲)

4. 1 新規採用職員辞令交付(別掲)

人事異動(別掲)

3~7 新規採用職員研修

4 長岡京跡左京第216次(長岡京市)発
掘調査開始

10 上人ヶ平遺跡発掘調査開始

11 遠所遺跡群(弥栄町)発掘調査開始

12 川向1号墳(久美浜町)発掘調査開始

ヌクモ古墳(綾部市)発掘調査開始

16 退職職員辞令交付(別掲)

17 人事異動(別掲)

18 桑飼上遺跡発掘調査開始

19 千代川遺跡第15次(亀岡市)発掘調査
開始

20 興遺跡発掘調査開始

観音寺遺跡発掘調査開始

26 長岡京連絡協議会開催

2. 普及啓発事業

2.18 第50回記念研修会開催—於・京都会
館：ヤシロと古墳—鍋田 勇「綾部市

私市円山古墳の調査」, 上田正昭「ヤ
シロと古墳」

3. 人事異動

3.31 原口正三理事退任

細川康晴・森島康雄・濱田延充調査員
退職

4. 1 都出比呂志理事新任, 理事長・副理
事長・常務理事・他の全理事及び監事
再任

細川康晴・森島康雄調査員採用(京都
府教育庁から派遣)

石崎善久調査員採用

伊野近富・増田孝彦, 主任調査員に昇
任

16 小嶋一夫理事退任

田中秀明総務課長退職(京都府教育庁
総務課行政係長に復職)

肥後弘幸調査員退職(京都府教育庁文
化財保護課技師に復職)

17 太田至郎理事新任

山本 勇次長兼総務課長・平良泰久調
査第1課資料係長・磯野浩光調査員採
用(京都府教育庁から派遣)

受贈図書一覧 (元.2~4.15)

岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて No.43
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	埋文群馬 No.1~4, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 10年のあゆみ, 成塚石橋遺跡, (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 第77・78集, 本郷山根遺跡
(財)君津郡市文化財センター	(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第9・27・28・33・35~38集
(財)東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター年報8, 東京都埋蔵文化財センター調査報告 第9集
富山県埋蔵文化財センター	埋文とやま 第25号
石川県立埋蔵文化財センター	石川県立埋蔵文化財センター年報 第8号, 敷地天神山遺跡群, 吉崎・次場遺跡, 下安原海岸遺跡, 竹生野遺跡, 津幡町刈安野々宮遺跡, 八田中遺跡, 五十里A遺跡, 岩内遺跡, 白江梯川遺跡, 辰口西部遺跡群I
山梨県埋蔵文化財センター	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第40集
(財)長野県埋蔵文化財センター	長野県埋蔵文化財ニュースNo.25~26, 長野県埋蔵文化財センター年報4 1987
浜松市埋蔵文化財事務所	都田地区発掘調査報告書
(財)愛知県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財愛知 No.15~16
(財)滋賀県文化財保護協会	文化財教室シリーズ 101~104, 笠原南遺跡発掘調査報告書, 一般国道8号(長浜バイパス)関係遺跡発掘調査報告書V, ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XV-3~4,
滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第106~108号
守山市立埋蔵文化財センター	守山市文化財調査報告書 第27・32冊
(財)大阪文化財センター	大阪文化財センター通信 No.1~2, 久宝寺南(その1)近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書, 丹上遺跡(その3・5), 小阪遺跡(その5), 同(その6・6-2), 同(その7, 7-2), 日置荘遺跡(その1), 同(その2), 同(その3), 同(その4)
(財)大阪市文化財協会	大坂城跡Ⅲ, 葦火 13・14・16・18号
(財)東大阪市文化財協会	鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告, 同第29・30次発掘調査報告, 東大阪市文化財協会ニュース Vol.4 No.1
奈良県立橿原考古学研究所	奈良県文化財調査報告書 第53集
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 71~73
(財)広島県埋蔵文化財センター	ひろしまの遺跡 第36号

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒 No.186~187
井川町教育委員会 山形県教育委員会	大野池遺跡発掘調査報告書 山形県埋蔵文化財調査報告書 第119~121・124~127・129 ~133集
志木市教育委員会	志木市の文化財 第12~13集
小見川町教育委員会	千葉県香取郡小見川町 織幡地区遺跡群発掘調査報告書
小平市教育委員会	鈴木遺跡範囲確認調査報告書—昭和63年度—
諏訪市教育委員会	諏訪神社上社遺跡, 武居畑Ⅱ, 一時坂
掛川市教育委員会	高田遺跡発掘調査概報, 中原遺跡発掘調査報告書, 三十八坪横穴 群A群発掘調査報告書
長久手町教育委員会	特別展 長久手の中世—その城館跡を中心に—
一志町教育委員会	一志町埋蔵文化財調査報告 7・9・11
志賀町教育委員会	志賀町埋蔵文化財調査報告書 第3集
大阪府教育委員会	文化財資料展示室だより No.26
豊中市教育委員会	豊中市文化財調査報告 第22集, 豊中市制施行50周年記念 歴史 と文化シンポジウム—邪馬台国から倭の五王へ—
天理市教育委員会	樫本高塚遺跡発掘調査報告書
高取町教育委員会	高取町文化財調査報告 第7冊
総社市教育委員会	総社市埋蔵文化財発掘調査報告 7
下関市教育委員会	長門国分寺
春日市教育委員会	春日市文化財調査報告書 第19集
唐津市教育委員会	唐津市文化財調査報告 第25~33集
大分県教育委員会	大分県文化財調査報告 第76輯, 昭和62年度 大分県内遺跡詳細 分布調査概報7, 塩屋伊豫野原遺跡
えびの市教育委員会	えびの市埋蔵文化財調査報告書 第4集
八戸市博物館	博物館だより No.11
秋田県立博物館	博物館ニュース No.74
国立歴史民俗博物館	歴博 第33号
流山市立博物館	職人の道具
船橋市郷土資料館	資料館だより 第44~45号
成田山霊光館	なりた No.44, 図録「成田山ゆかりの人々」
調布市郷土博物館	調布市郷土博物館だより No.30, 郷土ウォッチング No.2, 展示解説シート No.4~6,
出光美術館	出光美術館館報 第63~64号
茅ヶ崎市文化資料館	資料館だより No.68

小松市立博物館	小松市立博物館だより 第40号
山梨県立考古博物館	山梨県立考古博物館だより No.17
岐阜県博物館	岐阜県博物館だより 第38号
土岐市美濃陶磁歴史館	隠居西窯発掘調査報告書
浜松市博物館	浜松市博物館だより No.25, 浜松市博物館館報 I
沼津市歴史民俗資料館	資料館だより 84
高島町歴史民俗資料館	高島の民俗 第62号
野洲町立歴史民俗資料館	常設展示図録, 大岩山出土銅鐸図録, 野洲町歴史探訪ガイドブック 野洲町物語
兵庫県立歴史博物館	兵庫県立歴史博物館ニュース No.25, わたりやぐら 第11号
神戸市立博物館	博物館だより No.27
西宮市立郷土資料館	西宮市立郷土資料館ニュース Number 4
島根県立八雲立つ風土記の丘	八雲立つ風土記の丘 No.93~95
(財)日本はきもの博物館	日本はきもの博物館だより 33
善通寺市立郷土館	善通寺市史 第1巻
福岡市立歴史資料館	福岡市立歴史資料館研究報告 第13集, 福岡市立歴史資料館年報 No.16(昭和62年度)
佐賀県立博物館	佐賀県立博物館・美術館調査報告書 第13集
山形大学人文学部山形史学会	山形大学史学論集 第9号
國學院大學考古学資料館	國學院大學考古学資料館紀要 乙益重隆先生古稀記念号 第5号
早稲田大学所沢校地埋蔵文化財調査室	早稲田大学所沢校地埋蔵文化財調査報告書 お伊勢山遺跡の調査 第3部(縄文時代)
明治大学考古学博物館	明治大学考古学博物館館報 No.4
愛知学院大学文学部	愛知学院大学文学部紀要 第18号
滋賀大学教育学部	滋賀史学会誌 第7号
大阪大学文学部	待兼山論叢 第22号
大谷女子大学資料館	大谷女子大学資料館だより No.38~39, 大谷女子大学資料館報告書 第18~20冊
別府大学付属博物館	別府大学付属博物館だより No.31~32, 宮地前遺跡
調布市遺跡調査会	調布市埋蔵文化財調査報告 22・25
徳丸高山遺跡調査団	徳丸高山遺跡調査報告
毎日新聞社	仏教芸術 182号
ジャパン通信社	文化財発掘出土情報 74号
国立国会図書館	日本全国書誌 No.1688
(株)名著出版	歴史手帖 第185~186号
(財)古代學協會	古代文化 第361~363号, 土車 第48号

和泉丘陵内遺跡調査会	和泉丘陵内遺跡発掘調査概要 VI
妙見山麓遺跡調査会	神戸市北区長尾町 宅原遺跡・宮之元地区の調査(1986)
帝塚山考古学研究所	第2回 考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状
朝鮮学会	朝鮮学報 第129～130輯
和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所	紀伊風土記の丘年報 第15号
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 29号
国立扶餘博物館	国立扶餘博物館古蹟調査報告 第2冊
(財)京都文化財団	京都文化博物館(仮称)研究紀要 朱雀 第1集, 京都文化博物館(仮称)調査研究報告 第1～3集
京都市文化観光局文化財保護課	京都市の文化財—京都市指定・登録文化財 第6集—
京都府立丹後郷土資料館	丹後郷土資料館だより 第17号, 丹後郷土資料館収蔵資料目録第3集, 丹後郷土資料館報 第9号(1988)
京都府立総合資料館	総合資料館だより No.79
(財)京都府文化財保護基金	改訂増補 文化財用語辞典, 文化財報 No.64
(財)京都市古文化保存協会	会報 第66号
京都国立博物館	昭和62年度 京都国立博物館年報
向日市文化資料館	向日市文化資料館報 第4号
宇治市歴史資料館	昭和62年度 宇治市歴史資料館年報
京都大学文学部考古学研究室	樺井大塚山古墳と三角縁神獣鏡—京都大学文学部博物館図録—
仏教大学図書館	鷹陵史学 第14号
京都橘女子大学	京都橘女子大学研究紀要 第15号
精華町文化財愛護会	文化財愛護会だより 第6号
賀川光夫	熊本県文化財調査報告書 第100集
中野智照	郡家町文化財報告 10

— 編集後記 —

六月になり、むし暑い日々が続きますが、情報32号が完成しましたのでお届けします。

本号は、新年度最初の情報ですので、今年度の予定と昨年度の調査成果をまとめて掲載しました。それ以外では、昨年度の調査のうち、特に成果のあがった上人ヶ平遺跡の埴輪窯と遺跡で出土しました蓋形埴輪について紹介しています。他府県の例とも比較しており、調査結果の中間報告として掲載しました。また、昨年話題になりました私市円山古墳出土の遺物につきましては、今回は甲冑をとりあげました。よろしく御味読下さい。 (編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第32号

平成元年6月26日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)